



# 大白蓮華

*The Daibyakurenge*

No.746|2012

2

か よう せい しゅん ほが  
華陽の青春は朗らかなり

創価学会名誉会長

池田 大作

勝利 咲く

幸福のスクラム

女子部かな

尊き使命に

功德溢れむ

「文明とは何か?」——この大きな

な問いに、アメリカ・ルネサンスの

哲人エマソンは、きつぱりと答えた。

「それは、良き女性の力なり」と。

女性の声が朗らかに響き、女性の

智慧が伸びやかに発揮される。そこ

にこそ、人類の文明の光はあるのだ。

ああ、若き華陽の乙女たちの乱舞

は、何と大いなる希望であろうか!

今、私と妻の何より心弾む喜びは、

日本中、世界中で、花の女子部が澁

刺と躍動して、平和と幸福の連帯を

広げてくれていることだ。

昨年二月に大地震に見舞われた二

ユージーランドでも、日本の東北と

同じように、わが女子部の真剣な祈

りと行動が、皆に勇気を贈っている。

学会創立の日には、首都ウエリント

ンの国会議事堂で、オセアニアの華

陽会の総会が清々しく開催された。

一昨年、震災に襲われた南米チリ

の女子部からも、友情の輪を大いに

広げ、白蓮グループも鼓笛隊も倍増

しましたとの便りを頂いている。



新たな「二月闘争」の勝利を! ——若き池田名誉会長が、蒲田支部幹事として何度も渡った懐かしき丸橋。  
 眼下に流れるのは多摩川(池田名誉会長撮影)

「女子部は教学で立て」とは、永

遠の指針である。正しき仏法の明鏡

を心に持った女性は、いかなる濁世

にも惑わず、いかなる苦難にも負け

ない。友と研鑽し合いながら、価値

ある青春を聡明に進んでいけるのだ。

女子部時代に学ぶ御書30編の一つ

「一生成仏抄」には「妙法と唱へ蓮華

と読まん時は我が一念を指して妙法

蓮華経と名くるぞと深く信心を発す

べきなり」(383頁)と仰せである。

女子部の一人一人が、最も尊貴な

仏であり、妙法蓮華の当体である。

ゆえに、人と比べて自分を卑下して、

クヨクヨする必要など、全くない。

現実げんじつは、思うおもようにいかないこと  
や自信じしんを無くなすこともあるだろう。

しかし、目めと耳みみと口の三重さんじゆう苦くを乗の  
り越こえて、社会しゃかい貢献こうけんを貫つらぬき通とおした、  
あのヘレン・ケラーつづも綴つづっている。

「失敗しつぱいは一生いっしゆうの充実じゆうじつを勝かち誇ほこる勝しょう  
利りの証しょう拠こである」と。

いわんや、変毒へんどく為薬いやくの妙法みょうほうに生いき  
抜ぬく乙女おとめは、どんな苦くるしみも、必かなず  
楽たのしみに転てんじていくことができる。

恩師おんし・戸田城聖先生いは言いわれた。

「悩なやみのない人なんなどいない。何なんで  
も祈いのりに変かえるんだよ。祈いのりは、誰だれ  
もが善ぜんと幸福こうふくへ向こう上じやうしていける究極きゆうごく  
の力ちからだ。祈いのれば勝かちだよ」と。

信心しんじん強つよき女子部こしぶが、一人ひとり、快活かいかつに  
立たち上あがれば、家庭かていも、職場しょくばも、地ち  
域いきも、明あかるい希望きぼうの活かつ力りよくが広ひろがる。

私つまの妻つまも、あの六十年前かまたしの蒲田支  
部ぶの「二月闘争とうそう」に、支し部ぶ婦人部ふじんぶ長ちやう  
である母ははを支さえながら、女子部こしぶの班はん  
長ちやうとして懸命けんめいに奔走ほんそうした。

友人ゆうじんたちとの仏法ぶつぽう対話たいわに生いき生いき  
と励はげむとともに、実家じつかでの座談会ざだんかいに  
職場しやうばの上じやう司しを案内あんないしてもいる。お母かあ  
さん方がたと集つどってきた幼子おさなごたちも笑顔えがお

で迎むかえ、学がく会かい家け族ぞくの思おもい出でを刻きざんだ。

大だい事じなことは、勇ゆう気きの一いっ歩ぽである。

今いま、自分じぶんができることことから、一日いちにち  
日ひ、一つ一つひとつひとつ、挑ちやう戦せんしていくことだ。



そこに、どんな試練にも押しつぶされぬ無限の仏の力が湧き出でる。その積み重ねが一生の幸福の土台となる。これが華陽の青春である。

「自他共に智慧と慈悲と有るを喜とは云うなり」(761頁)

この歡喜の哲学を胸に、創価の乙女たちよ、互いに励まし合い、支え合いながら、勝利の春へ「心の財」を積みゆけ！

おおぶたい  
大舞台

まいにまいに  
舞いに舞いゆけ

あきらかに  
朗らかに

わたしも  
私も見つめむ

いのねが  
祈り願いて

創価の乙女は希望の大光——女子部の成長と勝利と幸福を祈り、温かな励ましを送る池田名誉会長(2007年1月、聖教新聞本社)



# 未来を創る

「池田名誉会長と未来部」

## みんな大樹に



昭和44年10月の記念撮影から10年目——。再会を祝い、駆けつけてきたメンバーと再び記念のカメラに納まる池田会長



### 約

束した通り、香川少年少女合唱団のメンバーとお会いしよう。みんな、元気にしてるかな？——昭和53年12月、香川を訪問された池田先生から、そう提案があった瞬間、私の胸は感動でいっぱいになりました。

9年前のあの日の光景が、鮮やかによみがえり、熱いものが込み上げてなりません。忘れもしません。昭和44年10月のことでした。池田先生を迎えて行われた四国幹部会の席上、「香川少年少女合唱団」の代表が、元氣いっぱい、歌を披露しました。会合終了後、当時、

四国少女部長だった私の耳に予想もなかった朗報が。先生の提案で、合唱団メンバーと直接、会ってくださることになったのです。

会場に入られるや、先生は、記念撮影をしてくださいました。皆の顔をじっと見つめながら、「みんな、いい子だね」と言って、一人一人と握手をしてくださったのです。

先生は言われました。「みんなの中から、大材が育っていく、私はそう確信しています。10年後にまた会おう。みんな、立派な人になりなさい」と。「10年後」「また会おう」——先生は、小さな子どもたちの心に、大きな希望を届けてくださったのです。

あれから10年目——当時の合唱団メンバーは、先生のいらっしやる四国研修道場に駆けつけてきました。一方、先

生は、この日この時を、一日千秋の思いで待つておられたかのように、皆を心から歓迎されたのです。「みんな、大きく変わったなあ」。先生は、立派に成長した青年の姿に目を細めておられました。

再会を記念し、再びカメラに。その時、先生は、力強い声で、こう言われたのです。「まっすぐに伸びなさい。まっすぐ伸びて、みんな大樹になるんだよ」と。先生は、彼らの心に大きな希望を灯してくださいました。決意に燃えた彼らが、その後、広布の最前線で、また各界のリーダーとして、大成成長していったことは言うまでもありません。少年少女と交わした約束は断じて守る！先生の誠実に思いを馳せるたび、私の胸は熱くなるのです。

（四国婦人部総会長 小野洋子）

2 巻頭言

# 華陽の青春は朗らかなり

池田大作

6 未来を創る 池田名誉会長と未来部

8 長編詩 希望は人生の宝なり 池田大作

14 企画「創立80周年から100周年へ」

# 世雄たれ大学会⑤

—— 沖縄の最強の希望となれ！

38 池田名誉会長講義

# 勝利の経典「御書」に学ぶ

椎地四郎殿御書

52 あしおと 使命の道 親の背中

拝読御書の解説

# 妙一尼御前御消息

# 観心本尊抄

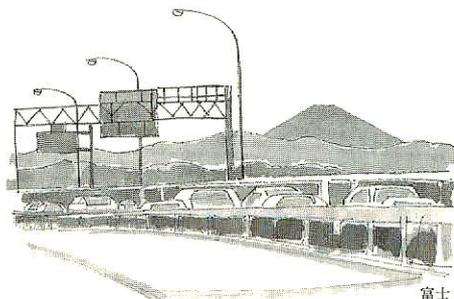
拝読御書の背景と大意

座談会 拝読御書

新入会の友と語る座談会御書

御書講義

研修教材



富士 画ノ坂上楠生

74

婦人部グループ学習の参考に  
聖人御難事

社会で光る

誌上セミナー

# 再発見 心発見

ジャズ・ミュージシャン／トランペッター 大野俊三さん

シリーズ

# POWER TO THE PEOPLE!

# 青年は変革力

人に尽くしゆく青春

語る——志村康洋 株式会社 京王プラザホテル 代表取締役社長

挑む——私のチャレンジ・ノート

学ぶ——池田名誉会長の言葉から

池田大作 監修

# 報恩抄②

現代語訳 教学部編

読者の広場

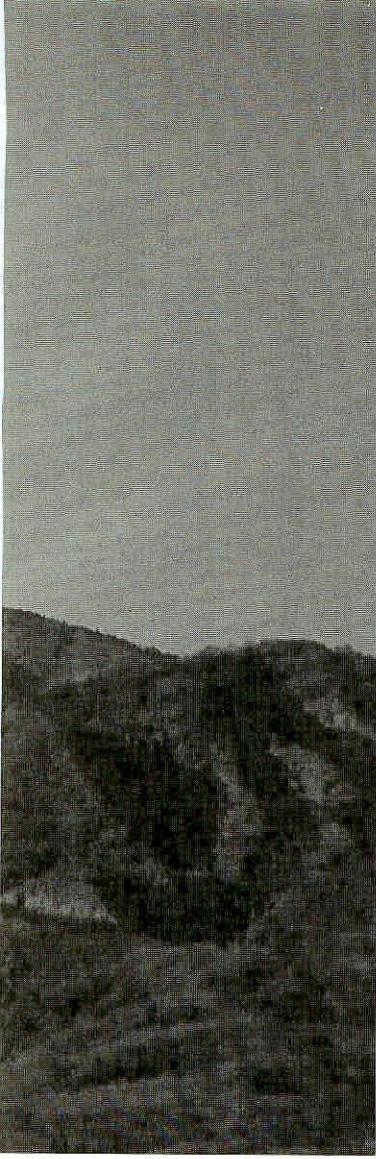
116

100

86

80

78



いかなる烈風にも揺るがず、堂々とそびえ立つ白雪の富士。我らも不滅の希望の哲学を胸に、王者のごとき人生を―(池田名誉会長長撮影)

# 希望は 人生の宝なり

たから

## 池田大作

希望は

人生の宝なり。

常に

希望を持てる人は

幸いなり。

どんな財宝を持ち

どんな権勢を持ち

どんな名声を持つとも

希望を見失った人生は

早々と挫折していくに

違いない。

古代ローマの哲人



キケロは言った。

「重要なのは、

金銭きんせんよりも希望きぼうだ。

希望きぼうが潰つぶえれば、

残のこりのものも、

いくら積つみ上げても

いずれ失うしなわれることにな

るだろう」

希望きぼうの人を侮あなどる傲慢ごうまんは

やがて

後悔こうかいの落伍者らくごしゃとして

落おちてしまうであろう。

希望きぼうに輝かがやく

この一生を

台無しにしては

絶対にならない!

希望は

人生を励ます宝石である。

希望のある限り

人間には行き詰まりがない。

そこには

常に勝利が待ち

喜びの笑顔が広がっている。

私と妻の忘れ得ぬ友である

気高きアフリカの環境の母

マータイ博士は語った。

「希望は花のようである。

どんな状況においても

誰が見ていようがいまいが

花は精一杯、咲き誇る。

人間もまた同じである」と。

希望は

努力と忍耐に咲く花である。

希望は

陰徳を積みゆく人の

誇り高い陽報なのである。

希望に

生き抜く人には

墮落がない。

惰性がない。

悩める友に

希望を贈りゆく

貢献の日々には

成長がある。

充実がある。

向学がある。

創造がある。

連帯がある。

「闇が深いほど

光が明るくなるように、

苦しみが募るほど

強くなるのが

ほんとうの希望」とは

スペインの大家

セルバンテスの叫びであった。

希望は何ものにも負けない

不屈の旗である。

人生は戦いだ。

来る年また来る年を

どのように強く朗らかに

生き抜くかである。

創価の父・

牧口常三郎先生と

交友を結んだ

東北の偉人・

新渡戸稲造博士が

断言した如く

最も暗い悲哀の中でさえ

希望は見出せる。

その希望は

「信仰」と「勇氣」の

心眼によつてこそ

見えるというのだ。

牧口先生は

法難の獄中にあつても

「心」一つで地獄にも

楽しみがあります」と

悠然と綴つておられた。

この殉教の師に対して

弟子である戸田城聖先生は

「あなたの慈悲の広大無辺は

私を牢獄まで連れていって

くださいました」と

感謝を捧げられたのである。

第三代の私は

あまりにも峻厳な

この不惜身命の

師弟の大道を

まっしぐらに

走り通してきた。

師匠が

思い抱かれた希望は

すべて

命を賭して実現した。

晴れ晴れと

一点の悔いもない。

御聖訓には仰せである。

「大闇をば日輪やぶる」と。

勇気ある信仰こそが

大いなる希望の太陽なのだ。

正義に徹する師弟は

試練の逆境を下に見て

生命の究極の光を

永遠に放ちゆくに違いない。

無限の希望！

これが妙法である。

無限の境涯！

これが信心である。

法華経には

心広々と説かれている。

願わくは

此の功德を以て

普く一切に及ぼし

我れ等と衆生とは

皆な共に仏道を成ぜん」と。

広宣流布こそ

全人類を

平和と幸福の大境涯に

高めゆかんとする

無上にして壮大なる

希望なのだ。

ああ

希望！ 希望！ 希望！

希望は人生の宝なり。

新しき一年も

新しき一日も

我らは

元初の太陽を胸に

明るい希望きぼうに燃もえて  
出しゅつ発ぱつする！

いかに深ふかき乱らん世せの混こん迷めいも

決けつ然ぜんと打うち破やぶつて

みみずから希き望ぼうを創つくりゆゆくのだ！

ああの友ともにも

ここの友ともにも

絶ぜつ対たい勝しょう利りの希き望ぼうを贈おくりなながら

我われららは勝かち進すすむのだ！

フフラランススの行こう動どうする知ち性せい

ロロマンン・ロロランンは言いった。

「こんじちちのさいごごのきぼうぼうは

青せい年ねんたたちちにある」

今いま 私わたしは高たからかに宣せん言げんしたい。

「未み来らいの最さい強きょうの希き望ぼうは

創そう価かの青せい年ねんたたちちにある」と。

君きみよ

貴あなた女なよ

決けつして負まけるな！

いいかかなる

艱かん難なん辛しん苦くがあろうとも

金こん色じきに輝かがやき希望きぼうの光ひかりを

断だんじて忘わするるな！

おおお 君きみたたちちよ

私わたしが心こころから信しん頼たのし

愛あいする君きみたたちちよ

希き望ぼうに生いき抜ぬくのだ！

断だん固こと勝かち抜ぬくのだ！

二〇一二年一月二日

八十四歳の誕生日に

世界平和詩人

キケロの言葉は根本和子訳。セルバンテスは  
荻内勝之訳。ロランは山口三夫訳。

沖繩は揺れていた。未来が見えなかった。  
池田会長は光のごとく、青年に希望を燃え上がらせる。  
力をつけよ！ 私がいるじゃないか！——



企画 | 「創立80周年から100周年へ」

# 世雄たれ大学会<sup>5</sup>

——沖縄の最強の希望となれ!

いしずえ  
礎は深くふかく  
がん  
てい  
ほ  
岩底まで掘らねばならぬ

ハイビスカスの花言葉は「勇  
敢」。美しく悠然と咲く姿は、  
沖縄の心意気

## 師の詩とともに！

昭和44年「建設の年」は、詩とともに明けた。

「建設の譜」――。

1月1日の聖教新聞1面に掲載された、池田会長の詩である。

「おお 煌然として

太陽はのぼる

新しき生命の

鼓動にあわせて

……」

そして、その年、初めて刷られた聖教新聞（4日付）の1面には、「無冠の友よ」の詩が――。

「君らこそ 僕は頼りなのだ

われらの柱なのだ

広布のエンジンなのだ

……」

詩は心を揺さぶる。心が伝わる。詩からほとぼしる情熱と哲学が、

決意となり、指針となった。

『建設の年』の大勝利の因は、

実に、伸一の、年頭のこの詩にあった」（小説『新・人間革命』）

「建設の譜」は訴える。

「永遠に崩れない礎を

いまこそ 築こうではない

か！」

「礎は 深く ふかく

そして 岩底まで

掘らねばならぬ」

では、築くべき未聞の歴史を開

く「礎」とは何か。

「無冠の友よ」は訴える。

「歴史を動かす

創っていくのは

一人の 英雄ではない

生命をかけて戦う

陰の人なのだ」

会長の焦点は「陰の人」にあっ

た。誰が見ていようといまいと、

周囲がどうであれ、自ら進んで戦

い抜く、「陰の人」を育てること

にあった。その人こそ歴史建設の

主体者なのだ。

## 沖縄は揺れていた

昭和44年の沖縄は揺れていた。

戦後、アメリカによつて半ば力

ずくで基地や施設が建設されてい

った。

米軍兵士による悪質な事故や事

件も頻発した。

住民は、アメリカの施政に落胆

し、本土復帰（日本復帰）は悲願

となつていく。

昭和42年8月、戦後、初めて日

本の首相が沖縄を訪問。沖縄の

復帰が実現しない限り、戦後は終

わつたとは言えない」と語り、県

民は期待を寄せた。

しかし、ベトナム戦争の激化に

伴い、爆撃機の出撃基地および後

方支援基地として、米国にとって

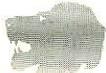
の重要性が高まっていた。

翌43年2月、住民から「黒い殺

し屋」と忌み嫌われる戦略爆撃機

B52の常駐が始まった。B52は直

企画「創立80周年から100周年へ」  
世雄たれ大学会⑤



前の1月にグリーンランドで放射能汚染を伴う事故を起こしたばかりだった（核爆弾を積んだまま海上に墜落）。しかも11月には嘉手納でも墜落。爆発、炎上する事故が起こってしまう。住民の激しい怒りが燃え上がった。

◆証言（上原正守さん）

昭和44年の元日、聖教新聞の1面に、池田先生が「建設の譜」を

掲載してくださいました。

詩とは、こんなにも人の心を震わすものなのか。体が震えるような感動を覚えました。特に、「破壊は一瞬、建設は死闘」の一節は私たちの合言葉になりました。

当時、沖縄の本土復帰がどうなるかわからず、未来への不安も渦巻き、日本の指導者への不信と失望と怒りが、多くの学生の心の中

に広がっていました。

「建設の譜」には、「清浄楽土の新社会」の建設が訴えられていました。まさに私たちが進むべき未来を語ってくださいているように思えてなりませんでした。

しかし同時に、詩には、ギリシヤ、ローマ、エジプトなどの古代文明が「ことごとく、幾世の流転と変貌の跡を留めて滅びゆく」

これを話すために  
私は沖縄に来たのです！





と歴史の濁流に消えていったことが詠まれています。

ならば、私たちが建設する「新社会」とは何か？ どうすれば築けるのか？——沖繩の同志が、その答えを心から求めていたのです。

一番、大変なところへ！

昭和44年2月15日午前10時半過ぎ、池田会長は揺れる沖繩に降り立った。

前日から天を覆っていた雨雲は消え、カラリとした南国の太陽が姿を見せていた。

「一番、『大変な時』に、『大変なところ』から始める。ここに偉大な歴史が開かれる。本当の歴史

が始まる」とは、会長の一貫した行動である。

100人、集まるかい？

昭和44年2月16日——。琉球大学、沖繩大学、国際大学（当時）の卒業生と在学生の代表が那覇市内の会場に集った。

3大学を合わせて96人——。それまで結成された大学会に比べて異例の大所帯である。

それには訳があった。沖繩創価学会の責任者（総長）であった故・三盛洲洋さんはこう語っていた。

「昭和43年8月、学生部の夏季講習会の折のことです。

出迎への友に手を振って応える。地元紙が「一度も見たことのない沖繩県民の喜びの表現」と報じた（昭和44年2月15日、那覇空港）

企画「創立80周年から100周年へ」  
世雄たれ大学会⑤

池田先生は、沖繩方面の学生部書記長に就任したばかりの私に、こう言われました。

『来年、沖繩に行くよ。その時、大学会を結成しよう。三盛君、100人、集められるかい？』と。

とつさのことで驚きましたが、私は、『はい、集めます』と、決意を込めて答えました。

沖繩の大学会結成の構想は、前年から始まっていた。

◆証言（桃原正義さん）

「桃原君、大変なことになったぞ。来年、池田先生が沖繩に来られる！ その時に大学会を結成していただけのことになったんだ」——三盛さんが、息を弾ませなが

ら、そう言ったのを、まるで昨日のこのように覚えていきます。

そのころ、三盛さんは、学生部の第1部の部長を兼任。私は第3部の部長でした。

夏季講習会から戻り、すぐさま活動を開始。対象にしたのは、琉球大学、沖縄大学、そして国際大学のメンバーでした。

「100人」——これが、先生の構想でした。

何としても、応えていこう——。懸命に祈り、語り、戦い抜き、当日には、3大学96人のメンバーが集まったのです。

その後のことになりましたが、あの3大学の学生会メンバーは、沖縄の各界で活躍していきましました。まさに、あらゆる分野で沖縄を支える柱となっていたのです。

「100人」——沖縄の次代を託す陣列だったと思えてなりません。



信心を貫く人が  
最後は必ず勝つのです！

## 沖縄に3大学会を結成

午後5時15分、池田会長が大学会結成の会場に姿を現した。

この日、会長は、午前10時から、沖縄高等部の鳳雛会、鳳雛グループの結成式へ。午後2時から沖縄初の芸術祭（琉球新報ホール）を鑑賞。惜しめない拍手を送り、フイナールでは、出演者、観客と共に、「沖縄健児の歌」を合唱。最後に、「沖縄を平和の幸福島とする日まで、ともどもに力の限り、前進しようではありませんか！」と約千人の参加者に呼び掛けた。約2時間半にわたる芸術祭を終え、そのまま那覇市内での3大学会の結成に駆け付けたのだ。

会長には片時の休みもなかった。会場に入場するや会長は切り出した。

「皆さんの希望があれば琉球大会、沖縄大会、国際大会を結成したいと思いますが、いかがでしょう

うか」

参加者が拍手で応える。

「それでは、正式にそれぞれの大学会を発足いたします！」

背筋をピンと伸ばし、大拍手で賛同を表す参加者たち。

会長は、そのまっすぐな決意に、応えるように語りだした。

「諸君が大成するまで、私はできる限りのアドバイスをしていきたい。それが大学の目的であり、意義です。細かいことは言いたくない」

そう前置きをし、会長は核心をズバリと語った。

「これからの10年間、信心に透徹していかない人もいるだろう。孤独に陥る人もいるだろう。異

い



沖縄芸術祭の感動のフィナーレ。「沖縄健児の歌」の大合唱が会場を揺らした（昭和44年2月16日、琉球新報ホール）

企画「創立80周年から100周年へ」  
世雄たれ大学会⑤

性問題や家庭の問題で悩み、学業から離れそうになる人もいるだろう。

しかし、信心だけは忘れてはいけない！

仏法を離してはならない！  
眼光鋭く、命を奮い立たせるような気迫が会場を包む。

「今はどんなに貧しくても、つらくても、困難があろうとも、信心を貫いていく人が、最後は必ず勝つのです！」

21世紀のリーダーよ！  
何のために信心を貫いていくのか――。

池田会長は明確な指標を訴えた。

会長は、一人一人の心を変えよ

うとしていた。

「21世紀のリーダーは沖縄出身の学生です！」

大きく言えばアジアの、さらに大きく言えば世界の、少なくともその前に日本のリーダーとなることは歴史の趨勢（ものごとの傾向）であり、力であり、運命であり、リズムになってきている。また、そうならざるを得ない。

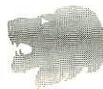
現在、最も苦闘の中にある沖縄出身の学生、沖縄健児が21世紀のリーダーになるのです！

各界のリーダーが、沖縄から出るし、出なければ大変だ。それが私の唯一の願いです。

後はじつとこらえて時の来るのを待つていきなさい。でなければ沖縄の県民の皆さんがかわいそう

卑屈になるな。

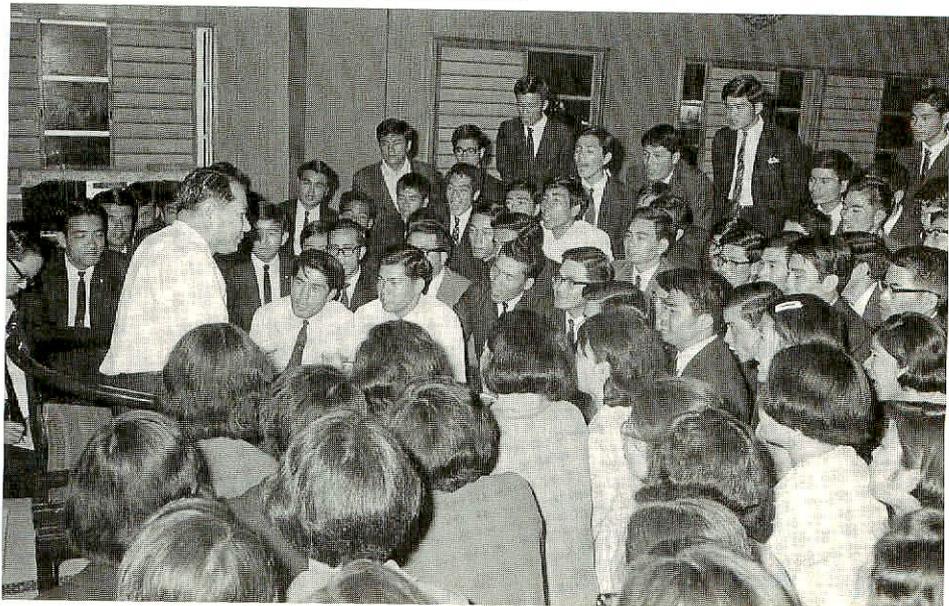
そんな根性を私は軽蔑する



企画「創立80周年から100周年へ」

世雄たれ大学会⑤

沖縄の3大学会を結成。師は全魂で一人一人の心に希望を燃え上がらせていった(昭和44年2月16日、那覇市)



じゃないか」

◆証言(桃原正義さん)

「沖縄健児が21世紀のリーダーになるのです！」との訴えに、心の底からハッとしました。

大学会の結成の5年前(昭和39年)12月2日のことです。

沖縄学生部が沖縄本部で会合を行っていたその時、会場の後ろから、「やあ、沖縄の学生部、やってるな」という声が聞こえてきました。誰だろうと振り向くと、なんと、そこにおられたのは池田先生でした。

先生は、「沖縄から、世界の指導者が出るよ!」と。そして、「皆さんの前途を祝して、今日は握手をしよう」と言われ、一人一人と握手してくださいました。

当時、入会してわずか3年目の私にとって、この沖縄の地から世界の指導者が出る、と言われても一体、誰のことなんだろう……。

ところがです。大学会結成で先



「命をかけて ひと筋に」——沖繩広布を担いゆく友を激励(昭和39年12月、沖繩本部)

生は、「21世紀のリーダーになるのです」と明言されたのです。

私たちだったのです。私たちに  
対し、新時代の指導者たれ、と期  
待されたのです。身震いするよう  
な衝撃を感じました。皆の心に  
「動執生疑(低い教えに執着する  
心を動じさせ、疑いを起こさせる  
こと)」が起きました。

大学会結成の5年前に指針を頂  
きながら、どこか他人事だった私  
たちの目を覚まさせるような指針  
でした。

その瞬間から、「今のままでは  
いけない」、でも、どうすれば  
……」。それから先生の指導を  
「一言も聞き漏らすまい」と耳を  
そばだてたのです。

### 力をつけなさい

「21世紀のリーダーに育て!」。  
そう池田会長は訴えた。

しかし、「そう言われても……」  
誰かが頑張るだろう……。

心にこびりついた、依存心や諦  
めを打ち払うかのような声が会場  
に響く。

「明治維新においても、長州  
(山口)、土佐(高知)、薩摩(鹿  
児島)の志士は貧しかった。それ  
が明治維新を成し遂げた」

今、沖縄は経済的には苦しい  
かもしれない。しかしそれが、変  
革できない理由にはならない!  
「今の日本は、無責任、虚栄、  
惰性である。」

真に民衆の幸福を願う本格派は  
創価学会だけじゃないか。  
いろんな勢力が、人民、人民と  
言っているが、人気取りの手段で  
ある場合が少なくない」

「他の何ものでもない。学会こ  
そが、真に民衆の幸福を実現する  
団体ではないか!」

「墮落と虚像の中にあつて、一  
番、苦勞した沖縄の闘士が日本の  
リーダーになっていくのが当たり  
前じゃないか!」

なぜなら、戦争の悲惨さを最も知っているからです。他国の施政権下で生きる辛酸を味わってきたからです。苦しみ抜いてきた人間にしか、民衆の心は分らない。それが妙法であり、人間革命の原理である。妙法の原理である限り、そうやっていくのです」

「奮い立たさずには、おくものか！」。会長の熱い思いが一人一人の胸を打つ。

「本土が上だと思って卑屈になつてはいけない。そんな根性の諸君ならば、私は軽蔑する。」

最後の総仕上げを諸君がしていきなさい。その力をつけていくのが今なのです。

「一緒に戦おう！」  
「はい！」。メンバーが心を一つにして返事をした。

自身を他の何ものかの下のよう  
に思うことは、一見、謙虚に見えて  
慢心なのである。なぜなら、誰  
にも、その人にしか果たせない使

命があるからだ。その弱さを会長は打ち破った。

◆証言（池間俊彦さん）

当時の沖縄県民に広がっていた根深い思いの一つとして、「私たちは本土には勝てない。沖縄は本土に比べて、さまざまな面で劣つ



「沖縄を幸福島に！」「私は、沖縄が大好きだ」(昭和44年2月、沖縄本部)

企画「創立80周年から100周年へ」  
世雄たれ大学会⑥

ている」という諦めがありました。それが、当たり前のようにさえ思いついでいたのです。  
それだけに、「卑屈になつてはいけない。そんな根性の諸君ならば、私は軽蔑する」との池田先生の言葉は、私たちの心を強く打つ

たのです。

先生は、私たちの心に巣くう「一凶」ともいっべき卑屈さを打ち破ってくださいなのです。

◆証言（上原正守さん）

脳裏をよぎった思い出がありません。私が大学1年生だった昭和39年、小説『人間革命』の執筆を沖縄本部で開始された歴史的な12月2日に、池田先生が30人ほどの学生部員会に突然、出てくださいました。

先生は、このように指導されました。

「沖縄の歴史は、悲惨であった。宿命の嵐のとき歴史であった。

だからこそ、ここから、幸福の風が吹かねばならない。平和の波が起これねばならない。

また、みんなの中から、沖縄の

出身であることを誇りとし、日本を、世界を背負うような大人材が出なくてはならない」

「諸君は、広宣流布の師子として立ってほしい。

仏法は、絶対に間違いない。まず、10年間、私についてらっしゃい」

先生は一貫して、虐げられ続けてきた沖縄に「誇りを持って」と教え続けてくださったのです。

何万倍も応援します

池田会長の火を吐くような指導が続く。

「沖縄県民のため、諸君が旗持ちとなり、突破口となりなさい！それが当然の権利でもあり、役

諸君が旗持ちとなり

突破口となりなさい

昭和39年12月2日——この小さな和室から小説『人間革命』の執筆が始まった(沖縄本部)



目です。

僕も全力を尽くして応援してください。どこよりも何千倍も何万倍も応援していきます。

時を待ちなさい。時は必ず来ます」

◆証言（川上喜広さん）

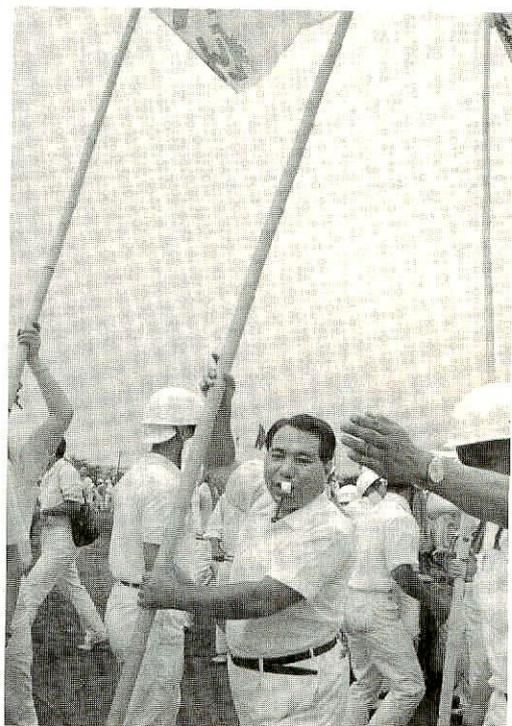
「諸君が旗持ちとなれ！」——そう池田先生が訴えられた半年後の夏季講習会でのことです。

琉球大学、沖縄大学、国際大学の学生部のメンバーが、それぞれの大学の旗を持ち、駆け足で集会が開かれる塔ノ原グラウンドに向かっていました。

私は、5メートル以上の竹竿に、縦1メートル、横1メートル50センチぐらいの布でしつらえた琉球大学の旗を翻して先頭を走っていました。ところが、その旗がとても重く、途中、何度か、地面に置いて休まねばなりませんでした。

私たち沖縄の学生部が、運営本部のある雪山坊にさしかかった、その時でした。突然、池田先生が目の前に現れ、「沖縄が来たな。よし、私が旗を持とう」と、私がつけていた琉球大学の旗を手にとって、ずっと一緒に進行してくださったのです。

重たい旗にもかかわらず、先生は一度も降ろすことはありませんでした。しかも先生は、私たちの方を向きながら、早足で歩かれた



琉球大学の旗を手に、学生とともに駆ける。両側には、国際大学（当時）、沖縄大学の旗が（昭和44年8月、静岡）

のです。まるで後ろに目があるようでした。

先生の額や首筋には、大粒の汗が幾筋も流れていました。

塔ノ原グラウンドに到着した時、先生は、私の目をキリッと見つめ、「私が、沖縄の旗を持って行進したことを、生涯、忘れてはならんぞ！」と力強く叫ばれ、手にされていた旗を、ぐっと差し出して手渡してくださいました。

君たち沖縄県人の戦いの先頭

には、いつも、いつも、私がい  
る！ いつも、いつも、君たちと  
一緒に進んでいる！——先生は  
身をもって、そう教えてくださっ  
たのです。どんなに、うれしかっ  
たことか。

「県民のため、諸君が旗持ちと  
なり、突破口となりなさい」——  
私の生涯の指針です。

### 栄光の船出の日

どうすれば、次代のリーダーと  
なっていけるのか——。

池田会長は、その焦点を語り始  
めた。

「根が強固であり、地中深く根  
を張り巡らせきつておれば、たと  
え、どんな嵐が来ようとも、桜は  
春になれば満開になるのは当然じ  
やないか。

諸君がぐんぐん成長していくの  
は幹が太くなり、枝が繁っていく  
ことなのです。しっかり頼む」

「根っこ」が大事である、と会



沖縄平和記念墓地公園を彩る緋寒桜。近隣では日本一早い「桜祭り」が行われる

# 根が強固であれば 桜は春に満開になる

長は訴えた。

「根っこ」とは基礎である。

若い世代にとつては、知力、精神力、体力、経済力、そして信仰も、友情も……あらゆる分野の力である。その盤石な人生の土台にこそ満開の桜は咲くのだ。

そのために、今は力をつけてほしい！——会長の訴えは祈りにも似ていた。

「10年、20年、30年、50年先を  
目指して、時を待て！」

偉くなれ、うんと偉くなれ、じつと時を待ちなさい。焦ってはいけない！

「はい！」

「きょう2月16日は、日蓮大聖人のお誕生日であり、その意義ある日を、栄光の船出の日にしたんだ。」



企画「創立80周年から100周年へ」  
世雄たれ大学会⑤

「一緒にやろう！」

「はい」

「頼む！」

「はい！」。まさに阿吽の呼吸で返事が跳ね返る。

「何年かかろうが、私は真剣に諸君一人一人を必ず分かつていきます。たとえ諸君が自分のことは分かってももらっていないだろうと思っても結構だ。けれども私は必ず分かつていきます。」

未来を開くためだ。人材育成という大芸術として仕上げるのです。これが私の半生の仕事です。本門の中の本門の仕事なのです。

これを諸君に話すために私は来たのです——そう言つて、会長は皆を側に呼んだ。

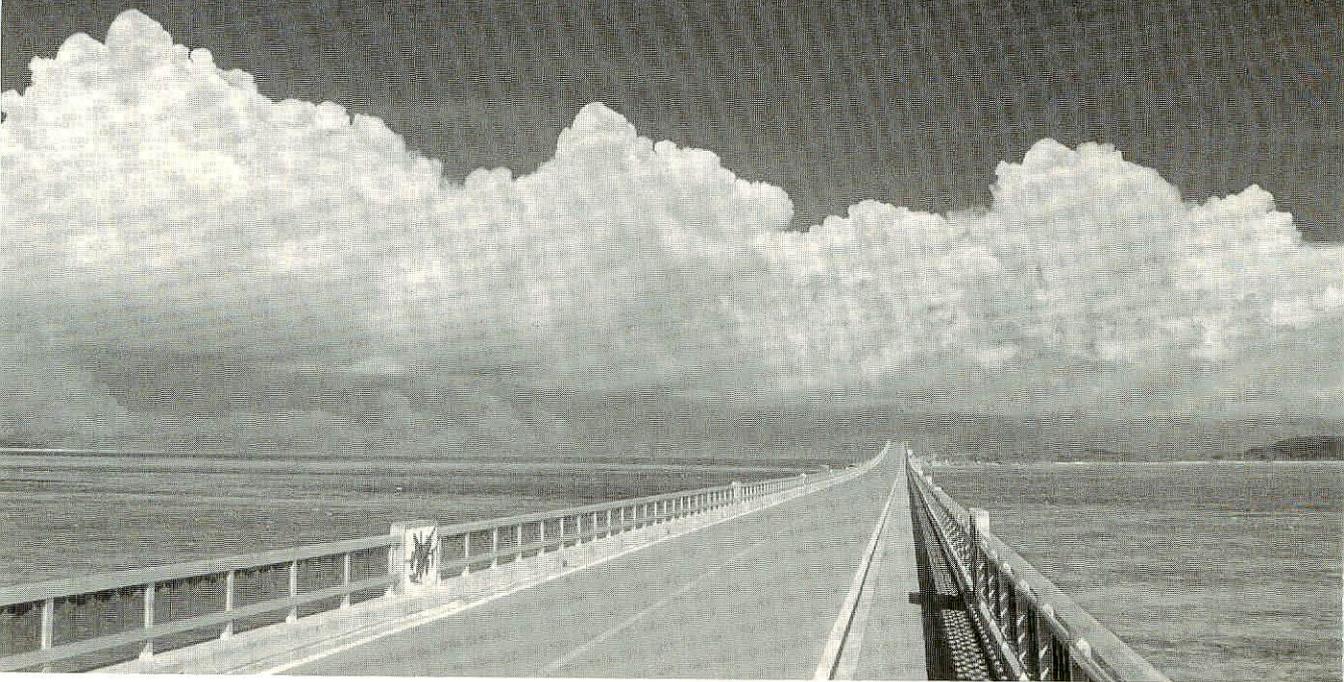
「さうだ！と胸を張れ」

池田会長との懇談が始まった。

一斉に質問の手が挙がる。

皆、真剣だった。

最初に指名されたのは夜間（二



部)の大学に通う学生だった。

「今、先生は、『21世紀のリーダーに』と言われましたが、私たちが夜間の学生は仕事と学業と学会活動をどのようにやっていけばよいのでしょうか？」

会長は精魂を注ぎ込むように語つていった。

「今が時です。」

力をつけていきなさい。

死闘です。三つとも全力を尽くして、やり切つていきなさい。

今は、うんと悩んでいきなさい。悩むところに成長がある。悩み抜くところに人間形成がある。それが指導者の血肉になるのです。それが君の生涯の財産です。

私は30歳まで生きられない病弱な体であつた……」

会長は自身の若き日の苦闘を語り、そして訴えた。

「何不自由ない家庭環境での勉強よりも、便所の中、電車の中、大変な中で学んだ方が、本当に血

# 私は青年の 独創性に期待する！



肉となる勉強ができるのではない  
かい。頑張りなさい」  
「はい！」。質問した学生の目が  
輝いた。

## ◆証言（池間俊彦さん）

懇談となった時、私は思わず、  
池田先生にこう言いました。「自  
分も大学院に行きたいのですけれ  
ど、語学に疎いのです」と。

先生は、私の質問の背景にある  
考えを瞬時にとらえ、こう指摘し、  
指導してくださいました。

「必ずしも、大学院に行かなけ  
れば『21世紀のリーダー』の資格  
がないと思うのは、大きな間違い  
です。

あなたには信心があるではない  
か。御本尊があるではないか。何  
百万の同志が支えてくれているで  
はないか。

上の学校に行けば、学歴があれ  
ば、指導者になれる。そういう先  
入観はいけない。沖繩の諸君は民  
衆を睥睨（にらみつけて威圧する  
こと）するようになりリーダーになっ  
てはならない。絶対にいけない。  
面をあげ、胸を張り、堂々と日  
本をリードしていきなさい。

この沖繩から、博士、大作家、  
大芸術家、広布の大人材を陸続と  
輩出し、どうだ！ と内外に見せ  
しめて、私の生涯を終えたい。そ

迷わず進め！ 青年ならば。  
まっしぐらに進め！ 不二の道を

企画「創立80周年から100周年へ」

世雄たれ大学会⑤

れまで長生きしようよ！」  
この瞬間、学歴にとらわれてい  
た自分を恥じました。

そして、私は一生を決めたので  
す。私には先生がいる。共に戦い、  
生きて生きて生き抜こう！ 師匠  
がいる。それ以上の誇りなどある  
ものか！ と。

## ◆証言（上原正守さん）

私は、「沖繩の私たちが築いて  
いくべき、未来の具体像を教えて  
ください」と質問しました。

池田先生の答えに電撃が走りま  
した。

先生は、「それは、諸君たちが  
つくっていきなさい。つくってい  
くべきだ！」と断じられたのです。  
「私なりの21世紀の未来像は持  
っている」と語られながら、「私  
は、青年の独創性に期待するの  
です」と、どこまでも私たちを信じ、  
期待してくださいましたのです。いや、  
それ以上に、先生は沖繩で育って  
きた私たちが、本気になって立ち

# 「私はこうだー」と主張できる人が私は好きだ

上がってこそ、沖縄の未来が開ける、と指導されたのです。

自信をもって話しなさい

吃音のメンバー2人が、その悩みを打ち明けた。

池田会長は訴えた。

「私はこうだ！」と主張できる人が、私は好きだ。

そういう人は、他人からも好かれるものだ」

そして2人を前に呼び、机にあったジュースを勧めた。

「折伏をしていきなさい。絶対に治る。折伏して、人に笑われたなら、それだけ罪障消滅していけるんだよ。

『人の地に依りて倒れたる者の返つて地をおさへて起が如し』

(552頁)だよ。意味は、わかるね」

「はい」。2人がピタリと声を合わせた。2人の顔は決意に輝いていた。

願いついていきなさい

一人の男子部のメンバーが立ち上がり、決意を述べた。

「自分は部長になって半年になります。将来、1000人の組織を建設していきます」

すると池田会長は、身を乗り出すように語り始めた。

組織を守り、拡大するには最も大切な焦点がある。

「題目だよ。題目をあげなさい。今、人を守っていくことが、後になって、人に守られることにな

企画「創立80周年から100周年へ」  
世雄たれ大学会<sup>⑤</sup>

シークワサーの実。春に純白の花を咲かせる



る。  
仮に、日本中の人を折伏すれば、来世はそれだけの人々が味方になって、支えてくれるんだよ。  
仏法を実践すれば、必ず結果が出る。証拠です。その証拠は必ず今世に現れます。

今、人を守つていけば  
後に、人に守られる



「満々と 師弟の共戦 今日も勝て」(昭和44年)



二セモノは必ず人が離れていく。信じて苦勞した人からは、絶対に人は離れていきません。必ず守られていくのです」

◆証言（比嘉京子さん）

当時、私は女子学生部の部長でした。しかし、なかなか折伏が進みません。どこか事務的になり、形式的な打ち出しになってしまいう自分がいました。その悩みを池田先生に質問しました。

先生は優しく、「折伏がうまくいかない。なかなか言うことを聞いてくれない部員さんがいる。全

部、分かっているよ。私も、一番大変なところで、一番苦しい戦いばかりをやってきました。しかし、題目を唱えていったら、必ず解決します」と言われました。

ハツとしました。部員さんを動かすための策や方法を教わろうとしている自分に気付いたので。

先生は続けて、題目が根本であることを教えてくださいました。

「もちろん、今日、題目をあげて、明日、すぐに良くなるということはありません。朝、お母さんに怒られても、晩

朝、お母さんに怒られても、晩

企画「創立80周年から100周年へ」  
世雄たれ大学会⑤

になれば忘れてしまうだろう。そのようなものだ。

一度、決意して、すぐできるようになるのであれば、御本尊は必要ないよ。

だから、自分がこうすると決めたら、どこまでも願いい切っていくなさい」

そして、私が付けていた花飾りに気づかれました。私はうれしくなってしまう、「先生に頂きました」と言いました。

前年の夏季講習会（静岡）で、部旗を授与されたメンバーみんなにくださった品だったからです。

先生は、「まだ持つていてくれたのかい。見覚えのある花だと思っていたんだ。そんなに大切にしてくれるのなら、もっといいのをあげればよかったね」と笑顔で言われました。

先生は部員さん一人一人を大切にすることを、自らの振る舞いで教えてくださったのです。

以来、題目根本に、部長さんと共に折伏に励みました。その結果、1カ月で14世帯の弘教が実ったのです。

先生の指導通りに戦えば開ける。生涯の指針をいただいたのです。

### 3度の呼び掛け

池田会長の呼び掛けで記念撮影が始まった。

何人かが時計を見て驚いた。すでに2時間半以上が経過していた。撮影の合間だった。

会長は女性のメンバーに語り掛けた。

「私は、皆さんを妹のように大切に思っております。みんなを幸福にしてあげたいんだ。

私についてきなさい。みんな、

ついてこれますか？」

「はい」と声が跳ね返る。再び会長は呼び掛けた。

「ついてこれますね！」

「はい」

「今、どんなにきらびやかな服装をしている人も、信心をしない人は——」、会長は、そう言つて手のひらで自分の胸をポンポンと叩きながら、「ここが、どうしても蝕まれていく。やがては、身を滅ぼしてしまふ——」。

そして三度、呼び掛けた。

「しっかりと、ついていらつしやい！」

「はい！」

皆、心の底から声を出した。

◆証言（上江洲ひでみさん）

「ついていらつしやい！」との

しっかりと、私に  
ついていらつしやい！



太陽の花ハイビスカス。青年の心には情熱の太陽が輝く

# 頑張れ！ 栄光を祈っているよ



天も地も、人の心も美しき「光の国」。今、新しき青年の太陽は昇る

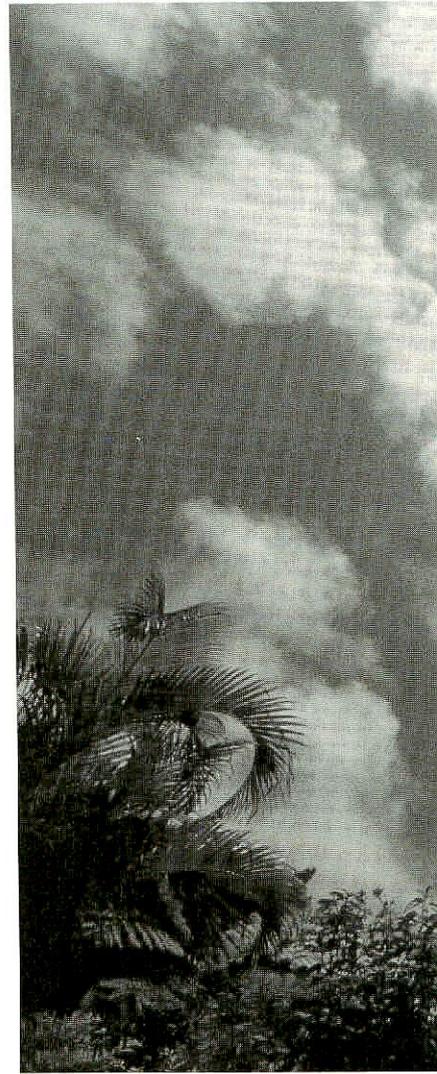
池田先生の言葉がうれしくてなりません。前年に参加した夏季講習会での先生の言葉の意味がはつきり分かったからです。

夏季講習会の2日目に、先生が、学生部の代表十数人を運営本部に呼んでくださいました。沖繩からは3人が参加しました。

懇談の折、私は先生に、その年の3月に父を亡くしたこと、懸命にアルバイトをしながら大学に通っていること、旅費を工面して夏季講習会に参加したことなどを話しました。

すると先生は、「苦勞して、苦勞して、苦勞した人が、きれいな花を咲かせることができるのです」と語ってくださいました。そして、「生涯、学会から離れるんじゃないよ」と――。

「学会から離れない」とは、先生という広宣流布の師匠について行くことだったのです。そのことを先生は、3度、呼び掛けて、教



えてくださったのです。これさえ命に刻めば、いろんな不安があつても、絶対に負けない、と直感しました。

記念撮影の終了後、その喜びをどう表していいか分からず、「去年、お会いしていただきました」と声を上げてしまいました。

すると先生は、「分かっているよ。分かっているよ。大きくなたので、ビックリしているんだよ」と、ご自身と背を比べるようなしぐさをされました。娘の成長を喜ぶ父のようで、涙があふれました。先生は師であり、慈父なのです。

### 「沖繩健児の歌」

時計の針は、午後8時を指そうとしていた。

池田会長は、メンバー一人一人と握手を。さらに、裏方の役員に声を掛け、労をねぎらった。その姿もまた、メンバーへの無言の指導になった。

会長が退場するその時だった。歌が始まった。

正法流布の 朝ぼらけ  
打ちくだかれし うるま島  
悪夢に目覚め 勇み立つ  
伝統誇る 鉄拳は

沖繩健児の 誇りなり

「沖繩健児の歌」だった。

勇壮な歌詞であり、曲である。

「私は『沖繩健児の歌』が大好きである。『好きな歌』を挙げる」と、五本の指に入ると思う」と会長が語る歌だ。

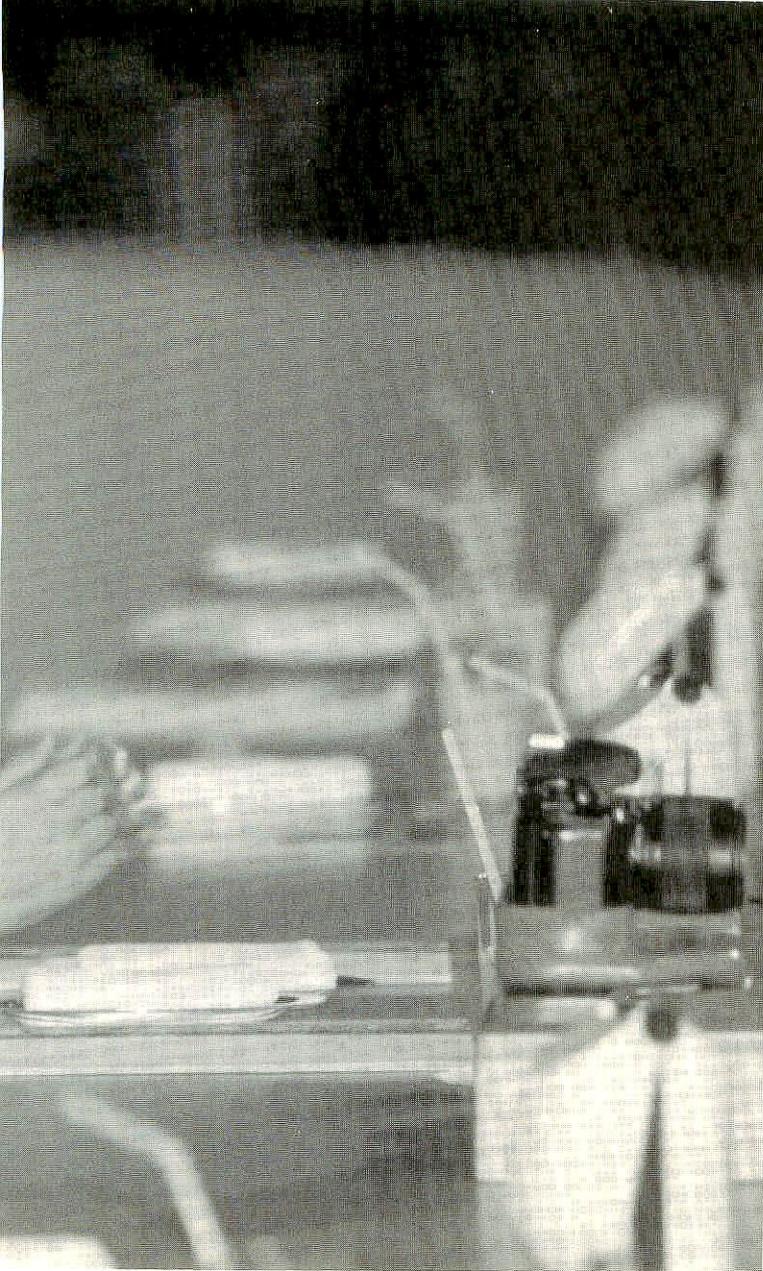
この時、メンバーがなぜこの歌を歌ったのか。その理由は前年（昭和43年）にさかのぼる。

夏季講習会2日目、キャンプファイヤーを囲んでの全国の学生部の集いがあった。

会長は、「沖繩ガンバレ！ 沖繩の栄光を祈っているよ」と万感の励ましを送り、さらに、「みんなで沖繩を応援しよう」と提案。全国の学生部員の大声援の中、沖繩学生部124人が、「沖繩健児の歌」を歌いながら、グラウンドを2周したのだ。

全国の同志が、赤や青、黄色のセロファンを張った懐中電灯を振

企画「創立80周年から100周年へ」  
世雄たれ大学会⑤



った。白い帽子をちぎれんばかりに振る友も。「フレ、フレ、フレ、沖繩！」「沖繩ガンバレー」の声  
が、あちらからも、こちらからも、  
会長が見つめていた。期待と励  
ますが痛いほど伝わった。沖繩の  
メンバーは、涙で顔をくしゃくし  
やにしながら歌い続けた。その姿

に全国の友も頬を涙でぬらした。  
感涙が感涙を呼んだ。麗しい創価  
の青春がそこにあつた。  
感激のキャンプファイヤーに参  
加したメンバーが、沖繩の大学会  
結成の会場にいたのだ。  
歌わずにはいられなかった。会  
長への、せめてもの感謝を、決意

企画「創立80周年から100周年へ」  
世雄たれ大学会⑤

を、表したかった。

◆証言（上原正守さん）

社会が、政治がどうあれ、自分  
たちがしつかりすればいい。力を  
つけよう。環境がどうあれ、誰が  
見ていようとまいと、自分が沖  
繩の希望になるんだ！——誰もが、  
その決意を歌声に込めました。

驚いたことに、大学会結成の数  
日後、池田先生から書籍が届きま  
した。その見返しには、大学会結  
成の日付とともに、「共に生涯を」  
と記されていたのです。

師と共に！——希望を湧き上が  
らせる根源です。光源です。私た  
ち一人一人が建設の主体者として  
不二の生涯を貫くよう、書き贈つ  
てくださったのです。先生は、揺  
れる沖繩に、希望の炎を赫々と燃  
え上げらせてくださったのです。

◇  
明けて2月17日は、「旧正月」  
の始まりの日であった。沖繩は新  
たなスタートを切った。



らん せい  
みずか  
このん めい  
う やぶ  
乱世の混迷を打ち破れ  
自ら希望を創りゆくのだ！

地元じもとの報道関係者ほうどうかんけいしやが、池田会長いけだかいじんの沖縄訪問おきなわびんを、こう語かたっている。  
「池田会長いけだかいじんが来て、何か沖縄全体おきなわぜんたいが沸わき返かえっている感じかんじですね」  
今いま、再びふたたび詩を胸むねに

2012年ねんもまた、詩うたと共に新あたらたな建設けんせつの幕まくが上あがった。  
「希望きぼうは人生じんせいの宝たからなり」――。

詩うたは訴うたえる。

「いかに深こゝろき乱世らんせいの混迷こんめいも

決然けつぜんと打うち破やぶって

みずから希望きぼうを創つくりゆくのだ！

あの友ともにも

この友ともにも

絶対勝利ぜつたいしょうりの希望きぼうを贈おくりながら

我われらは勝かちち進むすすむのだ！

……

今いま 私は高たからかに宣せん言げんしたい。  
『未来みらいの最強さいきやうの希望きぼうは  
創価そくわの青年せいねんたちにある』と

(つづく)

「われらこそは、如来につかわされた尊い身分であると確信すべきであります。自分をいやしんではなりません」

草創の学会の機関紙「価値創造」に綴られた恩師・戸田先生のご指導です。

続けて先生は、学会員の使命について、次のように宣言されました。

「仏の使い」であります。如来につかわされた身であります。大聖人の分身であります。凡夫のすがたこそしておれ、われら学会員の身分こそ、最尊、最高ではありませんか」

昭和21年（1946年）、学会再建のため、戦後の荒野に戸田先生がただお一人、立ち上がられたばかりのころでした。長く苦しい戦争は終わりましたが、人々の生活は苦しく、皆が不幸のどん底にあえいでいた時代です。

その中であって、戸田先生は、学会員の尊い使命を教えてくださいましたのです。

「学会員の皆さんこそ、まぎれもなく「仏の使い」「如来の使い」である」

「仏の理想を全民衆に弘めゆく最尊、最高の存在にほかならない！」

# 経典「御書」に学ぶ

「ほとけのつか使い」のほま誉れもたか高くどう どう堂々とかた語りゆけ

——戸田先生の叫びは、会員の心奥に火を灯しました。『わが使命』に目覚めた人間ほど、強いものはありません。一人一人の胸中に、勇気が生まれました。確信が湧きました。そして、希望が芽生えていきました。

戸田先生の75万世帯の成就といっても、その本質は、一人一人の使命の自覚から始まったものです。目の前の友人と共に、幸福への大道を歩みゆく、「仏の使い」として生きる実践が、最尊の歓喜を生み、地涌の陣列を喜々として拡大していったのです。

日蓮仏法は、万人に「如来の使い」の自覚と、如来と同じ慈悲行を促し、「幸福の人生」「勝利の人生」を拡大しゆく宗教です。

この尊き「仏の使い」、すなわち「法華経の行者」の使命と大功德を教えられている御書が、今回学ぶ「椎地四郎殿御書」です。

私自身、若き日より暗唱するほど胸に刻んできた御書の一つです。「伝統の2月」を迎えるにあたり、今再び、全学会の同志と共に、仏法を語り抜く誉れの使命を学んでいきたいと思えます。

# 池田名誉会長 講義 勝利の

第37回 | しいじしろうどのごしょ 椎地四郎殿御書 |

先日御物語の事について彼の人の方へ相尋ね候いし処・仰せ候いしが如く少しもちがはず候いき、これにつけても・いよいよ・はけまして法華經の功德を得給うべし、師曠が耳・離婁が眼のやうに聞見させ給へ、末法には法華經の行者必ず出来すべし、但し大難来りなば強盛の信心弥悦びをなすべし、火に薪をくわへんにさかんなる事なかるべしや、大海へ衆流入る・されども大海は河の水を返す事ありや、法華大海の行者に諸河の水は大難の如く入れども・かへす事とがむる事なし、諸河の水入る事なくば大海あるべからず、大難なくば法華經の行者にはあらじ、天台の云く「衆流海に入り薪火を熾んにす」と云云

(1448ジ1初め〜6行目)

## 青年こそ、鋭い眼と 確かな耳を持って

本抄は、日蓮大聖人が門下の椎地四郎に与えられた御書です。椎地四郎あての御書は本抄だけであり、どのような人物であったか詳

### 「今回学ぶ」椎地四郎殿御書」の現代語訳

先日、話されていたことについて、彼の人の方に尋ねたところ、あなたが仰せになつた通り、少しも違いはなかった。これにつけても、いよいよ励んで法華經の功德を得るべきである。「師曠の耳」のように聞き、「離婁の眼」のように見ていきなさい。

末法には法華經の行者が必ず出現する。ただし、大難が来た時には強盛の信心で、いよいよ喜んでいくべきである。火に薪を加えて盛んにならないことがあるのか。大海へ多くの河が流れ込む。しかし、大海は河の水を返すことがあるだろうか。法華經という大海のごとき法を持つ行者には、多くの河の水が大難のように流れ込んでも、その水を押し返すことや、とがめだてすることはない。多くの河の水が入ることがなければ大海はない。大難がなければ、法華經の行者であるはずがない。天台は「多くの河の水が海に入り、薪が火を熾んにする」と言っている。

(1448ジ1初め〜6行目)

しくは分かっています。

ただ、本抄の末尾に「四条金吾殿に見参候はば能く能く語り給い候へ」(1449ジ1)と仰せられ、また、四条金吾や富木常忍に宛てた御書に椎地四郎の名前を見ることができ、ます(注1)。これらのことから椎地四郎は、大聖人の晩年、各地の門下と大聖人のもとを

(注1) 弘安3年(1280

年)のお手紙では、「椎地四郎が話しておりました。あな

た(四条金吾)が主君の前で

法門を語つたことを、非常に

うれしく思います」(四条金

吾許御文)1195ジ1(通解)

とも仰せになつてゐる。

また、弘安4年(1281

行き来し、門下の様子を大聖人に報告し、また大聖人のお心を門下に伝える役割を担っていたようにうかがえます。師匠からの信頼も厚く、師弟の歴史に名をとどめた模範の門下であったのではないのでしょうか。

本抄の冒頭では、椎地四郎が大聖人に対し何らかの御報告をしたことが記されています。その件について大聖人が、その人に確認をされたところ、四郎の報告と全く同じであったと仰せです。

報告を受けて、大聖人は、四郎が私心なくありのまま正確に伝えたことを賞讃し、いよいよ信心に励んで「法華経の功德」を得ていくよう励まされているのです。そして「師曠が耳」「離妻が眼」(注2)のように、今後もしっかりと正確に物事を見聞していくよう教えられています。

この仰せから拝察するに、四郎に「法華経の功德」を受けていきなさいと言われているのは、あるいは法師功德品に説かれている六根清浄の功德(注3)のことかもしれません。本品では、法華経を人々に弘め教える人には、六根、すなわち清らかで優れた眼や耳をもつ

て、自身と人々を守り導いていける功德があると説かれています。信心で磨いた生命に具わる豊かな力で、真実をありのままにとらえ、智慧を発揮し、困難を打ち破り、福徳を開いていく功德があるのです。

この「師曠」と「離妻」については、戸田先生もよく話題にされ、青年に教えてくださいました。時代・社会の変革のため、広布を誤りなく伸展させゆくため、青年は何事にも真実を見極める鋭い「眼」、真実の声を聞き分ける確かな「耳」を持って——私自身、常にこのことを心に刻み、戸田先生のもとで万般にわたる訓練を受け切りました。

### 大難こそ法華経の行者の証し

それでは末法の悪世において、「法華経の功德」を受けていくために知るべき最も大切な真実とは何か？ 続く御文で、大聖人は厳然と仰せになられます。

「末法には法華経の行者必ず出来すべし」  
ここで「必ず」と仰せです。もし法華経の行者が出現しなければ、私の金言が虚妄にな

年)の富木常忍あてのお手紙でも、大聖人は「必ず椎地四郎のことは承っておきます」(「富城入道殿御返事」995頁、通解)と述べられている。さらに、日興上人が残された大聖人の「御遷化記録」によると、四郎は大聖人の御腹巻(胴を守る防具)を捧げて葬列に加わっていることが分かる。

〔注2〕「師曠が耳・離妻が眼」師曠は、中国周代の音楽家。耳がよかつたところから、耳のさとい者の譬えとして用いられる。離妻は、中国古代の伝説上の人物。目が非常によく、百歩離れたところからでも細かい毛が見えたといわれ、目のよい人の譬えとされる。

〔注3〕「六根清浄の功德」眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が、煩惱のけがれを払い落として清らかなること。法師功德品第19には「若し善男子・善女人は、是の法華経を受持し、若しは読み若しは誦

つてしまふ。仏の言葉が真実である以上、必ず、末法に民衆を救う法華經の行者が出現しないわけがない。そう読まずして、法華經を読んだことにはなりません。

そして、何よりも、この法華經の行者の実踐を貫き、經文を証明してきたのが、日蓮大聖人にほかなりません。

そのうえで「但し」以下の御文では、法華經の行者の要件が綴られています。その根本が、「大難来りなば強盛の信心弥悦びをなすべし」との仰せです。

いかなる大難にも真正面から立ち向かい、勝利し、悠然と乗り越えていくのが、法華經の信心です。御書には「悦び身に余りたる」(1343頁)、「大に悦ばし」(237頁)、「いよいよ悦びをますべし」(203頁)と、「大難」即「歡喜」の仰せが隨所に示されています。

どんなに大難があつても、正法弘通に生き抜き、目の前の一人の苦悩を取り除き、幸福の種を心田に植えていく悦びに勝るものはな。この最高にして最強、そして最尊の人生

を促す力が、法華經に具わっています。法華經に生き切ること自体が、最高の幸福なのです。本抄では大難に挑む法華經の行者の境涯について、天台大師の『摩訶止観』の文に即して、二つの側面から仰せになられています。

一つには、法華經の行者の境涯を「火」に、大難を「薪」に譬えられています。火に薪をくべれば、火の勢いはますます盛んになります。それと同様に、難が起れば信心の炎はいやまして燃え上がり、法華經の行者としての自覚と確信も強く盛んになるのです。

もう一つには、法華經の行者の境涯を「大海」に、大難を「衆流」、あるいは「河の水」「諸河の水」に譬えられています。「法華大海の行者」とも仰せです。大海には河の水が流れ込もうが、それを押し返すことはありません。反対に、注ぎ込まれる水を受け入れて、海はさらに豊かになっていくのです。

「大海へ衆流入る・されども大海は河の水を返す事ありや」

この御文を拝するたびに、いかなる迫害にも屈することなく、悠々と大難を受け入れ、

し、若しは解説し、若しは書写せば、是の人は当に八百の眼の功德・千二百の耳の功德・八百の鼻の功德・千二百の舌の功德・八百の身の功德・千二百の意の功德を得べし。是の功德を以て、六根を莊嚴して、皆な清浄ならしめん」(法華經527頁)と説かれる。

勝ち越えられた大聖人の広大な御境涯が偲ばれ、深い感動を新たにします。

ともあれ、難があるからこそ、信心の炎が燃え上がる。大海のごとき広大な境涯を開いていける。そして必ず仏になれる。信心があれば、大難こそ宿命転換の絶好の機会とらえていけるのです。

さらに大聖人は、「大難なくば法華經の行者にはあらじ」と仰せです。法華經に説かれたとおりに大難が起るといふことは、末法の法華經の行者としての実践が正しかったという何よりの証左となるのです。

## 牧口先生「眞の行者であれ」

大聖人の御在世当時、世間でも法華經を信じる者たちは少なからずいました。しかし彼らは、ただ自らの功德を求めて講義を聴いたり、写經をしたりするだけにすぎませんでした。それは、「困難な時代に、命懸けで迷い悩める人を、一人残らず断じて救う」という仏の眞意とは、かけ離れた法華經観であったのです。

この当時の法華經觀を敢然と打ち破られたのが、大聖人の死身弘法(注4)の「行者」としての大闘争であられました。

創価の父・牧口先生が「信者」と「行者」を厳格に立て分けられていたことも有名です。牧口先生は師子吼されました。

「魔が起るか起らないかで信者と行者の区別がわかるではないか」

すなわち、自分だけの利益を願ひ、三障四魔との戦いのない者は、ただの「信者」にすぎないと喝破されました。広宣流布のために菩薩行に励み、三障四魔(注5)と戦つていく人こそ、眞の「行者」であると教えられたのです。

このご精神の通りに、「行者」としての実践を貫いてきたのが創価三代の師弟であり、皆れの学会員の皆さま方にはかなりません。ゆえに学会の前進に、三障四魔や三類の強敵(注6)が競い起ることは必然です。そしてまた、学会員の一人一人が「法華經の行者」であるからこそ、学会は幾多の難を勇敢なる信心で受け止め、敢然と勝ち越えてくることのできたのです。

〔注4〕「死身弘法」「身を死して法を弘む」と読み下す。章安大師の「涅槃經疏」にある。教法流布の精神を示したもので、身を賭して法を弘めることをいう。

〔注5〕「三障四魔」仏道修行を妨げる三つの障りと四つの魔のこと。三障とは煩惱障・業障・報障をいい、四魔とは煩惱魔・陰魔・死魔・天子魔をいう。

〔注6〕「三類の強敵」積尊滅後の惡世で法華經を弘通する人を迫害する三種類の強敵。俗衆増上慢(在家の迫害者)、道門増上慢(出家の迫害者)、借聖増上慢(迫害の元凶)となる高僧)のこと。

法華經の法門を一文一句なりとも人に・かたらんは過去の宿縁ふかしくおぼしめすべし、經に云く「亦不聞正法如是人難度」と云云、此の文の意は正法とは法華經なり、此の經をきかざる人は度しがたしと云う文なり、法師品には若し善男子善女人乃至則如来使と説かせ給いて僧も俗も尼も女も一句をも人にかたらん人は如来の使と見えたり、貴迎すでに俗なり善男子の人なるべし

(1448ページ6行目〜9行目)

## 「一文一句」でも語る意義

法華經の法門を一文一句でも語っていく宿縁の深さを教えられています。

前段で大聖人は、大難に挑む法華經の行者の境涯について述べられました。それは、ほかでもない大聖人御自身の御闘争の姿そのものであります。

しかし、実際に難が起こり、迫害を受ける師匠の姿を目の当たりにすると、妙法の正し

さを疑い、信心が揺らいでしまった門下も少なからずいました。その中であつて椎地四郎は、健気に師匠の正義を語り弘教に励んでいと推察されます。大聖人に連なる宿縁の深さを述べられ、そしてまた師弟不二の実践そのものを、最大に讃嘆されています。

大聖人はまず方便品の文を引かれます。

これは、釈尊が唯一の仏道をすべての人に

### 「今回学ぶ」椎地四郎殿御書」の現代語訳

法華經の法門を一文一句であつても人に語るの、過去の宿縁が深いと思ふべきである。

法華經に「また、正法を聞かない。このような人は救い難い」(方便品第2)とある。この文の意味は、正法とは法華經であり、この經を聞かない人は救い難いという文である。

法華經法師品には、「もし、この善男子、善女人、私が滅度した後、ひそかに一人のためであつても、法華經の一句なりとも説くなら、この人はすなわち、如来の使いである」と説かれており、僧も俗も尼も女も、一句をも人に語る人は如来の使いであるというのである。あなたは、すでに俗であり、この善男子にあたる人なのである。

(1448ページ6行目〜9行目)

教えたけれども人々は反発して正法（法華經）を聞き入れないこと、しかしながら、正法を聞かない衆生は救済できないことを述べた経文です。正法以外に成仏の道はありません。それゆえ、釈尊のみならず、すべての仏は、あらゆる手立てを尽くして正法を説き聞かせるのです。

これは、滅後末法において法華經を弘通することが、いかに困難であるかを述べられるとともに、それゆえに法を語り弘める実践が、どれほど尊い振る舞いであるかを教えられているのです。

したがって「語る」という行為そのものが尊いのです。「声仏事を為す」（708頁）です。声で決まるのです。

声は力です。「勇氣の声」「確信の声」「慈愛の声」が相手の心に響き、生命を揺り動かしていくのです。

大聖人は続いて法師品の文を通して、「一句」をも語っていく人は「如来の使い」であると示されます。「如来の使い」とは、仏から遣わされて仏の仕事を行う人のことです。

法師品の文では、男性であれ女性であれ、

法華經を一句でも説いていくならば、その人は「如来の使い」であると説かれています。

大聖人はそれを受けて僧俗、男女の区別なく、妙法を一言でも語る人は「仏の使い」であると教えられています。そして、在家であり妙法流布に邁進する椎地四郎に対して、あなたも経文に説かれる「善男子」「如来の使い」であることは間違いないと讃えられているのです。

仏の真実の言葉であるからこそ、「一文一句」でも語る意義と使命は、はかりしれないものがあります。また、その「一言」を語る実践に大功徳が生じるのです。

私たちの日々の折伏の実践においても、まったく同じです。

難解な法理を語って破折することだけが折伏なのではありません。難しく考える必要はない。信心に励む中で自らが実感する体験や喜び、確信を、飾らずにありのまま伝えていけばよいのです。それが真実の言葉です。

「この信心で絶対に幸せになります！」

「題目で自分自身を変革していきます！」

「祈って乗り越えられない困難はありませ

ん！」

相手の幸福を真剣に願って誠実に語る一言。満々たる生命力から発せられる確信と歓喜の一言。友の苦悩を突き破る勇氣と希望の一言。その「一言」こそが、相手の生命の仏性を呼び覚ましていくのです。ゆえに「一文一句」でも語ることも、自分が立派な折伏行であり、その尊き聖業に福德が薰らないわけがないのです。今から60年前、私が24歳の時にわが故郷・大田の地で拡大の指揮を執った折にも、この思いを胸に戦いました。一文一句でも語る地の陣列を構築することを目指して、誠実に一人一人を励まし続けました。

私の願いは、ただ一つでした。

それは、戸田先生は折伏の師匠である。ゆえに、折伏の報告をして師匠に喜んでいただく。ただただ、その思いで戦いました。そして、会員の一人一人が「仏」である。この仏の皆さまを尊敬し、存分に戦える環境を作ろう。そのために必要なことは、何でもさせていたただこう。この決意で戦いました。

ともあれ、妙法の偉大さ、信心の素晴らし

さを、一言でも語っていく人は、一人ももれなく仏の使いです。妙法を語ったこと自体、仏の使いとして無量の功徳を積んでいるのです。生々世々、福德に満ちた生命として、赫々と輝いていくことは間違いありません。

折伏は

仏と等しき

功徳かな

「2月闘争」から60周年を迎える今、私と同じ心で広宣流布に戦い、弘教・拡大に励む青年部をはじめとする全同志の皆さまを、重ねて讃嘆したいのです。

此の経を一文一句なりとも聴聞して神にそめん人は生死の大海を渡るべき船なるべし、妙楽大師云く「一句も神に染ぬれば咸く彼岸を資く、思惟・修習永く舟航に用たり」と云云、生死の大海を渡らんことは妙法蓮華経の船にあらずんば・かなふべからず

(1448ページ10行目〜12行目)

# 法華経こそが 生死の大海を渡る船

人生には苦悩や悩みがつきものです。また誰しも、生死という苦しみからは逃れることはできません。深く果てしなく続く苦悩を譬えて「生死の大海」と示されています。

大聖人は、妙楽大師の『法華文句記』を引かれ、法華経を一文一句でも聞いて、心肝に染める人は、この生死の大海を渡つていける船に乗るようなものであると仰せです。妙法蓮華経の船に乗れば、いかなる人生の荒波があろうとも、苦悩渦巻く大海を渡りきつて、成仏の境涯という「勝利の彼岸（向こう岸）」「幸福の彼岸」に至ることができるようになります。

大聖人が万人の成仏を実現する根源の仏種として説き明かされた「南無妙法蓮華経」の一句には、仏が説いたあらゆる教えが含まれます。その一句を信受することにより、万人に本来具わる仏界の生命を開きあらわし、生死の苦悩と悲哀を常楽我浄（注7）へと大転換させゆくことができるのです。

ここで、大聖人が一文一句でも「聴聞」す

## 「今回学ぶ」椎地四郎殿御書」の現代語訳

この経を一文一句であつても聴聞して心に染める人は、生死の大海を渡ることのできる船のようなものである。妙楽大師は「一句でも心に染めれば、すべて悟りの岸に至ることを助ける。さらに、思索し習い修めるなら、生死の大海を渡る舟としての働きを永く果たすであろう」と言っている。生死の大海を渡るのは、妙法蓮華経の船でなければ叶わないのである。

(1448ページ10行目〜12行目)

と仰せになつてに着目してみたい。妙楽大師は『法華文句記』で、本抄の文に続いて「法華経を聞いて信じた人も、信じなかつた人も、順縁も逆縁も（注8）共に仏縁となるから、ついには苦悩から脱出し覺りを得る（趣旨）と述べています。

相手の状況を理解しつつ、ともかく法華経を耳に触れさせていくこと、聞かせていくことで、相手の心に仏の種が植えられ、生命が触発されていくのです。

ゆえに仏法対話の際に、相手の反応に一喜一憂する必要は全くありません。一たび仏縁を結べば、その人はやがて機会を得て成仏の

## 池田名誉会長 講義 勝利の経典「御書」に学ぶ

（注7）「常楽我浄」仏の生命に具わる徳目で、四徳波羅蜜ともいう。①「常」とは仏が完全な永遠性を実現していること②「楽」とは完全な安楽③「我」とは完全な主体性④「浄」とは完全な清らかさという。

（注8）「順縁・逆縁」順縁は、教えを聞いて従順に信じて仏道に入ること。逆縁は、反発や謗法などの行為がかえって仏道への縁となること。

境涯を必ず開くことができるからです。

これまで拝してきたように、妙法を一文一句でも語る功德は甚大です。そしてまた聞いた人も仏縁を結んだことで、その福德は無限に広がりゆくのです。したがって「語る」「聞かせる」「語り合う」という「対話」こそが極めて重要なのです。

抑法華經の如渡得船の船と申す事は・教主大覺世尊・巧智無辺の番匠として四味八教の材木を取り集め・正直捨權とけづりなして邪正一如ときり合せ・醍醐一実のくぎを丁と・うって生死の大海へ・をしうかべ・中道一実のほばしらに界如三千の帆をあげて・諸法実相のおひてをえて・以信得入の一切衆生を取りのせて・釈迦如来はかちを取り・多宝如来はつなでを取り給へば・上行等の四菩薩は函蓋相應して・きりきりとこぎ給う所の船を如渡得船の船とは申すなり、是にのるべき者は日蓮が弟子・檀那等なり、能く能く信じさせ給へ、四條金吾殿に見參候はば能く能く語り給い候へ、委くは又又申すべく候、恐恐謹言。

(1448ページ13行目〜1449ページ3行目)

### 「信心」こそ成仏への実践の根幹

薬王品に説かれる「如渡得船(渡りに船を得たるがごとし)」の文を通して、生死の大海を渡り切る船である法華經の功力について、

#### 「今回学ぶ」椎地四郎殿御書」の現代語訳

そもそも、法華經の「如渡得船」(薬王品)の船というのは、教主大覺世尊が巧智無辺の番匠として、四味八教の材木を取り集め、正直捨權と削って仕上げ、邪正一如と切り合わせ、醍醐一実の釘を丁と打って、生死の大海へ押し浮かべ、中道一実の帆柱に界如三千の帆を上げて、諸法実相の追い風を得て、以信得入の一切衆生を取り乗せて、釈迦如来は舵を取り、多宝如来は綱手を取られるとき、上行らの四菩薩は函と蓋が合致するように互いに応じて、きりきりと漕ぐところの船を、「如渡得船の船」とはいうのである。この船に乗ることが出来る者は、日蓮の弟子檀那らである。よくよく信じられるのがよい。四條金吾殿に会われたならよくよく語っていきなさい。くわしくは、また申しあげる。恐々謹言。

(1448ページ13行目〜1449ページ3行目)

見事な譬えをもつて教えられています。

まず、この法華經という船をつくった工匠は、無量無辺の巧みな智慧をもつ釈尊であると仰せです。そして釈尊が一生で説いた諸經のうち、四味八教(注9)、すなわち法華經以前の諸經について、船を構成する材木に譬えられています。

この材木を、船の部材として生かすためには、ただ並べるだけではなく、削って形を整える必要があります。そのことを、方便品の「正直に方便を捨てて、但だ無上道(注10)を説く」(法華經144)の文を引かれ、「方便を捨てる」ことを「削る」という表現に託して示されます。

続いて整えた部材を船として組み上げていくにあたって、「邪正一如とときり合せ・醍醐一実のくぎを丁と・うって」と仰せです。

邪正一如とは、悪人も仏の当体であるという事です。爾前經では許されなかった悪人成仏が法華經で明かされ、万人成仏が現実となります。どんな人も成仏できるといふ法華經の完全な教えに合致させて、法華經以前に説かれた諸經をも生かしていくのです。

また醍醐一実とは、仏の覚った真実を唯一説き示した教えであり、五味のうちの最高の醍醐味(注10)である法華經の教法を指します。「醍醐一実のくぎ」とは、教えを完成させる釘です。

すなわち、万人に仏性を認め、万人の仏性を開くという仏の真実の願いどおり、設計され建造されたのが、法華經の大船なのです。

船が完成して、いよいよ「生死の大海」へと出航です。

その帆柱は「中道一実」、帆は「界如三千」であると仰せです。中道一実とは、仏が覚った究極の真実です。それを船の中心に高く掲げ帆柱とします。界如三千とは十界互具・百界千如・一念三千です。万物のありのままの姿です。妙法を根本とした生命の大境涯です。それを帆とします。

さらにその帆は、「諸法実相」という仏の教えを追い風として、成仏の彼岸に向けて前進すると述べられています。諸法実相とは、万物の本来真実の姿です。法華經が説く諸法実相とは、どのようなものにも仏の壮大な境涯が具わっているということです。その真実

〔注9〕「四味八教」天台大師が釈尊一代の教説を判釈して立てた五時八教、五味のうち四味と八教のこと。四味とは、仏の教えを牛乳が精製されるときに生じる五段階に譬えた①乳味②酪味③生蘇味④熟蘇味⑤醍醐味の①②④をいう。八教とは、天台が釈尊一代の教説を教えの内容から判釈したもの。化法の四教と化儀の四教のこと。

〔注10〕「醍醐味」乳を精製してできる最高の味をいい、諸經中最第一の法門を譬えたもの。法華經が醍醐味にあたる。

を説いた妙法を信じ実践する時、あらゆる困難を打開し前進する智慧と力が発揮できるのです。そうであればこそ、諸法実相は追い風なのです。

そして、この船に乗るのは「以信得入」(注11)の一切衆生、すなわち、妙法を信受するすべての人々であると仰せです。もとより法華経の船とは、万人を差別なく成仏へと導くことができる大船にほかなりません。しかし「信」がなくては、船に乗り込むことが、そもそもできない。反対に、「信」がありさえすれば、誰でも乗ることができます。

続いて、この船の舵をとるのは人々を成仏の彼岸へと正しく導く教主・釈迦如来であると示されます。そして、船を引っ張り助ける綱を取る役目は、法華経において釈尊の説法の正しさを保証し助けた多宝如来が担うと述べられます。

また、仏の指し示す目標に向かって船を漕ぐのは、上行等の四菩薩(注12)であると明かされます。

仏が説いた教えを、現実に持ち、人々に教

え導いていくのが四菩薩をはじめとする地涌の菩薩です。すなわち成仏の彼岸へと皆が乗る船を進めていく働きともいえるでしょう。

仏の根本の願いを実現する法華経という船その舵を担うのが教主釈尊であり、綱手を引くのが多宝如来。中道一実の帆柱をしつかりと立て一念三千の帆を大きく張り、四菩薩が漕ぎ手となり万人成仏へ向かつて前進する——なんと壮大な、偉大な船でしょうか。

これらの譬えの締めくくりとして、大聖人は「是にのるべき者は日蓮が弟子・檀那等なり」と仰せです。椎地四郎をはじめ、妙法を正しく信受する大聖人の弟子こそが、この船に乗る資格があるのです。そして、生死の大海を渡り、成仏への航路を間違えずに進んでいけるのです。ゆえに、「よくよく信じていくように」と、どこまでも「信」が肝要となることを重ねて述べられているのです。

## 「歴史を創るはこの船たしか」

本抄をあらためて拝すれば、椎地四郎とい

〈注11〉【以信得入】「信を以て入ることを得」と読む。法華経譬喻品第3の文。智慧第一の舍利弗が、信によって法華経の妙理に入ることができたことを挙げ、信が仏道修行の要諦であることを教えている。

〈注12〉【四菩薩】法華経本門の四菩薩のことで、涌出品第15で説かれる地涌の菩薩の首(リーダー)である上行・無辺行・浄行・安立行のこと。

う純真な信心を貫く門下に、大聖人と共に生き、法華経の一文一句でも語りゆく人生の素晴らしさを教えられ、勇氣と確信を与えられている御抄であると拝することができません。

戸田先生も冒頭紹介したご指導に続いて、「仏の使い」として、私たちが行っている「如来の仕事」とは、一切の人を仏の境涯に置くことであり、全人類の人格を最高の価値にまで引き上げることだと教えられています。そして、こう綴られています。

「全人類を仏の境涯、すなわち、最高の人格価値の顕現においたなら、世界に戦争もなければ飢餓もありませぬ。疾病もなければ、貧困もありませぬ。全人類を仏にする、全人類の人格を最高価値のものとする。これが『如来の仕事』を行することであります」

御本仏に連なるこの崇高な精神闘争を繰り広げている戸田先生に出会って、今年で65星霜。一貫して私は、この恩師のご指導のままに戦ってきました。

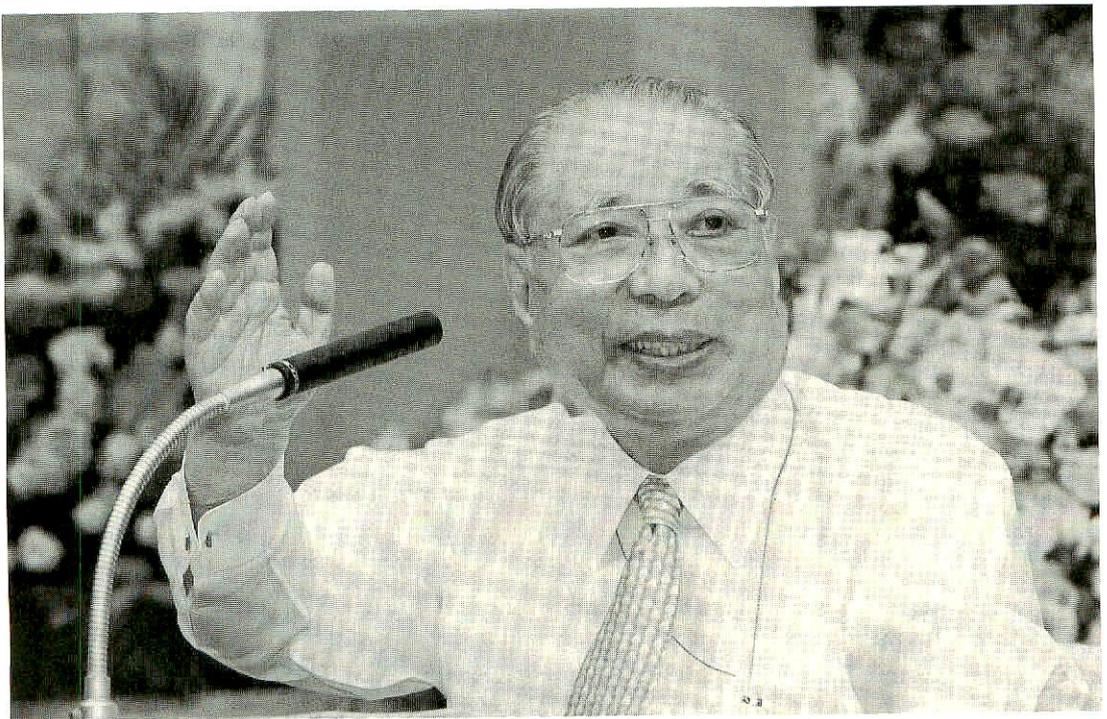
今こそ私は、愛する青年たちに、大切な全同志に、声高らかに伝えたい。

わが学会こそが、21世紀の激動の荒海にあ

って、生命尊嚴の仏法哲理を掲げ、人類の平和と共生と繁栄の大航路を切り開きゆく大船です。

学会は、民衆の境涯を高める「哲学の大船」です。一人一人を蘇生させる「勇氣の大船」であり、未来を洋々と照らす「智慧の大船」です。

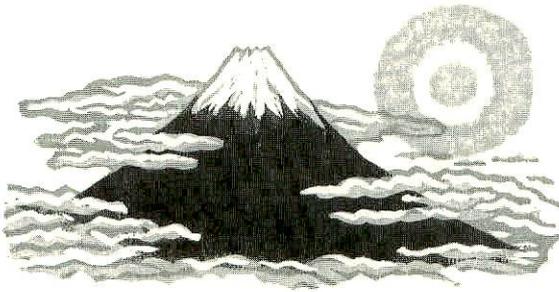
「歴史を創るはこの船たしか」です。一文一句でも、自身の揺るぎない確信を朗らかに語りながら、堂々と「仏の使い」として、勝利のドラマを築いていきましょう。わが学会こそが、人類の「希望の大船」なりと確信して――。



全人類を幸福に！ 激動の世界を安穩に！ 青年よ、創価の大船の舵をとれ！

# 使命の道

京都市／地区副婦人部長

ないとう  
内藤エリ

## 4

人の子を抱え、離婚したの  
は、昭和63年のことでした。  
家も収入の道も失い、途方に暮  
れました。片田舎でやつと借りら  
れた家はクモの巣だらけのボロ家  
でした。

入会間もない母が、そんな私を  
見かねて、信心の話をしてくれま  
した。わらにもすがる思いで入会  
真剣に唱題を始めると、小さな薬  
局に就職できたのです。初信の功  
徳でした。

安定した仕事を求めて、奈良に  
転居。大手医薬品卸業会社に就職  
しました。私が任された卸薬剤師  
は、市販薬から最先端の医薬品に  
至るまで精通しなければなりません。  
41歳から始めて、周りのレベ  
ルに追いつくのは並大抵ではなく、  
何度もやめようと思いましたが。そ  
のたびに御本尊に向かい、「子ど  
もを路頭に迷わすわけにはいかな  
い」と執念を燃やしました。

毎日、夜が明けぬうちから起き、  
子どものために食事を作り、託児  
所へ送っていきます。夜は、遅く  
まで眠気と戦い、机にかじりつい  
て仕事の勉強をしました。

ようやく一人前の仕事ができる  
ようになったころでした。次女と  
次男が次々と不登校になったので  
す。「どうしてこんなにつらいこ  
とが起こるの……」。そんな思い  
が込み上げました。でも、題目を  
唱えていると、子どもの心の声が  
聞こえてきたのです。「母さんは、  
仕事ばかりして、私たちの方を振  
り向いてくれへん」

私は、「これでは家族がバラバ  
ラになってしまう。子どもたちじ  
やない。私が変わろう」と、猛省  
しました。時間をやりくりして学  
会活動に励み、子どもと触れ合う  
時間を大切にするようにしました。  
子どもたちは、次第に学校に通  
えるようになり、わが家に温かい



関西ドクター部薬学部会のメンバーに囲まれる内藤さん(左から2人目)

団らんが戻りました。

今では、長男は副ブロック長に。長女は小学校講師として働き、次女は関西文芸部員として活躍。次男も男子部の皆さんに励まされ、成長の道を歩んでいます。

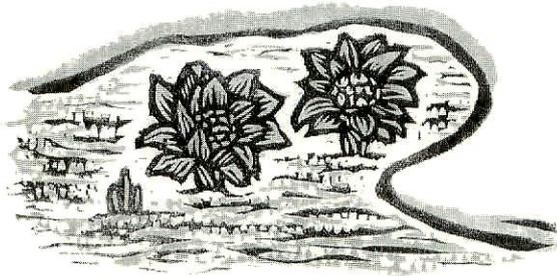
苦闘が続きましたが、誰よりも私が成長しようと仕事の勉強にも全力で取り組む中、「内藤さんの薬の解説はとても分かりやすい」と評判に。奈良県内170人の従業員の中のトップ3に入る評価を受けることができたのです。

さらに、驚いたことに、会社を代表して、京都府の卸勤務薬剤師会の理事など重要なポストを務めるまでになりました。

生計のためにやむなく飛び込んだこの世界が、実は使命の道だったことをわが子が教えてくれたのです。さらなる成長を誓い、どこまでも先生と共に、学会の中で、使命の道を邁進していきます。

# 親の背中

山形・鶴岡市／県男子部長

あきばてるあき  
秋葉輝明

これじゃ、夢に破れて帰るだけじゃないのか

東京から故郷の鶴岡へ帰ることを思うと、いつも「負け」という言葉が浮かぶ自分がいた。

芸術的な仕事に就きたいと夢を膨らませ、創価大学に進学。映画づくりにも挑戦し、一步踏み出せた喜びにあふれていた。

ある日、池田先生が突然、寮を訪問。「お父さん、お母さんを大事に」と激励してくださいました。実家に連絡すると、両親は心から喜んでいました。

卒業後も、アルバイトをしながら夢を追いかけたが、現実には厳しかった。一人でいるのが寂しくて、友人と遊んで散財。何をやってもうまくいかない。人と比較しては落ち込んだ。卒業してから6年、夢は近づかないばかりか遠ざかり、信心からも離れていた。

父も母も、夢を追いかける自分

を応援してくれていた。だが、心のどこかで帰りを待っていると感じていた。実家に帰ることは「負けではないのか」と葛藤が続いたが、唱題を重ねるなか、先生の「親孝行」という言葉を思い出し、帰ることを決めた。

社会保険労務士の父とともに働き、自分も同じ道を目指し始めた。両親から唯一、言われたのは、「勉強や仕事を理由に学会活動から離れるな」ということだった。

合格率が1割に満たない国家試験。法律や計算ばかりで、芸術性のかけらも感じられず、「夢と違う」という気持ちに覆われた。

だが男子部の活動に励むうちに、「ここが使命の天地」だと実感した。仕事、勉強、活動にも力が入った。迷いなく迎えた4回目の挑戦。結果は合格だった。信心の力を実感した。

仕事の知識では、父に負けない



わが地域に創価の<sup>びいじよう</sup>大城を! ——同志と後継<sup>じんれつ</sup>の陣列を拡大する秋葉さん(中央)

自信がある。でも経営者の悩みを受け止め、励ましを送る父の姿に、信頼の差を何度も見せつけられた。かなわないと感じるばかりだ。

広布の庭でも「お父さん、お母さんにお世話になったんだよ」と何度も言われた。多くの同志から感謝されている父母だと知った。

昨年11月、父が男子部長として奮闘した同じ地域の男子部長になった。仕事でも組織でも、近づけば近づくほど、両親の背中が大きくなるばかりだ。

今になって、やっと思うことができる。広宣流布の戦いも、社会保険労務士の仕事も、実は最も芸術性にあふれているんだと。

夢はまだ諦めたわけではない。でも、もう後悔はない。

一朝一夕にはいかないかもしれないが、いつか親の背中に追いつき、追い越したい。それが師匠に誓った本当の親孝行だからだ。

# 2

月度一拝読御書の解説

座談会

## 妙一尼御前御消息

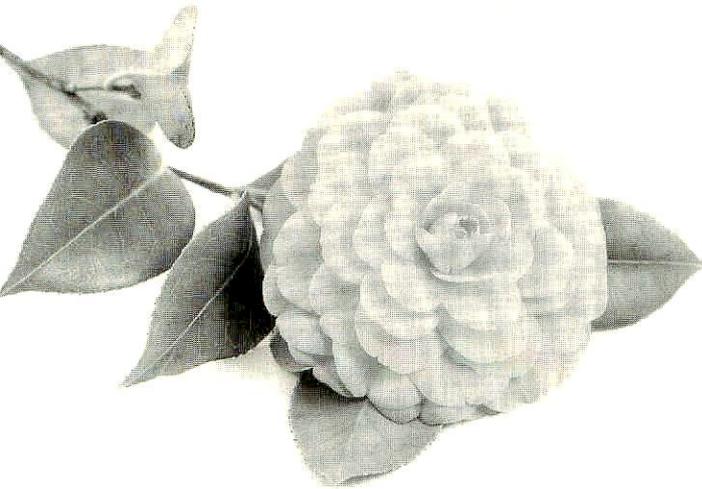
御書講義、研修教材

## 観心本尊抄

強盛な信心に立てば

一切の苦難は

最高の喜びへと変わる！



## 拝読御書の背景と大意

### 妙一尼御前御消息

本抄は、建治元年（1275

年）5月、大聖人が54歳の御時に身延で著され、鎌倉に住む妙一尼に与えられたお手紙です。

大聖人が竜の口の法難・佐渡流罪という迫害にあわれるなか、妙一尼は夫とともに法華経の信仰を貫き通しました。

ところが、そのために夫は、所領を没収されるなどの難にあい、しかも大聖人が佐渡から御帰還される前に亡くなったのです。しかし、そうしたなかでも大聖人のもとへ従者を送り、お仕えさせるなどして、大聖人をお守りしました。本抄で大聖人は、妙一尼の夫の心中を思いやられ、大聖人が流罪

から赦免されたのを生きて知ることができたなら、どれほど喜ばれたらうかと述べられます。

そして、法華経の信心を貫いた人は、冬が必ず春となるように絶対にならぬ。所領を没収されながらも信心を貫いた妙一尼の夫が成仏していることは間違いないと強く励まされています。

### 観心本尊抄

文永10年（1273年）4月25日、佐渡・一谷で著され、翌26日に送状を添えて、下総国（現在の千葉県北部等）の門下・富木常忍に送られました。

本抄では、全ての生命に本来具わる「仏界」を開き顕して「成仏」の境涯を得るには、自身の生

命を映す明鏡ともいふべき「本尊」と、その本尊を根本とする修行、すなわち「観心」が必要であることが示されます。

そして、釈尊をはじめ諸仏を成仏させた根源の法が、法華経寿量品の文底に秘され、末法に弘通されるために遺されていること。

末法の初めの現在には、法華経で滅後の弘法を託された地涌の菩薩が出現して広宣流布すべき「後の五百歳」の時に当たること。

これらを明示しつつ大聖人は、末法に流布すべき「本尊」を、初めて打ち立てることを宣言されます。そして、この世界第一の本尊を信じて「受持」することこそ、末法における「観心」——成仏への直道であると教えられています。

# 妙一尼御前御消息

御書全集……………1253頁、16行目〜17行目  
編年体御書……………715頁、8行目〜9行目

法華經を信ずる人は冬のごとし冬は必ず

春となる、いまだ昔よりきかず・みず冬の

秋とかへれる事を、いまだきかず法華經を

信ずる人の凡夫となる事を、經文には「若

有聞法者無一不成仏」ととかれて候

法華經を信ずる人は冬のようなものである。冬は必ず春となる。昔より今まで、聞いたことも見たこともない。冬が秋に戻るということを。

(同じように) 今まで聞いたことがない。法華經を信じる人が仏になれず、凡夫のままであることを。

經文には「もし法を聞くことがあれば、一人として成仏しない人はいない」と説かれている。

勝利の春へ、どこまでも前進！

日蓮大聖人の仏法は、いかなる宿命をも転換する、希望の宗教です。苦難を乗り越えるたびに福運を積み、永遠の幸福境涯を勝ち取るための信仰です。

たとえ今、「冬のごとし」という境遇であつても、必ず「春」の勝利を築くことができず、むしろ、苦難の「冬」の時こそ、成仏への転換点なのです。

妙一尼も、まさに、この「時」にあたつてしていると日蓮大聖人はご覧になられたことでしょう。夫に先立たれ、病の子らを抱えて生きるのは、どれほど心細いことか——しかし三世の生命からみれば、大聖人と共に苦難を戦い抜いた夫も妙一尼も、成仏という永遠の幸福の軌道に入っていることは間違いありません。

大聖人は、末法の一切衆生を救う大法を弘めるゆえに数々の大難に遭い、命をも奪われようとしました。しかし「一度もしりぞく心なし」（1224頁）、「喜悅はかりなし」（1360頁）と、何ものにも揺るがぬ大境涯を築かれました。

そして、大闘争を貫くなか、流刑地から生還され、蒙古の襲来で、かねてからの予見的中し、大聖人の正義が明らかとなつたのです。

ゆえに大聖人は、御自身の勝利の実証の上からも、大確信を込めて妙一尼に仰せです。「冬は必ず春となる。法華経を信ずる人が、苦悩の凡夫のままのはずがない」——だから、この信心を疑つてはならない。どこまでも前へ進むのだ、と。

池田名誉会長は小説『新・人間革命』に綴っています。

「厳しい試練の冬も、勝利の春が来れば、すべては喜びに変わる。涙あつての笑いです。労苦あつての歓喜です。苦闘している時には、"なんで自分だけ、こんなに大変な思いをしなければならぬのか"と思うこともあるでしょう。しかし、それは、自ら願ひ求めた使命の舞台なんです。苦悩が深ければ深いほど、それだけ偉大な使命を担っているということなんです」

勝利の春を確信し、青年学会の開拓に勇んで挑戦していきましよう！

若有聞法者無二不成仏 法華経方便品第2の文。「若し法を聞くことと有らば 一りとして成仏せざる」と無けん」（法華経138頁）と読む。法華経を聞いた人は、一人も漏れることなく成仏するという意味。



連載 新入会の友と語る

# 座談会御書

——御書を買ったそうだね！

はい。勉強しようと思つて……。

——素晴らしい決意ですね！

実は、以前、池田先生が初めて購入された学会版の御書の話を書いたことがあるんだ。

先生の御書には、「冬は必ず春となる」の箇所にも、赤えんぴつできれいに線が引いてあるそうだよ。

「信心を貫く人が幸福にならないはずがありません」——この短い一節を支えに、どれほど多くの学会員さんが、真冬のような苦悩の中で立ち上がり、温かな春へと進んでいったことか。きつと、今世紀も来世紀もその先も、しかも世界中の何億もの人々が、この一節から希望を湧かせて進んでいく

に違いない。人類を救う言葉だよ。学会永遠の指針だと思う。

すごい言葉なんですネ。

——ただね……。どうしようもない苦悩の中では、苦難を乗り越えられるとは、どうしても思えないものなんだ。春を迎えられると信じられなくなってしまう。本当の苦難とはそういうものだと思う。

きつと、そうなんですよ。

——自然界では、冬は必ず春となるよね。では、私たちがそうなるには何が必要なのか？

その答えが「若有聞法者……」（法華経方便品）の一節なんだ。

これは「もし法を聞くことがあれば、一人として成仏しない人はいない」という意味だけど、中に「聞く」という言葉があるだろう。



「聞く」とは、語ってくれる人がいる、ということだよな。

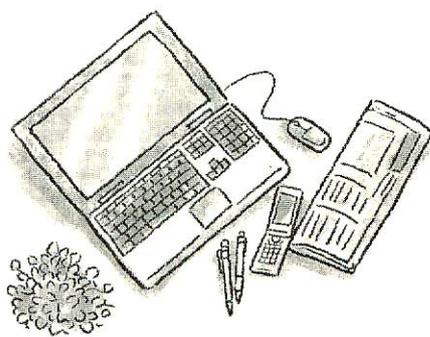
では、誰が法を語ってくれるのか——。それは家族や先輩や同志だけれど、そうした人たちが語る言葉の一番の根源にあるのは、きっと「師が教えてくれたこと」だ。

つまり、「師の教え」を聞くことができた者が必ず春となるんだ。聞くだけでいいんですか？

——仏法で「聞く」というのは、求道心のことなんだよ。つまり、師の教えを求めることなんだ。

すさまじい苦悩の中であって、師を求める——。その人は、すでに苦悩に勝っている。その心のある人には、すでに春が始まっている。このことを、日蓮大聖人は教えられているんだ。

その上で、苦難の冬を春とするために——。池田先生は、こう語



られている。「どんな困難があるうと、貫いていけ！ この一言の中に、一切がある」

……何を貫けばいいんですか？

——先生は、こう言われている。「貫く」。それは私どもでいえば、題目をあげていこう、一人また一人に語っていこうという実践である。冬から春へ——転換の具体的な道を知っている私どもは幸せである」と。

師を求める。そして、題目を唱える。学会活動をする。信心を根本に努力すれば、どんな苦難にも勝つ。春は来るんだ。

先生の御書に話は戻るけど、その当時の日記には、「身体の具合、悪し。背中に、焼けたる鉄板を一枚入れたるが如し」「身体しんたいの具合ぐあい、全く悪化」といった記述が続いているんだ。

確か、30歳まで生きられない、と医師から……。

——そう。しかし、そうした苦難のなかであつても、祈り抜き、戦い抜き、恩師に任せ抜かれたんだ。

昭和30年、先生はこう記されている。「法華経は冬の信心なり。冬は必ず春とならん。吾人の人生も又、斯くあるらん」——僕たちも、こう言える人生を進もうよ。

師を求める心から、春は始まる！

御書講義

観心本尊抄

御書全集……253頁17行目〜254頁9行目  
編年体御書……544頁3行目〜15行目

地涌千界 無数の地涌の菩薩のこと。千界は千世界。神力品第21には「千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地湧り涌出せる者」(法華経567頁)とある。千の世界をすりつぶしてできる微塵ほどに数が多いということ。初発心 初めて仏の悟りを求める心を起こした弟子のこと。地涌の菩薩とは、久遠五百塵点劫に成道した釈尊を師として、仏道修行に入った弟子である。寂滅道場 寂滅は悟りの境地。道場は悟りを得る場所。釈尊が今世ではじめて悟りを開いた、マガダ国の伽耶城の菩提樹下のこと。雙林最後 釈尊が入滅した

地涌千界は教主釈尊の初発心の弟子なり寂滅道場に來らず雙林最後にも訪わず不孝の失之れ有り迹門の十四品にも來らず本門の六品には座を立つ但八品の間に來還せり、是くの如き高貴の大菩薩・三仏に約束して之を受持す末法の初に出で給わざる可きか、当に知るべし此の四菩薩折伏を現ずる時は賢王と成つ

無数の地涌の菩薩たちは、久遠の過去に成仏した釈尊を師として仏道修行に入った弟子である。それにもかかわらず、釈尊が今世で初めて覚りを開いた場所にも來ず、釈尊が沙羅双樹の下で亡くなった時にも訪れなかった。親を大切にしない子のように、非難されて当然である。また、法華経の説法の間では、迹門の14品にも姿を見せず、本門でも、薬王品第23以後の6品では座を立つてしまった。ただ涌出品第15から囑累品第22までの8品の間だけ釈尊のもとに帰ってきたのである。このような高貴な大菩薩が、釈尊・多宝仏・十方の仏たちに対して末法の時代に弘めることを約束し、妙法蓮華経の五字を受持したのである。末法の時代の初めに出現されな

場所である、沙羅双樹の林のこと。

本門の六品 法華経薬王菩薩本事品第23から、普賢菩薩勸発品第28までの6品。囉累品第22で虚空会の儀式が終わり、地涌の菩薩も法華経の説法場の場を退出する。

三仏 虚空会に連なつた、釈尊、多宝仏、十方の分身の仏たち。

四菩薩 地涌の菩薩の中で指導者である、上行・無辺行・淨行・安立行の四大菩薩のこと。

後の五百歳 釈尊の滅後を五百年ずつ、五つの時期に区分したうちの最後の五百年。末法の初め 大集経には、この時代は、仏の教えの中でも論争が絶えず正しい教えが見失われてしまう(闘諍堅固・白法隱没)時であると説かれている。

て愚王を誡責し撰受を行ずる時

は僧と成つて正法を弘持す。

問うて曰く仏の記文は云何答

えて曰く「後の五百歳閻浮提に

於て広宣流布せん」と、天台大

師記して云く「後の五百歳遠く

妙道に沾おわん」妙樂記して云

く「末法の初冥利無きにあら

ず」伝教大師云く「正像稍過ぎ

已つて末法太だ近きに有り」等

云云、末法太有近の釈は我が時は

正時に非ずと云う意なり、伝教

いことがあるだろうか。

結論として以下のことが分かる。この地涌の菩薩の指導者である四菩薩は、折伏を實踐する時は、賢王となつて愚王を叱咤する。撰受を行ずる時は、僧となつて正法を弘め持つのである。

問う。仏の予言はどうか。

答える。薬王品に「後の五百年に、閻浮提(＝全世界)に広宣流布するだろう」とある。

天台大師は「後の五百年において遠く未来まで妙法が流布するであろう」と予言している。さらに妙樂大師は「末法の時代の初めにも、人々が気づかないうちに受ける利益(冥益)がないわけではない」と予言している。

伝教大師は「正法・像法の2千年は、ほとんど過ぎ去り、末法の時代がすぐそこまで近づいている」と言っている。

羯 中国東北部に居住した  
ツングース民族の一支族を、  
隋・唐時代の人が鞞鞞と呼  
んだ。日本は、その国より  
西に位置していると考えら  
れていた。

五濁 法華経方便品第2に  
説かれる生命の濁りの様相  
を5種に分類したもので、劫  
濁（時代の濁り）、煩惱濁  
（煩惱による濁り）、衆生濁  
（人々の濁り）、見濁（思想  
の濁り）、命濁（短命など  
寿命に関する濁り）をいう。

猶多怨嫉・況滅度後 法華  
経法師品第10の文で、「猶  
お怨嫉多し。況んや滅度の  
後をや」と読み下す。釈尊  
の存命中でも、反発が多い  
のだから、亡くなった後に  
は、より多くの反発を受け、  
大難に遭うのは当然である  
という意味。

自界叛逆・西海侵逼 自界

大師日本にして末法の始を記し

て云く「代を語れば像の終り末

の初・地を尋れば唐の東・羯の

西・人を原れば則ち五濁の生・

鬪諍の時なり経に云く猶多怨

嫉・況滅度後と此の言良とに以

有るなり」

此の釈に鬪諍の時と云云、今の

自界叛逆・西海侵逼の二難を指

すなり、此の時地涌千界出現し

て本門の釈尊を脇士と為す一閻

浮提第一の本尊此の国に立つ可

「末法の時代がすぐそこまで近  
づいている（末法太有近）」とい  
う言葉は、「私の時代は、その  
時ではない」との意味である。

伝教大師は、日本の末法の  
時代の初めについてこのよう  
に記している。「時代を言えば  
像法の時代の終わり、末法の  
時代の初めであり、場所を探  
れば唐の東・鞞鞞の西である。

教えを受ける人を考えれば五  
濁の衆生であり、大争乱の時  
代（鬪諍の時）である。法華  
経の法師品には『釈尊の存命  
中でも、反発が多い。まして  
亡くなった後には、なおさら  
のことだろう』と説かれてい  
るが、この言葉には、きちん  
と理由があるのである」

この中の「鬪諍の時」等と  
は、今起きている自界叛逆と  
西海侵逼という二つの難を指  
すのである。この時、無数の  
地涌の菩薩が出現して、本門

叛逆とは、仲間同士(なかにどしどし)の争い、内乱のこと。西海(せいかい)侵逼(しんひつ)とは、他国(たこく)侵逼難(しんひつがた)なこと、他国から侵略(しりやう)されること。蒙古(もうこ)襲来(しゅうらい)をふまえて西海(せいかい)と言われている。

月支(げつし) インドの別名(べつめい)。

震旦(しんたん) 中国の古い呼び名(よびな)。

## し月支震旦に未だ此の本尊有さず

の釈尊を脇士とする一閻浮提第一の本尊を、この国に立てるのである。インドにも、中国にも、これまでこの本尊はなかった。

## 池田名誉会長の

### 指導から

#### 1 御本尊は御本仏の慈悲の当体

この御本尊で民衆を救うていこうとする誓願があればこそ、日蓮大聖人の御精神が世界に広がったのです。

## 拜読の ために



## 日

蓮大聖人は、末法万年にわたって、全世界の民衆が幸福になるために御本尊をあらわされました。

もともと仏教は、「人間のための宗教」です。いかなる人も、自身の内に仏と等しい宇宙大の可能性があることを説いています。その力を引き出すための御本尊です。それが「観心の本尊」という意味です。「観心」とは、自分の心に十界の生命がすべて具わっていることを観ることです。十界を観るといつても、とりわけ仏界の生命を現すことが観心の目的となります。

「親心本尊抄」の結論に仰せのように、御本尊は御本仏の慈悲の当体です。広宣流布の実践なくして御本尊を拝しても、真実の仏の大慈悲は通つてこない。……御本尊の功力は無限大です。くめどもくめども尽きることがない。皆がこれまで受けてきた功德でもまだ比較することのできない、無量無辺の広大な功德がある。

その最大の功德が、人類の宿命の転換です。その功德を引き出すのが、創価学会の信心です。

そして、世界192カ国・地域に広がった地涌の菩薩の連帯が、御本尊の功力を覆郁と薫らせて、地球の無明を払うべき時を迎えたのです。『池田大作全集』32巻)

## 2 猶多怨嫉こそ正統の証明

末法が進んだ濁世にあつて、正しく妙法を弘めゆく人は、仏が受けた以上

私たちが、この御本尊を信じて唱題行を実践すれば、自身の胸中にある仏の生命を涌现することができまます。まさしく万人が成仏するための御本尊です。今回の「親心本尊抄」の範囲では、末法という争いの絶えない時代にあつて、全民衆を幸福にするために日蓮大聖人が御本尊をあらわされたことが宣言されています。

そして、そのことは、法華経や天台・伝教らの正師によつて証明される、仏教の正統の結論であることが示されているのです。

### 地涌の菩薩が末法に出現

地涌千界は教主釈尊の初発心の弟子なり……末法の初に出で給わざる可きか

# 法

華経では、滅後の一切衆生の救済のために、釈尊から上行菩薩をはじめとした地涌の菩薩への付嘱が行われます。そして、本抄では、この地涌の菩薩が正法・像法時代には出現せず、末法に初めて出現することが示されています。

その意義を明確にするために、ここでは地涌の菩薩の使命が、末法の民衆を救うことにあることが示されています。

大聖人は、無数の地涌の菩薩は、久遠の過去に成道した釈尊を師匠とする弟子であること。そして、この地涌の菩薩が釈尊の在世に姿を現したのは、法華経の本門の八品（涌出品第15から囀累品第22まで）の間だけであることが示されています。

この八品には、滅後のために、末法の全民衆を救う主体者として地涌の菩薩へ付嘱することが

の怨嫉おんしつの難なんを受ける。いな、受けなければ、真まことに広宣流布こうせんりゅうふを實踐じつせんしてはいえないという意義いぎである。大聖人の滅後めつごにおいて、大法弘通だいはうくつうのゆえに、提婆だいばの如ごとき、良觀りょうくわんの如ごとき極悪ごくあくの輩やからから、大妄語だいもうごを浴あびせられてきたのは、いつ誰だれか。わが創価学会そうかがくわいである。なかに、わが、初代しよだい、二代にだい、そして三代さんだいの師弟しでいしかいない。これこそ、創価そうかの三代さんだいが、釈尊しやくそん、そして大聖人だいせいじんに直結ちよくけつしている証あかしであり、仏意ぶつゐ仏勅ぶつちやくの正統せいとうの誉ほまれなのだ。(隨筆「人間世紀の光」2006年2月8日付聖教新聞)

### 3 大悪を大善に変え 平和の楽土を

近年さいねん、大規模だいきぼな自然災害しぜんさいがいが多発たはつするとともに、国際政治こくさいせいじにおいても、世界経済せかいけいざいにおいても、科学技術かがくぎゆつにおいても、大きな変動期へんどうきに直面ちうめんしていることは、論ろんを待ちません。……たとえ、どんな

説とかれています。すなわち、地涌じゆの菩薩ぼさつが、三仏さんぶつ(釈尊しやくそん・多宝仏たほふつ・十方じつぱうの分身ぶんしんの仏ほとけたち)と約束やくそくして、妙法蓮華經めつぽうれんげの五字ごじを譲ゆずり受けたのも、すべて末法まっぽうの民衆みんしゆを救すくうためです。したがって、この尊貴そんきな菩薩ぼさつたちが末法まっぽうの初はつめに出現しゆげんしないはずがないと仰おほせです。

### 地涌の菩薩の實踐を示す

当まさに知るべし此この四菩薩しほさつ折伏せつぷくを現げんする時は賢王けんおうと成なつて愚王ぐおうを誡責かいしやくし摂受せつじゆを行なする時は僧そうと成なつて正法しょうぼうを弘持くぐす

## 四

菩薩ぼさつ「とは、地涌じゆの菩薩ぼさつのリーダーである上行じやうぎやう・無辺行むへんぎやう・淨行じやうぎやう・安立行あんりつぎやう菩薩ぼさつのことです。この四菩薩しほさつが末法まっぽうに出現しゆげんする際に、具体的ぐたいてきにどのような出現しゆげんするかが示しめされています。

折伏せつぷくを實踐じつせんする時は、賢王けんおうとなつて愚王ぐおうを責せめる。摂受せつじゆを行なする時は僧そうとなつて正法しょうぼうを弘くめ持もつ、とあります。

ここで正法しょうぼうを弘持くぐすることを「摂受せつじゆ」と言いわわれているのは、現実げんじつのうえで、正法しょうぼうの敵かたきである悪王あくおうと戦たたかつ、「折伏せつぷく」の闘争とうそうと対たい比ひする意味いみで言いわれていると拝はいされます。

もとより日蓮大聖人にっれんだいせいじんの闘争とうそうは、愚王ぐおうを責せめる戦たたかいと、正法しょうぼうを弘く持もつする実践じつせんと両面りやうめんがあります。そのうえで、大聖人だいせいじんは、末法まっぽうの民衆救済みんしゆきうさいの大法だいほうを確立かくりつするために「僧そうと成なつて正法しょうぼうを弘持くぐ」することに重おもきを置おかれたことは言うまでもありません。

そして、大聖人だいせいじんが確立かくりつされた大法だいほうを弘通くわつうすることは、弟子でしたちの責務せきむです。

私わたしたちが、現実社会げんじつしゃかいの中で仏法ぶつぽうを弘くめ、その力ちからを、時代じだい、社会しゃかい、文化等ぶんかたうの面めんで發揮はつぱいし、民衆みんしゆ

災難や国難が起こったとしても、苦惱に喘ぐ民衆のため、「妙法が興隆する大瑞相」へと、転じていかねばならぬ。また、必ず大悪を大善に変えて、平和と繁栄の楽土を築いていくことができる。

そのために、地涌の菩薩が断固として躍り出て、立正安国、広宣流布に打って出るのだと師子吼されているのであります。(本部幹部会のメッセージ 2011年11月6日付聖教新聞)

#### 4 新たな「妙法の大興隆の時」が到来

今、日本中、世界中で、若き地涌の友が、「二陣三陣つづきて」(911バ) 歡喜踊躍し、登場してくれております。

21世紀の創価の青年群が決然と立ち上がった。ゆえに新たな妙法の大興隆の時が来たと、私は誇り高く宣言した

を救済することは「愚王を誠責」する実践となります。

現代で言えば「愚王」とは、民衆が幸福になる権利を妨げ、人間の可能性を限定的に捉え、縛りつける思想であると云えます。妙法を根幹に、人間を苦しめる一切の魔性と戦い、人類の境涯を高める実践をしているのが、私たち創価学会の活動です。学会こそが、地涌の使命を担う唯一の団体なのです。

#### 仏の未来記を挙げる

問うて曰く仏の記文は云何……猶多怨嫉・況滅度後と此の言良とに以有るなり」



ここでは、地涌の菩薩が必ず末法に出現することに、

の未来記と、それを証明する天台・妙楽・伝教の釈を挙げて、

日蓮大聖人が未来記に当たる方であることを結論されています。

仏の未来記とは、法華經樂王品の「後の五百歳の中、閻浮提に於て広宣流布せん」との經文です。この經文をはじめ、天台・妙楽・伝教の言葉は、いずれも、後五百歳における妙法の流通、広宣流布を予見した文です。

特に、末法の初めの様相について述べた伝教大師の言葉を重ねて述べられています。それは、大聖人御在世の日本が、伝教の述べた末法の通りになっていることを示されるためです。

まさしく末法とは、五濁が盛んであり、争いが絶えず、法華經法師品に説かれる「猶多怨嫉・況滅度後」そのものの時代です。民衆を苦しめるこの悪世の闇を照らすことこそ、地涌の菩薩の崇高な使命なのです。

いのであります（大拍手）。

御聖訓には、「真実に一切衆生の色心の難を止める秘術は、ただ南無妙法蓮華經である」（1170巻、通解）と断言されております。

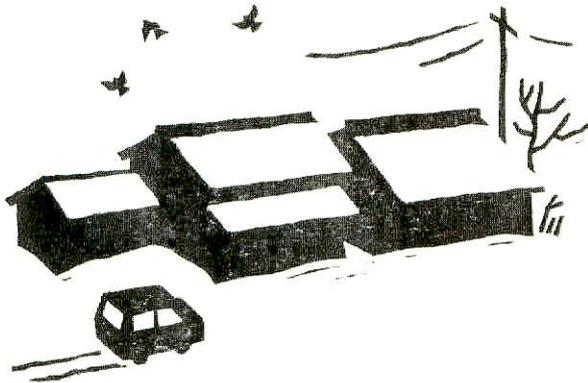
人類が渴仰してやまない、この妙法を、私たちは、さらに生き生きと、さらに勇氣凜々と唱え、

弘め抜いてまいりたい。

（本部幹部会のメッセージ）

2011年11月6日付

聖教新聞



### 「一閻浮提第一の本尊」

此の釈に……一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し月支震旦に未だ此の本尊有さず

# 大

聖人は、末法の様相の中で、とりわけ「鬪諍の時」という

点を強調されています。大聖人御在世で言えは、具体的には、「自界叛逆・西海侵逼（他国侵逼）」の二難が現実のものとなったことを指します。戦乱は人間を苦しめる最たるものです。

この時代に苦しむ民衆を救うために、地涌の菩薩が出現して、本門の釈尊を脇土とする一閻浮提第一の本尊を、この日本に建立すると断言されています。

「本門の釈尊を脇土と為す」とは、御本尊中央の「南無妙法

蓮華經「日蓮」の主題の左右に、釈迦牟尼仏・多宝如来が認められて、御本尊を指します。

すなわち、釈尊を仏たらしめた根源の法である妙法蓮華經の五字を根本とした御本尊です。

争いの時代に生きる民衆を救うために、大聖人は、一人一人の内にある妙法蓮華經の仏性を、そのまま涌现していくために御本尊をあらわされました。

したがって、一人一人が、自身に秘めた根源の力を引き出し、自他どもの幸福の大道を力強く歩みだしてこそ、大聖人が御本尊をあらわされた意義が完結します。そのために、仏法を弘通し、御本尊の功力を全世界で証明したのが創価学会です。

新たな「妙法の大興隆の時」を迎えた今、私たちは、さらに力強く、民衆救済の大法を弘通していきましよう。

# 誰にも仏界はある その確信を胸に對話を

研修教材

観心本尊抄  
かんじんのほん ぜんししょう

御書全集……241頁、6行目〜16行目  
編年体御書……530頁、9行目〜531頁、2行目

## 人

の心は、めまぐるしく動き、とどまることがありません。

悲しくつらいできごとに出あえば、どうあがいても乗り越えられない気持ちになり、まるで深い地下の牢獄につながれたような思いに沈みます。自分の周りのすべてが自身を責め立てているかのようです。そういう時は、出会う人の誰をも恐れ、反発し、嫌ってしまいがちです。願いが思い通りに叶えば、喜びにあふれ、まさに、天にも昇る気持ちになります。見るものすべてが自分を祝福しているようです。そうなれば誰に対してもお笑顔で優しくできたりします。自身の心の状態は、単に内面

の問題ではなく、自身から広がる一つの世界を作っています。それゆえ、仏法では「境界」と呼びます。

「観心本尊抄」では、人間の様々な状態を観察し、十種の境界を見つめます。そして、どんな境界であつても、あらゆる困難を乗り越え、自在に振る舞える境界である仏界が秘められていて、それを開き現すことができることを教えられています。

しかし、普通の人間である私たちに素晴らしい仏界が具わっていることは最も信じがたく理解しがたい（難信難解）のです。

日蓮大聖人は、今回学ぶ範囲で、この「難信難解」の壁を打

ち破り、仏界を開かせようと心を砕いて語られています。そのお言葉を拝し、共感と納得を深め、弘教推進への大きな契機としていきましょう。

### 九界の例を挙げ、 仏界への信を促す

自分自身に仏界が具わっていることを納得させるために、その他の九界が具わっていることをその特徴的な姿を挙げて示されています。

地獄界の特徴は「瞋」です。周囲がすべて苦しみの世界となり、やり場のない瞋りの世界です。餓鬼界は「貪」、飽くなき欲望に振り回される境界です。畜生界は「癡」、目先のこ

瞋り 三毒の一つ。怒り、うらむこと。  
貪り 三毒の一つ。執着し、貪ること。  
癡 三毒の一つ。愚かなこと。  
六道 十界のうち、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六つ。  
四聖 十界のうち、声聞・縁覚・菩薩・仏の四つ。  
人界 人間としてごく普通の平穩な境界。  
無常 常に生滅変化して移り変わり、瞬時と同じ状態にとどまらな

今数は他面を見るに但人界に限って余界を見ず自面も亦復是くの如し如何が信心を立てんや、答う数は他面を見るに或時は喜び或時は瞋り或時は平に或時は貪り現じ或時は癡現じ或時は諂曲なり、瞋るは地獄・貪るは餓鬼・癡は畜生・諂曲なるは修羅・喜ぶは天・平かなるは人なり他面の色法に於ては六道共に之れ有り四聖は冥伏して現われざれども委細に之を尋ねば之れ有る可し。

問うて曰く六道に於て分明ならずと雖も粗之を聞くに之を備うるに似たり、四聖は全

今、いくら他人の顔を見ても、ただ人界だけは見えるが、十界のその他の界は見ることはできない。自分の顔を見ても、また同様である。どうして(自分の中に十界が具わっていることを)信じることができるだろうか。

答える。何度となく人の顔を見てみると、ある時は喜び、ある時は怒り、ある時は平穩に、ある時は貪りを現し、ある時は愚かさを現し、ある時は本心を曲げて人の機嫌をとっている。怒るのは地獄界、貪るのは餓鬼界、愚かなのは畜生界、本心を曲げるのは修羅界、喜ぶのは天界、平穩なのは人界である。

このように、他の人の姿・形を見れば、六道がすべてある。四聖は潜在していて現れていないけれども、くわしく調べれば、必ずあるにちがいない。

問う。六道については、明瞭ではないけれども、だいたいのところを聞いた範囲では、それらはす

としか考ええず、正しい判断ができない愚かな境界です。そして、修羅界は「諂曲」、常に他者に勝ろうとする一方、自分をよく見せようと心を曲げて人に諂う境界です。

いずれも人が陥りやすい悪の姿です。

次に、道理に基づいて判断する穏やかで人間らしい境界が、人界です。欲求が満たされた時に感じる喜びの境界が天界です。以上六つの境界(六道)は、ふつうの人が日常生活で様々な縁に触れる中でしばしば実感できます。多くの場合、縁に突き動かされ、この六道をぐるぐると行き来するばかりです。これに対して、声聞・縁覚・菩薩・仏の四つの境界(四聖)は、仏法が説く覚りの真実を分々に得た境界です。

私たちの日常は、慌しく移ろう現実に踊らされて、鋭く真実

二乗界 十界のうち、  
 声聞・縁覚の二つ。  
 仏知見 仏の智慧のこと。  
 法華経方便品第2には「諸仏世尊は衆生をして仏知見を開かしめ、清浄なることを得しめんと欲す」（法華経121頁）とある。  
 仏眼 一切の事物・事象を正しく見通す仏の眼をいう。

く見えざるは如何、答えて曰く前には人界の六道之を疑う、然りと雖も強いて之を言つて相似の言を出だせしなり四聖も又爾る可きか試みに道理を添加して万か一之を宣べん、所以に世間の無常は眼前に有り豈人界に二乗界無からんや、無願の悪人も猶妻子を慈愛す菩薩界の一分なり、但仏界計り現じ難じ九界を具するを以て強いて之を信じ疑惑せしむること勿れ、法華経の文に人界を説いて云く「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」涅槃経に云く「大乘を学する者は肉眼有り」と雖も名けて「肉眼と為す」等云云、末代の凡

べてあるようである。しかし、四聖はまったく見えない。これは、どういうことか。

答える。あなたは先ほどまでは、人界に六道があることを疑っていた。しかし、事例を挙げて説明したところ、「あるようである」と言われた。四聖の場合もまた同じだろうか。試みに、すじ道を立てて、万分の一でも述べてみよう。

世間の無常のありさまは、いつも目にするものである。どうして人界に声聞・縁覚の二乗界がないだろうか。他人のことを顧みない悪人ですら、自分の妻や子にはやさしくする。これは、わずかでありますが菩薩界が現れているのである。ただし、仏界だけは現れるのが難しい。九界がそなわっていることと、仏界がそなわっていることとで、信じ、疑惑を抱くようなことがあつてはならない。

法華経方便品には、人界について説いて、「衆生に仏知見を開かせようとす」とある。また、涅槃経には「大乘の教を学ぶ者は、肉眼をもつた凡夫であつても、そ

を見抜くことはなかなか難しいので、四聖はなかなか現れませぬ。しかし、覚りの真実は万人共通です。ですから、ここでは、筋道を立てて見ていくと、一端の例を示すことができます。

例えば、春が終わり、桜の花が散り、秋が来て落葉するのを見ると、世の中は絶え間なく変化していると感じます。これは、声聞界・縁覚界という二乗が得る覚りである無常の一端と言えます。

また、他人のことを顧みることのない悪人であつても、自分の妻や子だけはいとおしむものです。これは、慈悲という菩薩界の特徴の一端です。

しかし、仏界だけは、なかなか現し出すのは難しく、それゆえ例を挙げるのも困難です。

### 妙法への信が仏界の証拠

そこで二つの経文を引かれていきます。

夫出生して法華經を信ずるは  
人界に仏界を具足する故なり

れを仏眼と名づける」とある。末  
法に凡夫が生まれて法華經を信ず  
るのは、人界に仏界が完全にそな  
わっているからなのである。



最初は法華經方便品です。

「仏たちは、衆生に具わる仏知  
見(仏の智慧)を開き現そうと  
するために、この世に出現す  
る」と説かれています。

仏の眼でみれば、あらゆる生  
命には仏の智慧の境界が具わっ  
ているのです。

次は涅槃經です。「大乘の教  
えを実践する者は、肉眼であつ  
ても、それは仏の眼である」と  
あります。

大乘の実践者、すなわち自他  
どもの幸福を真剣に願ひ行動す  
る人は、普通の人間(凡夫)の  
眼であっても、仏と同じ智慧の  
眼であるということです。

すなわち、凡夫が仏界を現す

といつても、決して何か特別な  
姿に変わるわけではなく、凡夫  
の身のままで成仏できることを  
示しています。

妙法を実践することで、仏が  
持っている智慧や勇気や行動力  
を発揮し、どんな困難も打ち破  
り、自らの個性を最大限に生か  
し切っていけることを教えられ  
ているのです。

妙法は仏の智慧の心そのもの  
です。妙法を信じ、日々の仏道修  
行に励めることそれ自体が、仏  
の心をわが心に行っていること  
であり、凡夫のままでもそれが可能  
なのは、私たちの生命に仏界が

もともと具わっているからなの  
です。膨大な努力の積み重ねで  
獲得できるものではなく、もと  
もとあるものであるからこそ、  
直ちに開き現していけるのです。

池田名誉会長はこう記してい  
ます。「誰も『永遠を感じる  
力』をもっている。……それは、  
『生命の尊厳を感じる心』と言  
つてもよいし、『人との絆を貴  
ぶ心』『自然・宇宙と共鳴して  
いく力』とも言える。そういう  
『善なる心』『善なる力』こそが  
法華經を信ずる信力の源です」  
と。

どれほど心を閉ざし、耳を貸  
そうとしない人でも、その人の  
生命には、仏界があり、必ずそ  
れを現すことができる。この  
ことを確信するところから、真  
の仏法対話は始まるのです。  
共感と納得の対話で、皆の仏  
界を開き、ゆるぎない幸福の絆  
の連帯を広げていきましょう。

# 聖人御難事

御書全集 1190ページ行目〜9行目  
編年体御書 1209ページ行目〜9行目

おのおの 師子王の心を取り出して・いかに人を  
をどすともをづる事なかれ、師子王は百獣に  
をぢず・師子の子・又かくのごとし、彼等は野  
干のほうるなり日蓮が一門は師子の吼るなり

本抄は「熱原の法難」の渦中  
である弘安2年(1279

年)10月、身延で認められ、門下  
一同に与えられたお手紙です。

若き日興上人の果敢な弘教で、  
富士方面、なかでも熱原郷には多  
くの日蓮大聖人の門下が誕生。こ  
うした勢いに危機感を抱いた滝泉

一人一人が師子王の心を取り出  
して、どのように人が脅そうとも、  
決して恐れてはならない。師子王  
は百獣を恐れない。師子の子もま  
た同じである。彼ら(正法を誹謗  
する人々)は野干が吼えているの  
である。日蓮の一門は師子が吼え  
ているのである。

寺の院主代・行智らは、大聖人門  
下の迫害を企てます。

本抄で大聖人は、門下一同に、  
「師子王の心」を奮い起こし、迫

# 勝利を決めるのは 勇敢な行動



害に屈することなく信心を貫くよう励まされています。

池田先生は、『師子王の心』が学会魂である。その勇氣は『取り出す』ものだ。勇氣のない人はいない。出していないだけなのである」「敗者は、座して困難や不可能の理由を、際限なく並べ立てる。勝者は、恐れなく勇敢に行動する。そこに、勝敗の決め手があるのだ」と綴ってくださいました。

昭和33年8月、長年、心臓病で苦しみ続けていた母が、「絶対、治る！」との、学会員の確信あふれる言葉を聞き、入会。信心に励むうちに少しずつ元気になり、学会活動に励むようになりました。元気になっていく母の姿と、わが家に来てくれる女子部の明るさにひかれ、昭和37年、私と妹、そして父も入会。しかし私は、人

間は、どうして苦しみながら生きなければならぬのか”との疑問が晴れず、いま一步、確信が持てませんでした。

しかし、任用試験の勉強をしている時に、転機がおとずれました。「生命は永遠」という言葉を初めて聞いたのです。「えっ！ 生命は永遠？」——体中に衝撃が走り、感動で涙が溢れました。学ぶもの、聞くもの全てが感動で、勉強会の帰り道、「ああ、生きてきてよかった。私の求めているものは、これだったんだ。広布に生き抜こう！」と心が決まりました。

私は歓喜に燃え、「妙法のジャンヌ・ダルクたれ」との師の叫びを胸に、友人に仏法を語り抜いていきました。

畳がへこむほど題目を唱え、折

伏に励んでいた母は、わが家の2階を学会活動の会場として提供。毎日のようにやってくる男女青年部に真心の激励を重ねました。

父も、「この信心は絶対に願いが叶う。もし叶わなかったら、首をあげる」と大確信で折伏を重ねていきました。迷っている人には、「とにかく自分で試してみんさい。絶対、結果が出るよ」と語り、共に唱題を。その中から、病気を克服した人、経済革命を成し遂げた人など、功德を受ける人が次々と現れました。

一家で折伏に邁進する毎日だったわが家に、障魔が襲いかかりました。父が交通事故に遭い、頭蓋底骨折で意識不明になってしまったのです。多くの同志が、父が意識不明の間、三日三晩、一時も途

絶えることなく懸命に題目を送ってくれました。この時ほど同志のありがたさを感じたことはありませんでした。

その後、父は奇跡的に意識を回復し、17日後に退院。後遺症もなく、報恩感謝の思いで、ますます広布の道に邁進していきました。振り返ってみれば、無我夢中で折伏に明け暮れた日々は、全てがキラキラ輝く楽しい思い出ばかり。弘教できた時は、体中から突き上げるような歓喜が湧いてきます。

現在、3人の子どもは、皆、結婚し、東京の広布の最前線で戦っています。孫3人も元気に育っており、1番上の孫が東京創価小学校で学んでいます。

2005年5月、アメリカ創価大学の第1回卒業式、奇しくも最

# 真しんの歡喜かんぎは 勇氣ゆうきの對話たいわにあり



初はつに入い会かいした亡なき母ははの誕たん生じう日びに、  
4世せ代だい5人ごにんで参さん加かできたことは、  
忘わすれ得えぬ思おもい出でです。全すべて折しやく伏ふくの  
功く徳とくと、感かん謝しゃの思おもいはつきます。  
「人じん類るいの 中ちゆうより選えらばれ 広ひろ島しま  
に 戦たたかう使し命めいを 誇ほこりと功く徳とくに」

——池田先生から頂いた和歌です。  
師しの平へい和わ闘とう争そうの精せい神しんを胸むねに、私わたしは、  
ひろしまじよせいへいわいじんかい  
広島女性平和委員会の一員として、  
発はつ足そく以い来らい30年ねん間かん、核かく兵へい器きのな  
い世せ界かいの実じ現げんをめざし、戦たたかつてきま  
した。広島平和記念資料館のピース  
ポランティアも務めています。

2000年には、「ヒロシマ・  
ナガサキ原爆展」(核時代平和財  
団など主催)に、被爆証言者と共  
にアメリカのサンタバーバラへ。  
ニューヨークで開催されたNPT  
(核拡散防止条約)再検討会議の  
サブイベントに、スタッフとして  
参加したこともありました。また、  
イタリアのローマやフィレンツェ、  
中国の南京や重慶などへ「平和友  
好の旅」をすることもできました。  
今月は、伝統の2月闘争から60

周年の佳節。昭和27年、75万世帯  
達成という戸田先生の願業を成し  
遂げるため、24歳の池田先生が一  
人立ち、勇氣の師子吼で折伏・弘  
教の波動を起こされました。広布  
史に燦然と輝く弟子の闘争です。

青年学会の構築をめざし、新時  
代の2月闘争を、平和の天地・広  
島から起こしていきます。そして、  
師弟不二の精神で、「この道確か」  
と、勇氣の言論を広げていきます。

## 品川 俊子

広島創価総務副総合婦人部長





## 社会で光る

しじょうきんごへんごしよ  
四條金吾編御書に学ぶ②



厳しい状況に、行き詰まりを

感じることがあります。

それを打開して大きく飛躍するためには

どうすればよいのか――。

発想の大転換を

四條金吾へのお手紙から学びます。

## 前

回学んだように、建治元年（1275年）3月ご

ろ、弱音をもらした四條金吾でしたが、日蓮大聖人の激励により、本来の勢いで信心に励んでいきます。

今回は少しさかのぼり、佐渡流罪中にいただいた「四條金吾殿御返事」（煩惱即菩提御書）に学びます。

大聖人が佐渡流罪中、残された鎌倉の門下も大きな迫害を受けました。その中で、金吾夫妻

強盛の大信力をい出して法華宗の

四條金吾・四條金吾と鎌倉中の上下

万人乃至日本国の一切衆生の口に

うたはれ給へ、あしき名さへ流す況

やよき名をや何に況や法華経ゆへ

の名をや（四條金吾殿御返事、1118頁）

強く盛んな大信力を出し

て、「法華宗の四條金吾、四條金吾」と、鎌倉中の上

下の万人、さらには日本国のあらゆる人々に褒めたた

えられなさい。

悪評でさえ広まるのであ

る。まして名声はいうまでもない。法華経ゆえの名は

さらにましていうまでもない。

は世間の悪評をものともせず、  
信心を奮い立たせていました。

本抄では「あなたもまた私・

日蓮に従って法華經の行者として人々に語られている」と仰せです。金吾たちは、万人の幸福を実現し、平和で豊かな社会を築く大聖人の仏法の真実と、それを教えるわが師匠の正義を訴えていたことでしょう。

しかし、いったん広がった悪評をなくすのは困難です。とかく悪い噂は、面白おかしく尾ひれがついて広がる。空しさに襲われる状況もあったでしょう。

だからこそ大聖人は金吾に教えられます。「法華經の信心を貫き通しなさい。火をおこそうとして途中で休んでしまえば火を手に入れることはできない」と。

### 逆境こそ正念場

逆境に出あった時、人はその  
厳しい現実に向けて打ちひしが

## 心の壁を破れ! 広い舞台がそこに

れてしまいがちです。しかし、  
そこが真価を示す正念場です。

「強盛な大信力を出しなさい。

そして『法華宗の四条金吾、四  
条金吾』と皆から褒めたたえら  
れなさい。鎌倉中の上下の万人  
に、さらには日本国のあらゆる  
人々に」。この励ましに金吾の  
心の世界が大きく広がり、戦う  
舞台が開けたことでしょう。

さらに大聖人は金吾に呼びか  
けられます。

「悪評でさえ広まるのであ  
る。まして名声はいうまでもな  
い」

法華經ゆえの名とは、釈尊は  
じめ、あらゆる仏たちが保証し  
た揺るぎない幸福の道で得られ  
る評価です。それを確立させれ  
ば、永遠不滅の名声ではない  
かと。

これは、発想の大転換です。  
「悪評」があるから「名声」を  
広げるのは難しいという思い込

みの壁を一撃で碎き、むしろチ  
ャンスだと示されています。

池田名誉会長はこの御文を拝  
し、こう指導しています。

「強盛の大信力」とは、強力  
なエンジンのようなものだ。猛  
スピードで、力強く、人生の道  
を突き進んでいける。

どうせ生きるなら、大目的に  
向かって、大確信をもって、自  
分自身の『栄光の山』を、悠然と、  
楽しみながら登りきることだ。

人生、弱くては、つまらない。  
『私は創価学会だ。だれが何  
と言おうが、偉大な創価学会の  
代表だ』。そのくらいの決心で、  
胸を張っていくべきだ」

師弟不二の心で正義の旗を掲  
げ、不屈の挑戦で自身と社会の  
心の壁を破り、広々とした人生  
という舞台で見事な勝利の劇の  
主役を演じきって、さすが学会  
員! と称えられる。それこそ、  
永遠不滅・真実の名声です。

# 売れっ子から一転 ホームレスに

**世** 界的な「とか」とか、仰々しい紹介をいただきました

が……（笑い）。私は、もともと何か類いまれな音楽の才能があったわけじゃないんです。余裕のある音楽家一家で育ったわけでもありません。大衆食堂の息子として生まれ、平均的、庶民的な青春時代を送っていました。

ただ、根っからの音楽好きで、トランペットの練習に明け暮れ、創価学会の中部音楽隊に所属していました。次第に、この道で生きていきたいとの思いがあふれ、プ

ロの音楽家の世界に飛び込んだのです。

24歳の時、世界的なジャズ・ドラマー、アート・ブレイキーに誘われて、ニューヨークに渡りました。偉大な演奏家たちと共演できる機会は刺激的でした。全米を演奏旅行し、喝采を浴びました。自作の曲がミリオンセラーになり、たくさんの印税も入ってきました。有頂天になり、ささいな事でエージェントと衝突。バンドを勝手に退団してしまったのです。あり余った財産も散財してしまい、食

ジャズ・ミュージシャン／トランペッター

お

の

しゅん

ぞう

# 大野俊三さん

hunzo Ohno

長引く不況で、若者を取り巻く環境は、日本のみならず、世界各国で厳しさを増している。そんな時代だからこそ、「人間って素晴らしい」「人生って山あり谷ありだけど楽しい」ということを、“再発見”“心発見”してもらいたい。

そのような思いを込めて、「誌上セミナー」を始めます。

第1回は、世界的ジャズ・ミュージシャンの大野俊三さんです。

不遇な時代に耐え、世界で最も権威ある音楽賞「グラミー賞」を2度も獲得。

交通事故や末期の扁桃がんを乗り越え、奇跡の復活を遂げた軌跡を大野さんが語ります。

## PROFILE

1949年、岐阜県生まれ。高校時代にトランペットを始める。74年に渡米後、ニューヨークを拠点に、ジャズ・トランペッターとして活動。自らが作曲した「バブルス」がミリオンセラーに。80年代に2度、グラミー賞を獲得。交通事故、末期がんを乗り越え、今も、バンドを率いて、世界各地での公演を続けている。



事にも事欠くホームレス同然の身に転落しました。  
「俺は最低だ。俺はダメだ」——  
すっかり自己嫌悪、自信喪失に陥りました。誰とも会いたくなくな

り、うつ状態になりました。

そんな時、アメリカの創価学会のメンバーが、この信心を勧めてくれたのです。私は、もともと学会員でしたが、一時の成功に酔い、当時は、信心から離れていたのです。わらをもつかむ思いで信心を始めました。

「信心をすると、まず何が変わるのか」とよく聞かれます。私の実感では、自分を卑下しなくなるというか、満たされた充実感や自信、やる気がふつふつと湧き上がってくるんですね。たとえ今、哀れで、惨めに思える姿でも、その自分を温かく包み、安心させてあげられるのです。すると、自分であることが、うれしくなってくるのです。そして、そのままの自分が最高に輝いていけるのです。

信心を始める前までは、「バカにされたりはしないか」と怯えて、人に言葉をかけることもできませんでした。それが、題目を唱え始



大野さんのライブからは、アメリカ生まれのジャズが日本の感性と見事に融合した響きが伝わってくる  
(Photo by Min-On)

# Junzo Ohno

## 世界一の音楽家になりなさい

めると、「こんにちは！」「お元気ですか！」と周りの人に挨拶ができるようになりました。さらに題目を唱えようと、多くの人も打ち解けられるようになったのです。なぜ、充実感や自分への自信が生まれたのか。それは、この仏法の原理に秘密があります。

この仏法では、自分の中に「仏」という最高の生命があると説いています。世間では、死んだ人のことを「仏様」と言いますが、死んでからでは遅い（笑い）。そうではなく、生きている人間が仏の生命を持っているんです。

でも、「仏の生命よ、出てこい」と言っても、自らが持っている仏の生命は現れてきません。仏の名前である「南無妙法蓮華経」を呼んであげること、その自分に秘められた仏の生命を湧き出すことができるのです。

「それじゃ、一人で題目を唱えていればいいのか」という人もいるかもしれませんが、これが難しいのです。中学から信仰していても離れてしまった私が言っているのだから、間違いありません（笑い）。

### 信仰実践のための絆

そこで大切なのは、この信仰を実践できるように、お互いに励まし、支え合う人間の絆がどうしても必要になってきます。それが創価学会なのです。

その創価学会の中心的な指導者が池田SGI会長なのです。全世界の創価学会のメンバーは、SGI会長にお会いしたり、聖教新聞などを通してSGI会長の指導や励ましに触れたりして、信心を貫いてきています。私も、信心で自分の可能性を大きく開いていくことができたのは、SGI会長

# 苦難が人を磨き輝かせる

の激励があったからなのです。

1981年、私は、訪米されたSGI会長と初めてお会いしました。当時の私は、レストランの皿洗いしながら、再び、音楽の舞台に立つことを夢見ていました。会長とお会いできるなんて、想像もしていませんでした。ところが、会合の地味な設営に取り組み私の姿を目にとめられた会長は、私を呼んでくださったのです。

いろいろな話を聞いてくださり、「世界一の音楽家になりなさい」と激励していただいたのです。そんな言葉をかけてくれた人は、それまで誰もいませんでした。夢ではなく、目標を示してくださいました。感激した私は、「世界一のトランペット奏者になろう」と決意しました。

レストランでの仕事の合間をぬ



昨年7月、大野さんは、宮城県石巻市を訪れ、慰問演奏を行い、自らの信仰体験を語った

って、必死でトランペットの練習に励みました。朝は誰よりも先に出勤し、昼休みも練習にあてました。

本物の宗教は、何の努力もしないで、棚からボタ餅を願うものではなくありません。努力しようとするパワーを生み出す力が、真の宗教

にはあるのです。

「今の時代は、いくら努力しようが報われない社会だ」。そう嘆く若い人は少なくないでしょう。その気持ちはよく分かります。それでも、陰の努力を見ている人は必ずいるのです。

地味で嫌がられる仕事でも、懸命に取り組みました。そんな私の仕事ぶりに、周囲も信頼を寄せ、音楽の道で成功するよう、応援してくれるようになりました。やがて、音楽の仕事の誘いがくるようになりました。そして、トップ・プロミュージシャンの世界に舞い戻る事ができたのです。

苦勞した事も含めた、喜怒哀楽の多くの人生経験が、音楽の幅を広げ、深みを与えてくれたのではないのでしょうか。

1980年代に、世界で最も権威ある音楽賞「グラミー賞」を2度にわたって受賞することができました。



hunzo Ohno

## 世界のオオノは復活した

私が強く訴えたいのは、困難にへこたれない力、逆境をチャンスに変える力が、この信仰にはあるということなのです。

日蓮大聖人のお手紙にこうあります。鉄は、炎に入れて熱して打てば剣となる。人間も、苦難を乗り越えることで磨かれるのだと。

### 演奏家生命の危機

順風満帆な人生を送り続けられる人など一人もいません。人は誰しもが、病気や経済苦、人間関係の軋轢などの困難に直面するものです。その時に、逆境に負けるか、飛躍するチャンスにするかの違いが、幸不幸を分けるのです。そのカギを握っているのが、この信仰なのです。

私も、人生で2度、大きな危機に見舞われました。

一つは、1988年、友人の車

に乗っていて、交通事故に遭ったことです。辛うじて命は助かりましたが、前歯が折れ、上唇の筋肉が裂けました。トランペット奏者にとって、唇は命です。医師から「演奏家生命を失うことを覚悟してください」と言われました。その時はショックでした。

でも、気持ちを切り替えました。「これで世界一のトランペット奏者になれるぞ」と。

やけになったわけではありません。私は、音楽学校に通った経験がなく、自己流でやってきました。「この機会を利用して、基本に立ち返り、本格的に学び直そう」と思ったのです。

全米の超一流の師匠に次々と教えを求め、貪欲に学びました。初めは、手術で縫った唇を思うように動かせず、まともな音さえ出せませんでした。それが2年ほど訓

「創価学会の日」に寄せて、大野さんが池田SGI会長への感謝の思いを込めて、捧げたアルバム「SAKURA」。日本人なら誰もが知っている「さくらさくら」がモチーフとなった曲も入っている



練を重ねるうちに、だんだん元の音が出せるようになり、そして、以前にも増して、いい響きの音も出せるようになりました。

1995年には、音楽人生どころか、命の危機に直面しました。末期の扁桃がんと診断されたのです。たとえ手術に成功しても、唾液が出なくなるので、2度とトランプは吹けなくなるとのことでした。「本当に残念です。助かる見込みはありません。悲劇としかいいようがありません」。医師は、私と妻を抱きかかえて、ひどく落胆していました。

でも、私たちは、「もう、これで終わりだ」とか、これっぽっちも思いませんでした。「今こそ、鉄を鍛え打って、強靱な剣となる時だ。再び演奏ができるように手術し、治療してくれる医師がいるはずだ」と確信したのです。池田SGI会長からも真心の励ましをいただき、必ず勝利の報告をしよう

うと誓いました。

ひたすら真剣に祈り抜く中、願っていた通りの名医に巡りあい、手術は見事に成功しました。

手術後も、厳しい闘病生活が待っていました。扁桃腺の周りの筋肉を大きく切除したために、食事をするのにも、手で口をこじ開けなければなりません。過酷な放射線治療やリハビリに耐えた結果、演奏活動ができるまでになりました。

命に及ぶ病を経験したことで、人の気持ち分かるようになりました。以前は、自分が満足するだけの演奏をしていたのですが、病後は、多くの人が楽しめる音楽を、と考えられるようになったのです。

本格的な復帰の舞台は、世界中の音楽家が憧れるカーネギーホール。1996年6月でした。会場には池田SGI会長が見に来てくださいました。力の限り、トラン

ペットを吹きました。

「世界のオオノは復活した」「大病を克服して、オオノの音は、一段とよくなった」。専門家からも絶賛していただきました。SGI会長との約束を果たそうと懸命に努力したことによって勝利することができたのです。

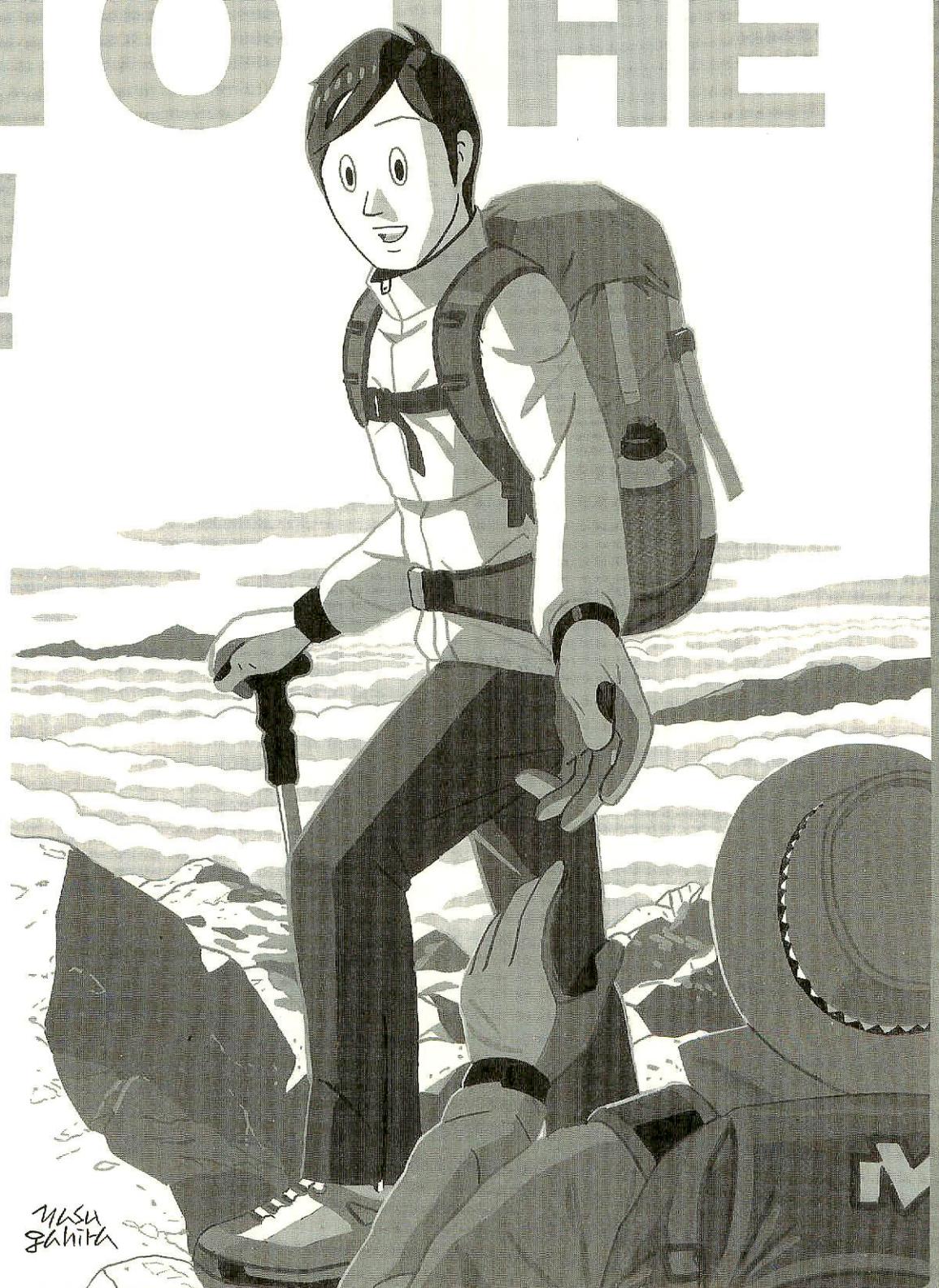
### 桜梅桃李の精神で

私は、音楽の道で輝くことができましたが、皆さんには、皆さんにしかない使命の道が必ずあるはずです。自分と他人をあれこれ比べて、背伸びをする必要もなければ、卑下することもありません。

仏法では、「桜梅桃李」を説きます。桜は桜、梅は梅の魅力がある。人間も、全ての人にその人にしかない輝きや使命が必ずあると教えているのです。

ぜひ、この信仰で、あなたにしかない輝きを見つけ、花を咲かせ、見事な人生を歩んでいってください。

# TO THE !



MUSA  
SAHITA

# POWER 青年は変革力 PEOPLE

## 人に尽くしゆく青春

大聖哲は、示しめしておられる。

「人のために灯ひをともしあげれば、

自分の前も明るくなる」と。

利己主義、悪あしき個人主義の殻からに閉じこもった青春は寂さびしい。

人のため、社会のために尽くしゆく青春——。

その人には、温あたたかさがある。強かたさがある。輝かがやきがある。

人に勇ゆう気と希望きぼうの灯ひをともしゆく、

最高さいこうに価値かちある人間の道を歩んでいきたいものだ。

語る—— 志村康洋しむらやすひろ 株式会社京王プラザホテル 代表取締役社長

挑む—— 私のチャレンジ・ノート

学ぶ—— 池田名誉会長の言葉から

# 語る

しむらやすひろ  
志村康洋さん

株式会社  
京王プラザホテル  
代表取締役社長

## 大切なのは心 だからこそ 心を磨く努力を

今から41年前の1971年(昭和46年)、新宿で第1号となる超高層ビルが誕生した。京王プラザホテルである。従来のホテルの概念にとらわれず、次々と新しい挑戦を続けてきた同ホテル。その先頭を走る志村康洋社長に、話を伺った。



### 人が集まり、触れ合う場

昭和46年に貴ホテルがオープンした折、世間では「あんな

何もない所に巨大なホテルを作るなんて、無謀なので

は？」といった批判の声があつたようですね。

志村 今のように、超高層ビルが一つもなかった新宿に、突如、地上170メートル、客室が1000を超える巨大ホテルが建

つたのです。当時、「山手線の外側に、国際的なホテルが建つても、成功しないのではない

かと思われていたようです。

しかし、当時の社長は、「都市の発展には、必ずホテルが必要となる」との信念がありました。とともに、わが社は、「ホテル」であると同時に、「プラ

ザ」、すなわち「広場」であるとのコンセプトがありました。

そのころ、限られた方たちだけのものだったホテルを、もっと幅広い人たちに開放し、誰でも、自由に楽しんで利用いただけるものにして、人が集まり、人が出会う、人と触れ合うことができるような広場(プラザ)にしようと考えたのです。レストランやバーも、開業時で19店舗を用意しました。

京王電鉄が、ホテル業界に進

# 素人でも真心が こもっていれば



新宿に開業した当初の  
京王プラザホテル

出したことで、世間の注目が集まり、記者会見が行われました。席上、記者から「ホテル業務に精通していない素人が大多数の出発で、不安はないのか？」と質問されました。

しかし、時の社長は、「たとえ素人でも、真心がこもっていれば、お客さまは必ず満足されると信じています」と返答。その力強い声に、囁くまでも、会場に拍手が鳴り響いたそうです。

ともあれ、おかげさまで、昨年、開業40周年を迎えることができました。

これまでたくさんのお客さまにご支持いただき、実に1億4000万人の方々に、ご利用いただきました。

——新しいことに、次々と挑戦してこられたそうですね。

**志村** その通りです。「新しいものに挑戦しよう」というのは、創業以来の伝統です。そのDN Aは、40年を過ぎた今でも、脈々と受け継がれていると自負しています。

国内で初めて、「ウエディングチャペル」を常設したのもわが社です。バリアフリーについても、どこよりも先駆けて、高齢者や障がい者に配慮した、ユニバーサルルームや補助犬専用のトイレを設置したりしました。

また、全客室に、24時間無料で、超高速インターネットの配信サービスも手掛け、国土交通大臣表彰を受けました。

最近では、結婚式の本番前、花嫁とご家族がゆったりとした気持ちで語り合える「ブライズ

ルーム」という婚礼施設をご用意しました。お子さま連れのお客さまでも気兼ねなくご利用できるようにと、「授乳室専用ルーム」も新設しました。

また学会員の皆さまが、ホテル内で仏前挙式ができるよう、いち早く、準備を整えております。

**しょんぼりしてはいけない!**

——今度は、志村社長についてお伺いします。今まで最も影響を受けた人は誰でしょうか。

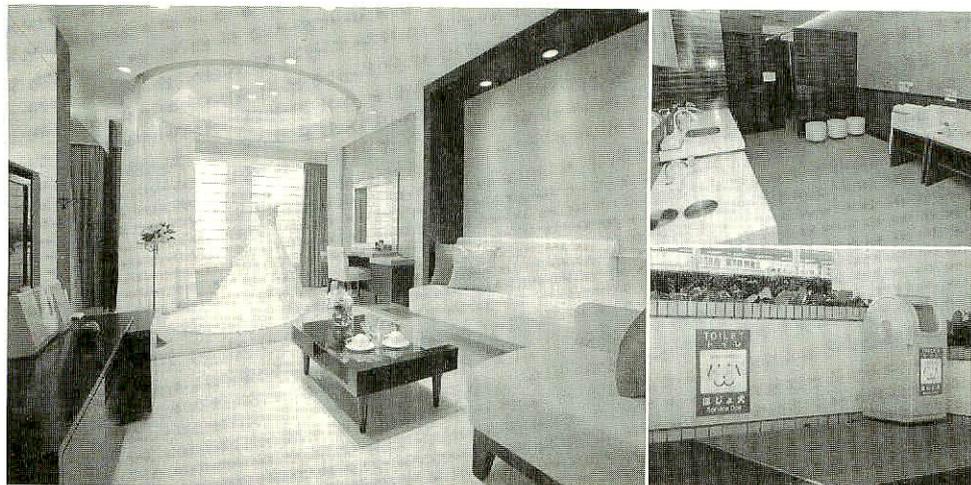
**志村** 中学2年の担任だった先生です。今でも年に1〜2回、一緒に食事をしたり、旅行をしています。

先生の姿から、先生というのは、こんなにも生徒のことを考えているものなのか、そんなことを感じました。

そのころ、先生とクラスメー

# 何があっても毅然と胸を張れ!

左が、好評の婚礼施設「ブライズルーム」。  
時計回りに、「授乳室専用ルーム」「補助犬専用のトイレ」



ト全員とで交換日記をしていました。毎朝、日記を先生に出すのですが、帰宅時には、50人ほどの生徒全員に、必ずコメントを書いて返してくれました。授業もあるのに、一体、どこにそんな時間があったのだろうと不思議でなりませんでした。

また、ある時、ちよつとしたことで、心を傷つけられたことがあります。すると先生は、私を宿直室に呼び、こう優しく励ましてくれました。

「どんなことがあっても、しよんぼりしてはいけませんよ。しよんぼりするということは、相手に自分の弱さを認めることになるからです。何があっても、毅然と胸を張り、堂々としていなさい」と。

私の母が亡くなった時も、「今日から、私がお母さんの代わりだね」と、声をかけてくだ

さいました。

“先生を裏切ってはいけない”。  
そう痛切に思いました。

今、振り返れば、一人の生徒のために、心を砕くように接してくださった先生の生き方こそ、私のホテルマンとしての原点になっています。

——これまで大勢の客と接してこられたと思いますが、忘れられない方はいますか。

**志村** 特に感銘を受けたのは、当時、人気ナンバーワンの若手男性シンガーです。ディナーショーを開催したのですが、ショーが終わった後に、わが社では、慰労の意味を込め、簡単な打ち上げを準備していたのです。

ショーが終わり、彼が打ち上げ会場に入ってきたので、開始しようとした。すると、それを制止するのです。理由を聞



もてなす心が、ホテルの隅々にまで行き届く



いて驚きました。「舞台の裏で、片付けをしているスタッフの人たちが、仕事を終えるまで待ってください」というのです。結局、彼は、食事を前に、箸もつげず、水も飲まず、皆が来るのを待ち続けました。

当時、彼は世間から時代の寵

児のように、もてはやされていました。しかも若い。驕りが生まれ、周りが見えなくなってもおかしくない。なのに、彼は流されていなかった。人としての基本を見失っていない。た

いした人だなあと感じました。その後、彼は人気歌手として

名を馳せておられます。やはり、人格の成せる業なのではないかと、私は見えています。

## 「ホテルマンらしくあれ」

——社長として、心がけてこられたこと、また社員に対し訴えてきたことは何でしょうか。

志村 社長として心がけてきたことは、

「現場が一番大切」ということです。就任から今日まで、ずっとその思いで仕事に携わってきました。

現場で何が起きているのか、今、どんなことが問題になっているのか、社員の目は輝いているのか、常に現場に身を置き、現場の空気を感じなければならぬと思います。

また、社員に訴えていることは、「よく考えよう」ということです。わが社には、これまで先輩方が築きあげてくれた、「自由闊達」という社風があります。誰でも、自由に意見を言合える雰囲気があります。

ただし、単に和気あいあい、言いたいことを言うだけでは、上つ面ばかりになって、深さがないものになってしまう。自由に意見を言うのもいいが、とことん考え抜いた意見を言っても



「会員のために!」——創価班、  
牙城会、白蓮グループのメンバ  
ーの思いは一つ



raitaitai to kakaete imasu.  
深く考えれば、何が一番、肝  
心なのか、次第にその本質が見  
えてくるものです。その深い思  
索が本人の成長につながるし、  
ひいては会社の発展にもつなが

ります。会社の発展といっても、  
決め手は、社員の成長です。社  
員の成長が、会社の命運を左右  
するし、将来を決めます。  
もう一つ、社員に訴えている  
ことがあります。「ホテルマン  
らしくあれ」ということです。

——「ホテルマンらしく」とい  
うのは、具体的には?

**志村** 職業の中には、とりわけ  
職業観の間われる仕事というの  
があるとと思っています。

たとえば、警察官であれば、  
正義感ということになるでしょ  
うし、教師であれば、子どもへ  
の愛情、医師であれば、命を大  
事にする気持ちということにな  
るでしょう。

ホテルマンの職業観とは何か。  
私は、「お客さまの喜びを、自  
分の喜びとする」ということでは  
ないかと思っています。

「相手の身になる」、つまり、  
「お客さまの身になって」努力  
することを、自分の喜びとでき  
るかどうかです。

そうした心の持ち方というの  
は、決して仕事だけで培えるも  
のではありません。常日頃から  
の心がけが大切だと思います。  
誰が見ても、また、いつ、どこ  
にいても、あの人はホテルマ  
ンのような人だね」と言われる  
ようになってほしいと訴えてい  
ます。

### 大切なのは「マインド」

——創価学会では、会員の方々に  
気持ちよく会館を使っていた  
だくため、青年部や壮年、婦人  
部の代表が、受付や運営などの  
対応に当たっています。ホテル  
マンの立場から、ぜひ、アドバ  
イスをお願いします。

**志村** 会館に集ってこられる

## 人の喜びを喜びとする優しさ

方々の対応をされている皆さまと、私たちホテルマンは、その精神性において、共通する部分が多いのではないかと思います。

ホテルマンに求められるのは、「相手の喜びを、自分の喜び」と感じる、人間としての優しさです。大切なのは、テクニクではありません。マニュアルでもない。重要なのは、マインド、すなわち「心」です。

心がすさんでいて、仕事の時だけ、上手にお客さまと対応しようと思っても、それは小手先です。それでは、お客さまに心から喜んでいただくことなど、到底できません。

そういう意味で、日ごろから「心を磨くこと」が大切です。心を磨くためには、普段から感動することではないかと思えます。一流の芸術に触れたり、自身を成長へと向かわしめる、素

敵な人と出会ったりすることが、秘訣ではないでしょうか。

——平成18年、聖教新聞の創刊55周年の祝賀会が、約600人の来賓を招いて、札幌の京王プラザホテルで開催されました。その陣頭指揮を執られたのが、志村社長でした。

**志村** “なんとしてもこの祝賀会を成功させよう”との学会の皆さまのものがすごい熱意を感じました。

そうした熱意の渦に、私たち従業員が、いつの間にか、のみ込まれていったというのが、率直な感想です（笑い）。

とにかく、学会の皆さまが、来賓の方々を心からもてなそうとされている姿がとても印象的でした。これは決してお世辞ではありません（笑い）。おかげさまで、祝賀会を大盛

況で終えることができました。あの日のことは今でもはっきり覚えています。私をはじめ、従業員一同、とても素晴らしいひとときを送らせていただいたと、今でも誇りに思っています。

——研修のために世界から来日するSGIメンバーも、貴ホテルを利用していただいています。

**志村** SGIの皆さまの姿に、実は私たち従業員一同、心から感服しているのです。

まず、マナーが素晴らしい。私たちに対しても、真心をもつて接してくださいます。まさに紳士・淑女といった振る舞いで、とても礼儀正しいです。

何より印象的なのは、そのとびきりの笑顔です。いったい、どちらが本当のホテルマンなのかと疑いたくなるような素敵な

## 楽を求めず、あえて苦勞の道を



遠来の友を讃え、心からの励ましを贈る池田名誉会長(2008年、東京)

方たちばかりです。

私は、池田名誉会長に、直接、お目にかかったことはありませんが、折あるごとに、ご伝言やメッセージを、私個人や会社に贈ってくださいます。大変なお心遣いと、きめ細かな真心に、いつも恐縮していますし、また、大変に光榮に思っています。

SGIの皆さまを拝見しても分かりますが、平和・文化・教育の理念を展開されるSGIの運動が、ここまで世界に受け入れられ、広がったのも、ひとえに池田名誉会長のお人柄とご指導によるところが大きいのではないかと思います。

### 「人生に近道なし」

——最後に、青年にメッセージ

をお願いします。

**志村** 私の座右の銘は、「人生に近道なし」です。人間、楽をしようとはかり、思っただけではありません。早く目的地に着こうとはかり、思っただけありません。

楽をせず、あえて苦勞の道を、一歩、また一歩と歩んでいく。そうすると、楽をしていたのでは決して見えなかったものが、必ず見えてくる。苦勞の道を進んだことが遠回りに思えることがあっても、後で振り返ると、それが最良の道だったと感じるようになるものです。私は、何かあるたびに、そう自分に言い聞かせてきました。

青年の皆さまの行く末に、私の話が何らかのヒントになれば、これ以上の喜びはありません。

**就** 職してすぐのこと。同期入社した仲間の中で、自分だけ浮いていると感じるようになった。

「なんでだろう？ 僕の何がいけないんだろう？」。本屋に行き、「人と上手に付き合う方法」といった本を読んだり、テレビを見て、お笑い芸人の話術を研究したりした。

しかし、そんな努力も全て空回り。次第に、人と会うのも、人と話すのも、つらいと感じるようになり、人を避けるようになった。

うれしいとか、楽しいという感情が消え、身の回りで起こるすべてのことが苦痛になった。自殺の二字が何度も頭に浮かんだ。でも、それを実行する気力すら、もうなかった。

1年後、精も根も尽き果て、心療内科を受診した。重度のうつ病と診断された。

病名が分かり、ホッとした。と同時に、社会の落後者との烙印を押されたようで、また激しく落胆した。

### 「大丈夫。絶対、大丈夫」

僕は学会3世として育った。信心強盛な母は、ことあるごとに信心の大切さを語ったが、自分には関係ない、自分の意思で入会したわけではないと、ずつと聞き流していた。

学生のころは、成績優秀だった。高専に進んだ後、編入試験で、東大、京大、筑波大と全て合格した。

京都大学に進んだ後、大学院への試験では、学科で1番だった。

## 挑む — 私のチャレンジ・ノート



さとう だいすけ  
**佐藤大輔**

35歳 男子部本部長  
愛知・名古屋市

弁理士

POWER TO THE PEOPLE! 青年は変革力

た。就職も、航空宇宙工学のエンジニアの仕事に就いた。自分は特別な存在で、周囲の人とは違う、そう本気で思い込んでいた。

なのに……うつで、つまづいた。プライドが、ズタズタに切り裂かれ、地の底に突き落とされたようだった。

そんな僕の心に、一縷の望みとして浮かんだのが、母から何度も聞かされた「信心」だった。

重い体を引きずるように、聖教新聞の配達員さんに連絡し、男子部の方の連絡先を教えてくださいました。

男子部の先輩は、すぐに来てくれた。「うつになりました」。そう正直に告白すると、先輩は明るく言った。「大丈夫。絶対、大丈夫」

「大丈夫じゃないから、こう

いつも支えてくれた仲間と学会活動に励む佐藤さん⑧



## 「人のために」と祈り戦う そこに本当の喜びがある!

して電話したんじゃないか。内心、カチンときた。しかし、その先輩は、親身になって僕の話聞いてくれた。「大丈夫」。この言葉に込められた、深く温かな真心を心で感じた。真つ暗闇だった僕の心の奥に、小さいけれど、明るく、そして温かな火が灯った。この人についていけば、大丈夫かもしれない。そう僕は、直感した。

### 感じたことのない喜び

先輩に言われたので、勤行・唱題に励んだ。うつの症状は依然として続いていたが、毎日、薬をきちんと飲みながら、無理をせず、僕なりに続けた。

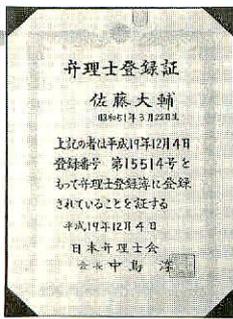
先輩は、よく僕を車に乗せ、家庭訪問や会合に連れて行ってくれた。こんなことをして、何の意味があるんだろう、と思うこともあったが、とにかく、いつも先輩について戦った。

そんな僕が、先輩の見よう見まねで、一人で家庭訪問を始めていった。しかし、部員さんに会いに行っても、居留守を使う人もいた。目も合わせようとしていない人もいた。まるで昔の僕を見ているようだった。

しかし、僕のように、心というのは、変わるものだと実感した。「悩んでいることがあったら、電話ください」。そうメモを書いて、玄関に置いたところ翌日、連絡があり、初めて会って、話を聞くことができた。

一つ、また一つ、一步、また一步、部員さんとの距離が近づいていった。些細といえば、あまりにも些細な一つ一つの出来事に、僕は今まで感じたことのない喜びを感じていた。ふと気がつくのと、祈ることの全てが、部員さんの成長、部員さんの幸せになっていった。

うつの症状も、薄紙を剥ぐよ



信心で勝ち取った難関資格・  
弁理士の登録証

### 弁理士試験の挑戦を開始

うに、軽くなつていった。活動を始めて2年が過ぎたころ、医師から告げられた。「もう薬を飲まなくても、診察にこなくとも結構です」。永遠に続くように思われた、あの苦しみと、ついに決別できたのだ。

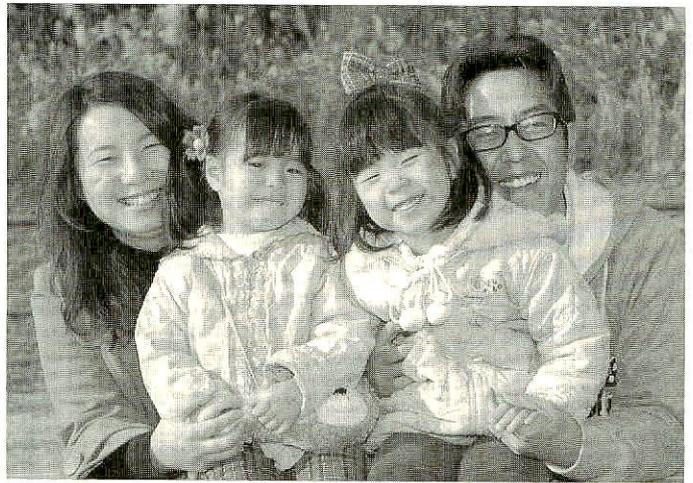
自分の救いだけを求めて、必死にもがいてきたけれど、「人のために」と祈り、行動する中に、自分自身を救う確かな道があったのだ。

「大丈夫」。男子部の先輩のあ  
の聲が蘇り、胸が熱くなった。

うつつが完治し、僕が関わって

きた仕事も一段落  
したことで、特許  
事務所に転職した  
と同時に、弁理士  
の資格への挑戦を  
開始した。弁理士

かけがえない家族と共に(右から  
佐藤さん、長女・春奈ちゃん、次女・  
心美ちゃん、妻・久美子さん)



というのは、  
特許や商標を  
専門に扱う国  
家資格で、毎  
年1万人が受  
験し、600  
人が合格する  
難関の資格だ。  
同じころに  
妻と結婚し、  
男子部では部  
長になった。  
仕事をし、学  
会活動を終え  
た後、勉強は、深夜1時から3  
時までと決め、頑張った。しか  
し、必死の努力もむなしく、1  
年目も、2年目も不合格だった。  
これだけ頑張っているのに、  
もう僕には無理なのか、と弱気  
になりかけた。その時、池田先  
生の指導が飛び込んできた。  
「断じて勝つと決めて、祈り、

行動する人が、最後は必ず勝  
つ」。まるで僕に直接、語りか  
けてくれているように思え、  
「よし、次こそ必ず」と、固く  
誓った。  
猛然と祈り抜いて迎えた3年  
目。妻や同志の皆さんの祈りに  
包まれ、念願の合格を果たすこ  
とができた。現在、大手企業の  
特許出願の業務に励む一方、弁  
理士同友会の幹事として奮闘し  
ている。  
重度のうつつに苦しみ、薬にも  
すがらないで電話をかけた、あ  
の時から、僕の人生は大きく変  
わった。あのころの自分には想  
像もできなかったくらいに。  
僕は今、あふれる喜びのまま  
に、叫びたい。「人のために、  
自分のできる限りのことを尽く  
していく! そのなかに、人間  
としての本当の喜びがあるん  
だ」と。

# 学ぶ——池田名誉会長の言葉から

昨年、世界の総人口が70億人を突破しました。その中で、自分が出会える人数は限られています。考えてみれば、目の前の人と出会うことって、奇跡的な確率です。

「袖振り合うも多生の縁」——  
ちよつと袖が触れ合っただけの関係でも、過去世から結ばれた縁。そう思えば、会社の同僚や地域の友は、すごく深い縁があるのではありません。

インターネットで使われる「リア充」。仕事や趣味など、現実生活が充実している人を指す言葉です。では、本当に人生を満喫している人とは、どういう生き方をしている人でしょうか。  
自分一人のために生きている人は、見た目は良くても、心には言い知れぬ不安とむなしさが同居しているもの。心の底からの喜びや充実、人のために行動する中にあるのではないだろうか。

## 「人のため」に人生の喜びが

44

PROVERB

自分のためだけではない。人のために生きる。人のために尽くし、ともに希望の道を進んでいく——そこにこそ、人生の喜びと価値は光る。



45 PROVERB

縁えんしている人を大切に

どこか遠くに特別な人とくべつがいるのではない。権威けんいの人、知識ちしきの人、有名ちよめいの人、富とみの人が大切たいせつなのではない。自分が、今、縁えんしている人、その人を大切たいせつにしていく。そばにいる、あの人、この人を、その人の特とく質しつを考えながら、全部、生かしまわっていく。それが賢人けんじんである。

親おや

孝行こうこう、読書家よみか、恩おんに報むかいる生き方いきかた——世界せかいの偉人ゐじんに共通きょうつうしている側面そくめんです。

「他者た者に尽つくくす」という生き方もまた、彼らかれらに共通きょうつうしています。偉業ゐぎょうを成し遂とげることができた力の源みなもとは、自分の中にある可能性かのうせいを發揮はつきできたからでしょう。その鍵かぎは、「人に尽つくくす行動こうどう」にあるのです。

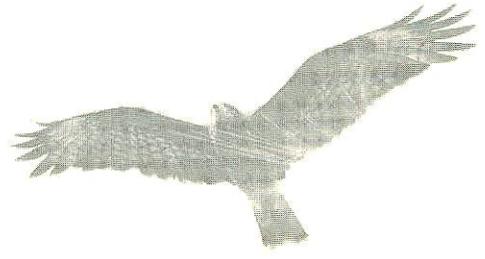
46 PROVERB

他者た者に尽つくくせば力ちからが出る

自分自身じぶんの中にある「無限むげんの力ちから」——それは、他者た者の幸福しあふのために尽つくくす行動こうどうによって解とき放はなつことができる。そこにこそ、真まの幸福しあふがある。

世界平和に尽くし抜く師匠に、青年よ続け！(2003年、東京)





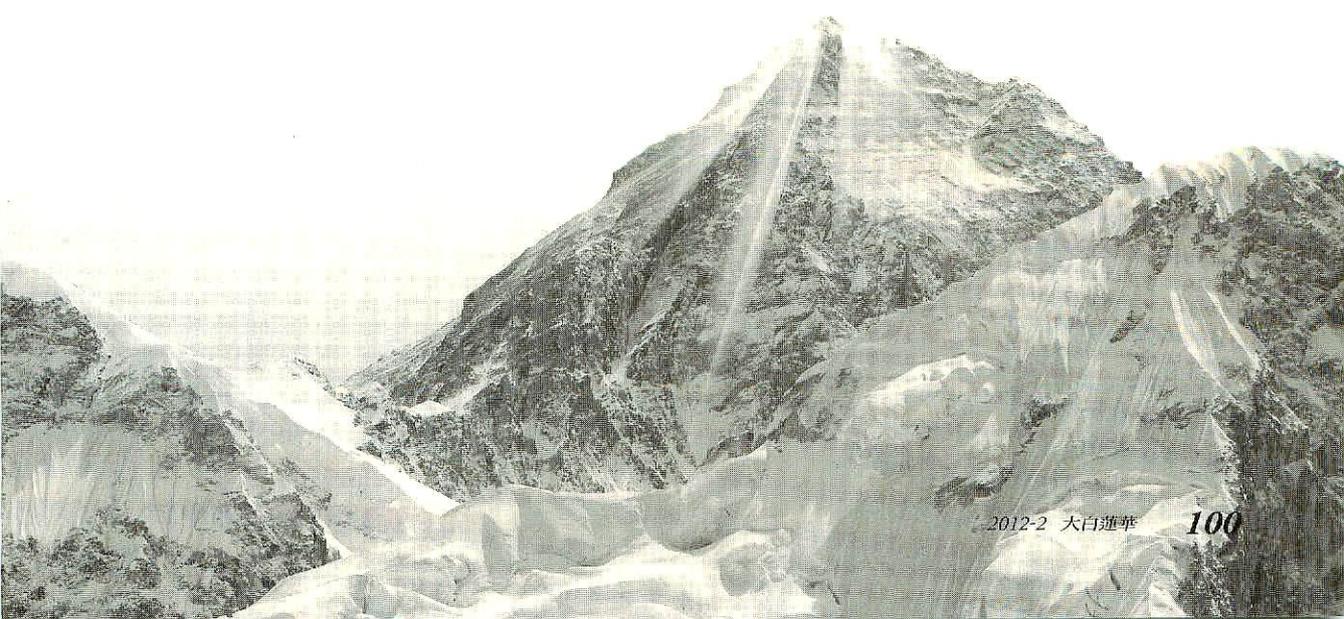
池田大作 監修

# 報恩抄 ②

【ほうおんしょう】 御書302鈔11行目～311鈔17行目

## 現代語訳

教学部 編



〔注1〕「和気妹子」  
小野妹子のこと。  
『聖徳太子伝暦』上

巻によると、聖徳太子は小野妹子を中国へ派遣して、法華経を取り寄せたといわれる。

〔注2〕【持経】常に手元に置いて読誦する経典。

〔注3〕【道宣律師】御書本文は「道運律師」。音通（音の通じる字を用いること）と見て史実に合わせ

た。  
〔注4〕【七大寺】奈良時代までに建立された七つの大寺院のこと。東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、薬師寺、西大寺、法隆寺の七つをいう。

## 次

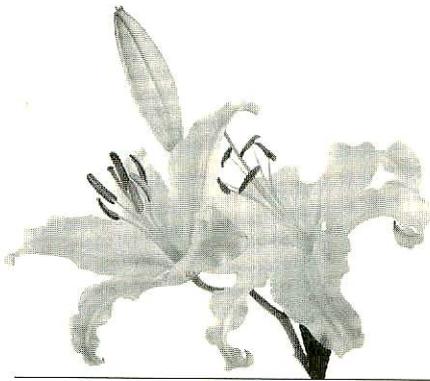
に日本国には、第30代欽明天皇〔補注1〕の時代の13年

（552年）壬申10月13日に、百濟国から経典と釈尊の像がもたらされた。また用明天皇の時代に聖徳太子が仏法を学び始め、和気妹子（注1）という臣下を中国に派遣して、

太子が前世に所持していたという1巻の法華経を取り寄せて、持経（注2）と定められた。その後、第37代孝徳天皇の時代に三論宗・華嚴宗・法相宗・俱舍宗・成実宗が伝えられた。第45代聖武天皇の時代に律宗が

伝えられた。以上で六宗である。孝徳天皇から第50代の桓武天皇に至るまで14代、120年あまりの間は、天台・真言の二宗はなかった。桓武天皇の時代に最澄という一介の僧がいた。山階寺（興福寺）の行表僧正の弟子である。法相宗をはじめとして六宗を完全に習得した。しかし、仏法の核心に達したとはまだ

思えなかったところに、華嚴宗の法蔵法師が著した『大乘起信論』の注釈書を見ると、そこに天台大師の注釈が引用されていた。この天台の注釈書にこそ何か特別のことが書いてあるようであったが、この国に伝わっているか、あるいはまだ伝わっていないのかどうか不審であったので、ある人に尋ねたところ、その人は次のように語った。「大唐の揚州の竜興寺の僧である鑑真和尚は、天台宗の学者であり、また道宣律師（注3）



の弟子である。天宝年間（742年〜756年）の末に日本国に渡り、小乗の戒を広められたが、天台の注釈書を持ってきていながら広められなかった。第45代聖武天皇の時代のことである」と。「その書を見たい」と最澄が言ったので、その人が取り出してお見せしたところ、最澄は一度ご覧になって生死の苦悩についての迷いが消えた。この書によって六宗の趣旨を究明したところ、その一つが邪見であることが明らかに

なった。すぐさま誓願を立て、「日本国の人々は、みな謗法の者の支援者なのか。天下が必ず乱れるだろう」と思つて六宗を批判されたので、七大寺（注4）や六宗のすぐれた学僧は蜂のように一斉に騒ぎ出して、都にいる僧は鳥のように寄り集まつて、天下一同大騒ぎとなった。七大寺や六宗の人々は邪悪な思いが強くなつていった。

〔注5〕【高雄山寺】京都の西北の高雄山にある寺。現在の神護寺に当たる。

〔注6〕【勅宣】天皇の命令をいう。

〔注7〕【謝表】目上の者から配慮を受けた時のお礼の言葉。

ここでは天皇から直々に言葉をかけられたことをお礼の対象としている。

〔注8〕【南岳で拜聴した】天台大師が南岳大師慧思に師事して大蘇山で開悟したことを指す。

〔注9〕【旋陀羅尼】「旋」は、めぐらすの意。凡夫の執着を空の理法へと向けさせる智慧の力。

〔注10〕【三諦】天台大師智顛が立てた空・假・中の3種の法門。諸法（森羅万

ところが、延暦21年（802年）

の正月19日に、天皇が高雄山寺（神護寺）〔注5〕においてになった。天皇は、南都七大寺の名僧14人、すな

わち善議・勝猷・奉基・寵忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・觀徹ら10

人あまりを呼び出し最澄と議論させた。華嚴宗・三論宗・法相宗などの

人たちは、それぞれの自宗の元祖の教えと同じことを主張した。最澄上人は、六宗の人々の主張を一つ一つ

書き付けて、各宗の根本となる經典や論書をはじめとして、さまざまな

經典や論書と照らし合わせて責めたので、六宗の人々は一言の答えもなく、まるで口が鼻のようになってしまった。天皇は驚かれて、詳しくお

尋ねになり、再度、勅宣〔注6〕を下して14人を責められたので、彼らは天皇の仰せに従うという謝表〔注7〕を献呈した。その文には「七大

寺および六宗の学者は、（中略）初

めて仏法の究極の教えを覚った」と

ある。また「聖徳太子が仏法を宣揚してから今日に至る200年あまりの間に講義された經典や論書は数多い。それぞれが互いに自らこそ正しいと主張したが、疑問は解決して

いない。しかも、この最も深遠な円宗（完全な教え）が広く示されたことはなかつた」とある。さらに

「三論宗と法相宗との長年にわたる論争は、跡形もなく氷のように解け、晴れ晴れとしてついに明瞭となった。ちようど雲や霧が晴れて、太陽や

月・星を見るようである」と言っている。

最澄和尚は14人の法門を判定して次のように述べている。

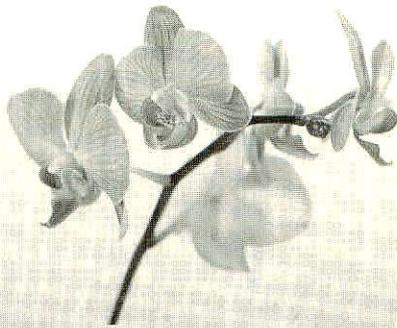
「六宗の人々は、それぞれ法華經を1巻ずつ講義した。説法の声を深い谷にまで響かせて、主人も客もともに三乗の道を巡り、法門の旗を高い峰に翻したところ、長老も幼稚の

者も、欲界・色界・無色界の煩惱を

打ち砕いた。それでもまだ歴劫修行の軌道を変えることなく、大白牛車と門の外にあると言われた牛車とを混同している。どうして初発心の位に無事昇り、『阿』から『荼』までの42字〔補注2〕の法門を火宅の中で覚ることができらるうか」と。

臣下であった和氣広世・和氣真綱の二人は「釈尊が靈鷲山で説かれた妙法について南岳で拜聴した〔注8〕。旋陀羅尼〔注9〕を發揮した深遠な

覺りを天台山で開いた。一乗の妙法が權教に妨げられていることを嘆き、



象しやうの真相じつしやうを三つさんの側面せつめんからとらえたもの。

〔注11〕『大日経義だいにとくぎぎ積しゆ』14卷中国・唐代たいの善無畏ぜんむゐが一行いっぎやうの請こいに応じて大日経だいにとくぎぎを講説かうせつしたものを一行が筆記だしたのが大日経疏だいにとくぎぎしゆで、それを弟子しゆの智儼ちげん・温古おんこらが補訂ほていした書を大日経義積だいにとくぎぎしゆという。

〔注12〕『国清寺こくせいじ』御書本文は「西明寺さいめいせい」だが、史実に合わせて。

〔注13〕『仏隆寺ぶつりゆうせい』御書本文は「仏滝寺ぶつたきせい」であるが、音通と見て史実に合わせた。

〔注14〕『靈巖寺れいがんせい』御書本文は「靈感寺れいがんせい」であるが、音通と見て史実に合わせた。

〔注15〕『理同事勝りどうじしやう』法華経ほけきやうと大日経だいにとくぎぎを比

三諦さんたい〔注10〕の法門ほうもんがまだ世よに明らかにされていなく悲しむ」と言った。

また14人は「善議ぜんぎたちは、過去世かこせでの縁えんにひかれて幸運な世よに生まれ合わせ、希有けうの御言葉ごごんごに接することできた。過去世かこせの縁えんが深くなければ、どうしてこのようになすべからしい時代に生まれることができただろうか」と述べた。

この14人は、華嚴宗けこんしゆの法藏ほふざう・審祥しんしやう・三論宗さんろんしゆの嘉祥かじやう・観勒かんりく、法相宗ほふしやうの慈恩じおん・道昭だうしやう、律宗りつしゆの道宣だうせん・鑑真かんじんなど中国・日本における各宗の元祖げんそらの法門ほふもんを、あたかも瓶かめは変わっても中の水みづは一つであるように受け継いでいた。ところが、その14人が、それぞれそれぞれの邪義じやぎを捨て、伝教でんきやう（最澄さいさう）の法華経ほけきやうに帰依きゐした以上は、末代まくだいの人のだれが「華嚴けこん・般若はんぎや・深密経じんみつぎやうなどは法華経ほけきやうより勝すぐれている」ということができるだろうか。小乗せうじやうの三宗は、彼ら大乘だいじやうの三宗の人々が学ぶもので

もある。大乘だいじやうの三宗が破れた以上は、論ずるまでもない。ところが今でも詳しい事情を知らない者は、六宗はまだ破られていないと思っている。譬たとえを示せば、目の不自由な人が天てん空くうの太陽たいやうや月げつを見ることができず、耳みみの不自由な人が雷かみなりの音ねを聞くことができないために、天空てんくうには太陽たいやうや月げつがない、大空おほぞらには音がないと思ふようなものである。



真言宗しんごんしゆという宗の傳來でんらいについて言えは、日本の第44代の天皇である元正げんせい天皇てんかうの時代に、善無畏ぜんむゐ三藏さんざうが大日経だいにとくぎぎをもつてきて〔補注3〕、広めずに中国へ帰った。また、玄昉げんぼうが『大日経義釈だいにとくぎぎしやく』14卷〔注11〕をもつてきた。さらに東大寺とうだいじの得清とくせい大徳だいてくも同書をもつてきた。これらの書を伝教でんきやう大師だいしはご覧ごらんになっていたが、大日経だいにとくぎぎと法華経ほけきやうの勝劣しやうれつはどうかとお思い

になっていたところ、あれこれ不審ふしんの点てんがあったために、延暦23年えんりやくにじさん（804年）7月に唐たうに向かわれた〔補注4〕。国清寺こくせいじ〔注12〕の道邃だうすい和尚かしよう、仏隆寺ぶつりゆうせい〔注13〕の行滿ぎやうまんらに会って、止観しかんと円頓えんどんの八戒はつがいを伝受し、靈巖寺れいがんせい〔注14〕の順晁じゆんせう和尚わしように会って真言しんごんを相伝さうでんし、同じ延暦年間えんりやくねんの24年（805年）6月に帰国して、桓武天皇かむつてんかうにお会いした。天皇は宣旨せんじを下して六宗の学者がくしやたちに止観しかん・真言しんごんを習ならわせ、彼らかれらを七しち大寺だいじに置おかれた。

真言しんごんと天台止観たいたいしかんの二宗にしゆの勝劣しやうれつは、中国ではさまざま異論いろんがあり、また『大日経義釈だいにとくぎぎしやく』には「理同事勝りどうじしやう〔注15〕」と書かれていたが、伝教でんきやう大師だいしは「善無畏ぜんむゐ三藏さんざうの誤りである。大日経だいにとくぎぎは法華経ほけきやうには劣おとっている」とお分かりになったので、（従来じゆらいの六宗りくしゆに天台たいたい・真言しんごんの二宗にしゆを加えた）八宗はつしゆとはされずに、真言宗しんごんしゆの名なを削けり法華宗ほけきやうしゆの中に含ふくめ七宗しちしゆとされ、大日経だいにとくぎぎについては法華天台宗ほけきやうたいたいしゆにとつての補

較すると、理（説か  
れている法理）は同  
一であるが、事（修  
行における実践法な  
ど）においては、大日  
経が法華経に勝れて  
いるとする説。

〔注16〕「胎藏界・金  
剛界の両界の法」大  
日経に基づく胎藏曼  
荼羅と金剛頂経に基  
づく金剛界曼荼羅に  
よる修法のこと。

助的な経と位置づけ、華嚴経・大品  
般若経・涅槃経などと同列におかれ  
た。

しかしながら、円頓の大乗別受戒  
の大戒壇（補注5）という重大なもの  
を我が国に建てる建てないという論  
争が紛糾していたからか、伝教大師  
は、真言・天台の二宗の勝劣につい  
ては、弟子にも明瞭には教えられな  
かったのだろうか。ただし、『依憑  
集』という書には、紛れもなく  
「真言宗は法華天台宗の正しい教え  
を盗み取つて大日経に入れて、説か  
れている理は同じとしている。それ  
故、真言宗は、天台宗に屈服した宗  
である」という趣旨のことが書かれ  
ている。

まして不空三蔵には次のような逸  
話がある。不空三蔵は、善無畏・  
金剛智が亡くなった後、インドに帰  
り、竜智菩薩にお会いした。この時、  
「インドには仏の真意を明らかにし  
た教理書や注釈書がない。中国にあ

る天台という人の注釈書こそ邪正を  
立て分け、何が偏頗な教えで何が円  
満な教えであるかを明らかにした書  
であるとのこと。恐れ入ります  
が、どうかそれをインドへ伝えてく  
ださい」と竜智菩薩が心を込めて頼  
んだという。このことを、不空の弟  
子である含光という者が妙楽大師に  
語ったのが『法華文句記』の第10巻  
末に記されているが、伝教大師はそ  
れをそのままこの『依憑集』に引用  
している。大日経は法華経よりも劣  
るといふことをご存じであったとい  
う点について、伝教大師のお考えは  
明瞭である。

したがって、釈尊・天台大師・妙  
楽大師・伝教大師は、一致して、  
大日経などを含むあらゆる経の中で  
は法華経が最も勝れているとお考え  
になつていたことは明白である。ま  
た、真言宗の元祖といわれる竜樹菩  
薩のお考えも同じである。竜樹の  
『大智度論』をよくよく調べたなら、

このことは明らかであるはずなのに、  
不空が誤りを交えて訳した『菩提心  
論』に皆がだまされて、このことに  
迷つてゐるのだろうか。

一方、石淵の勤操僧正の弟子に空  
海という人がいた。後には弘法大師  
と呼ばれた。延暦23年（804年）  
5月12日に唐に向け出発された（補  
注6）。中国に渡つては、金剛智・善  
無畏の両三蔵から数えて第3代の弟  
子である惠果和尚という人から胎藏  
界・金剛界の両界の法（注16）を伝  
受した。そして大同2年（807  
年）10月22日に日本に帰国された。  
平城天皇の時代である。すでに桓武  
天皇は崩御されていた。空海が平城  
天皇にお目にかかったところ、天皇  
は空海を引き立て、ことのほか帰依  
なさつたが、平城天皇はすぐに嵯峨  
天皇に取つて代わられたので、弘法  
は引きこもつていた。ところが、伝  
教大師が嵯峨天皇の時代の弘仁13年

〔注17〕【東寺】教主護国寺のこと。東寺の座主である長者は真言宗を統括していた。

〔注18〕【内実のない教え】御書本文は「戲論の法」。単に言葉の上だけの仮構の教えといった意味。

〔注19〕【無明に覆われた境涯】御書本文は「無明の辺域」。

〔注20〕【俘囚】8世紀ごろから律令国家に帰伏した東国の者のこと。

〔注21〕【自在天・那羅延天・婆藪天】いずれもインドで崇拜されていた神々。

(822年) 6月4日にお亡くなりになり、同じ弘仁年間の14年(823年)から、弘法大師は天皇の師匠となり、真言宗を打ち立て、東寺〔注17〕を与えられ、真言和尚と呼ばれた。これから八宗が始まったのである。

弘法は釈尊が一生のうちに説いた教えの勝劣を判定して「第一は真言・大日経、第二は華嚴、第三は法華・涅槃である」と言っている。「法華経は、阿含時・方等時・般若時などの経に対しては真実の経である。



るけれども、華嚴経・大日経に比較すれば内実のない教え〔注18〕である。教主釈尊は仏ではあるが、大日如来に対比すれば無明に覆われた境涯〔注19〕と言って、大日如来を皇帝とすれば俘囚〔注20〕のようなものである。天台大師は盗人である。真言という醍醐を盗んで、法華経を醍醐といっている」などと書かれたので、法華経は尊い教えであると思いが、弘法大師にかかつてはまったく相手にもされないのである。

インドの仏教以外の思想はともかくとして、中国の南北の学者が、法華経は涅槃経に対すれば邪見の経であると言ったことをも上回り、華嚴宗が、法華経は華嚴経に対しては派生的な教えであると説いたことも超えている。同様の例を挙げれば、有名なインドの大慢婆羅門が、自在天・那羅延天・婆藪天〔注21〕・教主釈尊の4人を高座の足に彫刻して、その上にのぼって邪法を広めたよう

なものである。

もし伝教大師がご存命であったなら、必ずや一言あったに違いない事柄である。また、義真・円澄・慈覚(円仁)・智証(円珍)らも、なぜ不審に思わなかったのだろうか。これは天下第一の大罪である。

慈覚大師は、承和5年(838年)に唐に向かわれた。中国で10年の間、天台・真言の二宗を学んだ。法華経と大日経の勝劣について学んだところ、法全・元政らの8人の真言師には「法華経と大日経とは理同事勝である」などと言われた。天台宗の志遠・広修・維罽らに学んだところ、「大日経は方等部に分類される」などと言われた。慈覚は、同じ承和年間の13年(846年)9月10日に日本に帰国された。

嘉祥元年(846年)6月14日に宣旨が下った。慈覚は、法華経と大日経などとの勝劣について中国で

〔注22〕「大日の三部」  
天台宗系で重視する大日経・金剛頂経・蘇悉地経を指す。

〔注23〕「法華経の三部」妙法蓮華経とその開経である無量義経と結経の観普賢菩薩行法経の三つ。

〔注24〕「顕教・密教の二つの教え」真言宗では、大日経のように大日如来が説いた教えを密教とし、釈尊が説いた教えを顕教とする。一般的には、呪術的な修行を用いて成仏を目指す教が密教で、そうではない一般的な仏教を顕教と呼ぶ。

は見定めることができなかつたためなのか、『金剛頂経疏』7巻、『蘇悉地経疏』7巻、以上14巻を著した。この注釈書の趣旨は、大日経・金剛頂経・蘇悉地経の説く教えと法華経の教えは、それらによって明らかにされる理は同一であるが、事相である印と真言は、真言の三部経が勝れているというものである。これは、善无畏・金剛智・不空のつくつた『大日経疏』の趣旨と何の違もない。そうではあつたが、自分の心になお不審が残つていたのでどうか、また自分の心では納得していても、他の人々の不審を晴らそうと思われたのだろうか、慈覚は、この14巻の注釈書を御本尊の前に置いて願をかけて祈られた。「このように注釈書を書いてみましたが、仏のお考えはたやすく分かるはずありません。大日の三部〔注22〕の方が勝れているのでしうか。法華経の三部〔注23〕の方が勝れているのでしうか



か」と祈念したところ、五日目の夜明け前に〔補注7〕にわかにかに夢を見た。青空に太陽が輝いていた。矢でこれを射たところ、矢が飛んで天空に上り、太陽に命中した。太陽が揺れ動いて間もなく地に落ちてしまふと思つた時に夢から醒めた。慈覚は喜んで「私に吉夢があつた。法華経より真言が勝れていると書いた書は、仏のお考えにかなつていたので」と言つて、天皇にお願いし宣旨を出していただく、日本全国に真言の教えを広めた。その上、その宣旨の趣旨として「ついに分かつた。天台の止

観と真言の法とは、深い次元で内実が一致している」と言っている。願をかけた趣旨からすると、法華経は大日経に劣つていようである。実際に宣旨をお願いした時には、「法華経と大日経とは同じ」と言っている。

智証大師は、我が国においては善真和尚・円澄大師・别当和尚（光定）・慈覚らの弟子である。顕教・密教の二つの教え〔注24〕は、ほとんどこの日本国で学ばれたということである。天台・真言の二宗の勝劣について不審があつて、中国へ渡られたのだろうか。仁寿2年（852年）に唐に向かわれた。中国では、真言宗は法全・元政らに学ばれ、「おおむね大日経と法華経とは理同事勝である」とのこと、慈覚の主張と同様であつた。天台宗については良詔和尚に学ばれたが、真言と天台の勝劣については、「大日経は華

〔注25〕「人々を究極の真理へと導いていくための教え」御書本文は「撰引門」。

〔注26〕「止観業・遮那業の両業」止観業は天台の『摩訶止観』を学習する課程、遮那業は大毘盧遮那經(大日經)を学習する課程をいう。

嚴經・法華經などには及ばない」というものであった。7年の間、中国で過ごし、貞観元年(859年)5月17日に日本に帰国された(補注8)。

智証の『大日經指帰』には「法華經でも大日經には及ばない。ましてその他の教えは言うまでもない」などとある。この注釈では「法華經は大日經に劣る」と言っている。その一方で、彼の著した『授決集』には「真言や禪宗は、(中略)もし華嚴經・法華經・涅槃經などと比較すれば、人々を究極の真理へと導いていくための教え(注25)であり、真理そのものではない」とある。『観普賢菩薩行法經記』『法華論記』には「法華經と大日經は同じである」とある。

貞観8年(866年)丙戌5月29日壬申(補注9)に勅宣を出していただいたが、そこには「聞くとことろによれば、真言と止観という二つの教えを立てる天台宗では、どちら

も最高の醍醐味と呼び、ともに深秘と言っている」とある。また6月3日の勅宣には「先師である伝教大師は、すでに止観業・遮那業の両業〔注26〕を開いて、それを自らの宗の修行法とされた。代々の座主はみなこれを相承して、止観業・遮那業を両方とも伝えた。後の人々がどうして古くからの事蹟に背いていいのだろうか。聞くところによれば、比叡山の僧らは、先師の教えに背いてどちらか一方に執着する心を起こしてばかりいるという。先師の残した教えを宣揚して古くからの実践を興隆させることに心を配っていないと言つても過言ではない。そもそも師匠から弟子へと相承する修行は両業のうち一つでも欠けてはならない。法を伝え広めるものの務めとして、どうして止観業・遮那業の両業を兼ね備えないでよいだろうか。今より以後は、両方の教えに通達した人を延暦寺の座主とするのがよい。このこと

を確立して恒例とせよ」とある。

それ故、慈覚と智証の二人は、伝教・義真の弟子であり、その上、中国に渡り、そこでも天台宗と真言宗の勝れた師に会っていたのであるが、二宗の勝負については決めきれなかったのか、「真言の方が勝れている」と言ったり、「法華經の方が勝れている」と言ったり、「法華經に對して大日經は理同事勝である」などと言つたりしている。宣旨を出していただいた時には、二宗の勝負を論ずる人は勅宣に背く者であると戒められている。これらは、みな自語相違と言うほかない。他宗の人なら到底信用しないだろうと思われる。

ただし、「二宗が等しい」ということは、先師・伝教大師の主張である」と宣旨に引用されている。いったい伝教大師がどの書に「二宗は等しい」と書かれているのか。このことはよくよく調べてみなければなら

〔注27〕【法宝法師】中国・唐代の僧で、玄奘の四大弟子の一人。法宝の批判により玄奘は『大毘婆沙論』の訳文を訂正した。

〔注28〕【法護三蔵】中国・西晋時代の訳僧。竺法護と言われる。「正法華経」の訳者。

〔注29〕【法華経囉累品の位置】羅什訳の「妙法蓮華経」では、囉累品は22番目にあるが、法護訳の「正法華経」には終末にある。

〔注30〕【筆受】御書本文は「筆授」。「筆受」の普通と見られる。筆受は、經典を漢訳する際、訳者の言葉を記録する人を用いる。

〔注31〕【漢陽】中国・

ない。

伝教大師のことに付いて、私が慈覚・智証の二人に対して不審を述べたのは、俗に言う「親に対して年齢を競ったり、太陽とにらめっこする」といったようなものではあるが、慈覚・智証の味方をなされるような人々ははつきりした証拠となる文をご用意なさらなければならぬ。要は真実を見極め納得するためである。玄奘三蔵はインドにある『大毘婆沙論』を見た人である。しかし、インドに行つたことのない法宝法師〔注27〕に責められてしまった。法護三蔵〔注28〕はインドの法華経を見たが、彼の訳による法華経囉累品の位置〔注29〕について、中国の人々はインドの法華経を見たことはなくとも「誤っている」と言つたではないか。

たとえ慈覚が伝教大師にお会いしてその主張を学び伝えているとしても、智証が義真和尚から口伝の教えを受けたと言つても、伝教・義真が実

際に書いたものと相違するならば、どうして不審を抱かないでいられよう。

伝教大師の『依憑集』という書は伝教大師が最高の秘伝とした書である。

その『依憑集』の序文には「新たに渡来した真言宗は、『大日経』の筆受〔注30〕を担当した一行阿闍梨が天台宗を相承している事実をなかつたことにし、古くから渡来していた華嚴宗は、天台の影響を受け、その法門を規範としたことを隠している。空の教えにはまりこんでいる三論宗は、元祖の吉蔵が天台大師に誤りを責められて恥をかいたことを忘れ、吉蔵が称心精舎に住む章安大師の説法に心酔したことを覆い隠している。有の法門に執着する法相宗は第3祖の漢陽〔注31〕の智周が天台宗に帰依したことを否定し、青竜寺の良賈が仁王経の注釈にあたって天台大師の『仁王経疏』に基づいた

ことを無視している」などである。

そしてその後「謹んで依憑集1巻を著して、私と心を同じくする後世の哲人に贈る。時に、大日本国第52代〔注32〕、弘仁7年（816年）丙申の年である」とある。そのあと本文には「インドの名僧が『大唐にある天台の説いた教えは、最もよく邪正を区別している』と聞いて、どうしても学びたいと思つて訪問した」とある。

そのあとの文には「この言葉は、インドで仏法が失われたために、仏法を四方の国に求めている証拠ではないか。しかしながら、この中国では、そうした見識のある者は少ない。あたかも母国が生んだ孔子の偉大さを知らない魯国の人〔注33〕のようなものである」とある。

この書は、法相・三論・華嚴・真言の四宗を責めている書である。天台・真言の二宗が五味〔注34〕の中で同じ醍醐味に属するならば、どう

河南省の都市。御書

本文は「撲陽」とな

っているが、普通と

見て史実に合わせた

〔注32〕【大日本国第

52代】第52代嵯峨天

皇のこと。なお「大

日本国」は、御書本

文の「興ること日本」

を意識したもの。

〔注33〕【母国が生ん

だ……魯国の人】魯

孔子は、魯国では政

治家として認められ

ず、諸国を遍歴した

〔注34〕【五味】釈尊

の教えの高低浅深を

牛乳を精製する過程

での5段階の味に配

当し分類したものを

乳味・酪味・生蘇味

・熟蘇味・醍醐味の

五つをいう。

〔注35〕【伝教大師

して責めることがあるか。しかも

不空三蔵らを「魯国の人のようにあ

る」などと書かれているのである。

善無畏・金剛智・不空の真言宗がす

ばらしいものであれば、どうして

「魯国の人」などと悪く言うだろう

か。またインドにある真言が天台宗

と同じであるなら、または真言が天

台宗より勝れているなら、どうして

インドの名僧が不空に天台の教えを

もたらすよう頼み、「インドには正

法がない」と言うだろうか。

それはともかくとしても、慈覚・

智証の二人は、口では伝教大師の

弟子と名乗られているけれども、心

は弟子ではない。その理由は、この

書に「謹んで依憑集1巻を著して、

私と心を同じくする後世の哲人に贈

る」とあるからだ。「私と心を同じ

くする」という言葉は、真言宗は

天台宗に劣ると学んではじめて、

「私と心を同じくする」と言えるの

である。

自分の方からお願ひし出していた

だいた宣言には「先師の教えに背い

てどちらか一方に執着する心を起こ

してばかりいる」とある。また「そ

もそも師匠から弟子へと相承する修

行は（止観業と遮那業という）二つ

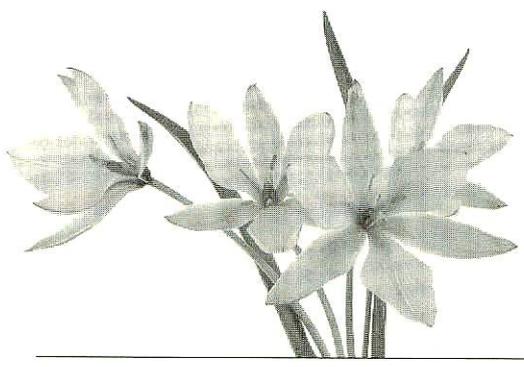
の修行のうち一つでも欠けてはなら

ない」とある。この宣言に従えば、

慈覚・智証こそ先師に背いてばかり

いる人ということになる。このよう

に責めることも恐れ多いことである



けれども、これを責めなければ大日

経と法華経の勝劣が覆されてしまう

と思ひ、命を懸けて責めるのである。

この二人が弘法大師の邪義を責めな

かったというのは、至極当然であつ

たのである。

そうであるから、二人は食糧を食

べ尽くすほどの長旅をし、人に面倒

をかけて中国へお渡りになるような

ことよりも、本師である伝教大師の

法門を完全に理解できるまで学ばれ

るのがよかつたのではなかつたか。

それ故、比叡山の仏法は、ただ伝教

大師・義真和尚・円澄大師の3代

〔注35〕のみであつたということにな

ろうか。天台座主はすでに真言座主

となつてしまった。その名と所領と

は天台山であるが、その主は真言師

である。それ故、慈覚大師・智証大

師は「已今当」の経文を無視された

人である。「已今当」の経文を無視

されたなら、どうして釈尊・多

宝仏・十方の世界の仏たちの敵でな

台宗では、義真を延暦寺の初代座主、円澄を第2代座主としている。第3代慈覚(円仁)・第4代智証(円珍)と続く。

〔注36〕【真言の事相】真言密教では、理論的な側面を教相、実践的側面を事相と称している。

〔注37〕【画像・木像の開眼の仏事】画に描いた仏像や木でつくった仏像に魂を入れる儀式を開眼供養という。仏事は供養・儀礼のこと。

〔注38〕【五畿七道】五畿は山城(今の京都府の南部)、大和(奈良県)、河内(大阪府の東南部)、和泉(大阪府の西南部)、(大阪府の西南部)、摂津(大阪府北部と兵庫県の一部)の畿内5カ国。七道は

いことがあるのか。

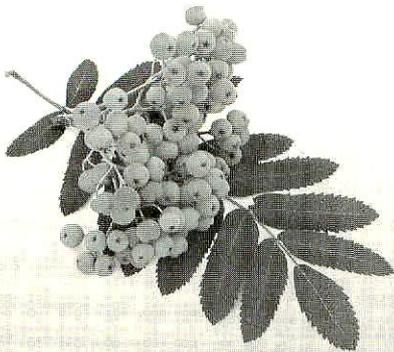
弘法大師こそが第一の謗法の人だと思つていたのに、この二人の言つてゐることは弘法の主張とは比べようもないほど道理に外れたことである。その理由は、水と火、天と地ほど道理からかけ離れたことは、道理に外れていることではあるけれども、(あまりにひどいので)人は受け入れることがないから、その道理に外れたことが影響を及ぼすことがない。弘法大師の教えはあまりに道理に外れたものなので、弟子たちも受け入れられることはない。彼らは、真言の事相〔注36〕だけは弘法の門流に属しているが、その教相の法門については、弘法の教えは口に出しにくいために、善無畏・金剛智・不空・慈覚・智証の教えなのである。慈覚・智証の教えこそが「真言と天台は理では同じである」などと説いているために、誰もがそうなのかと思つてゐる。このように思うので、事相で

勝れているとする印と真言を採用して、天台宗の人々が画像・木像の開眼の仏事〔注37〕を自分たちの手に入れようとするため、日本はみなが真言宗へと転落して、天台宗の人はひとりもいないのである。

同様の例を挙げれば、法師と尼と、黒と青とはそれぞれ紛らわしいので、目が悪い人は見間違つてしまうのだ。僧と男、白と赤であれば、目が悪い人も迷わない。まして目がよく見える人は言うまでもない。慈覚・智証の教えは、法師と尼、青と黒のようなものであるから、智慧のある人も迷い、愚かな人も誤つてしまい、この400年あまりの間は、比叡山・園城寺・東寺・奈良、五畿七道〔注38〕、日本全国みな謗法の者となつてしまった。

そもそも法華経の第5巻の安樂行品には「文殊師利菩薩よ。この法華経は、仏たちの秘密を収めたものであり、諸経の中においてその最上位

にある」とある。この経文のとおりであるなら、法華経は大日経などのあらゆる経の頂上に位置する正しい教えである。そうである以上、善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証らは、この経文についてはどのように解釈なさるのだろうか。また法華経の第7巻の薬王菩薩本事品には「この経を受持する者もまた同じように、あらゆる衆生の中において同様に第一である」とある。この経



東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道。五畿七道で日本全国を表す。

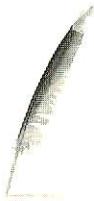
〔注39〕【南の下座】多宝如来の宝塔は東方に出現し、西に面している。南が下座、北が上座である。

〔注40〕【在命中に大師となった】隋の晋王広（後の煬帝）に「智者大師」と呼ばれたことを指す。

文のとおりであるなら、法華経の行者は大中小の河川の中的大海であり、多くの山の中の須弥山であり、多くの星の中の月天であり、多くの光の中の大日天であり、転輪聖王・帝釈天・そのほかの王たちの中の大梵天王である。

伝教大師の『法華秀句』という書には「この経もまた同じように、（中略）様々な経に説かれる教えの中で最も第一である。この経を受持する者もまた同じように、あらゆる衆生の中で同様に第一である（以上、経文である）」と経文をお引きになつて、その次に「天台が『法華玄義』で言うには……（以上、『法華玄義』の文）」と書かれて、先に引いた経文の趣旨を解説して「以下のことが分かる。他宗がよりどころとしていない経は、まだ第一ではない。その経を受持する者も同様にまだ第一ではない。天台法華宗が受持する法華経は究極的な意味で第一である

ので、法華経を受持する者も同様に衆生の中において第一である。仏の教えによる以上、どうして自画自讃だろうか」とある。次いで、詳細は別の箇所譲ることを述べて「諸宗が天台をよりどころとしていることの詳細は、具体的には別の書にある」とある。その『依憑集』には「今、我が天台大師は、法華経を説き、法華経を解釈することにおいて、群を抜いて秀れており、中国で並ぶ者はいない。天台大師こそ如来の使いであるとはつきりと分かる。天台大師を讃嘆する者は福を須弥山のよりに高く積み、謗る者は無間地獄に墮ちる罪を作る」とある。



法華経の経文、天台・妙楽・伝教の注釈の趣旨によるなら、いま日本国には法華経の行者は一人もいないのだ。インドでは、教主釈尊は宝塔

品で、あらゆる仏を集められて大地の上に列座させたが、大日如来だけは宝塔の中の南の下座（注39）に座らせ、教主釈尊自らは北の上座に着かれた。この大日如来は、大日経の胎藏界の大日如来および金剛頂経の金剛界の大日如来両方の主君である。これら両部の大日如来を家来などと定めた多宝仏の上座に、教主釈尊は席をとられた。これが法華経の行者にほかならない。インドでは、以上のとおりである。中国では、陳の皇帝の時、天台大師が南三北七を責めて勝利をおさめ、存命中に大師となった（注40）。「群を抜いて秀れており、中国で並ぶ者はいない」と言うのはこのことである。日本国では、伝教大師が六宗を責めて勝利をおさめ、日本で初めて大師号を授けられ根本大師と呼ばれた。

インド・中国・日本で、ただこの3人だけが、経文に説かれる「あらゆる衆生の中において（諸経の中で

〔注41〕「涇水・渭水」中国・陝西省を流れる涇水と渭水のこと。両河は合流した後、黄河に注ぐ。涇水は常に濁り、渭水は澄んでいるため、合流の後もその違いがはっきりとわかり、二つの流れのように見える。古くから清濁の譬えに用いられてきた。

〔注42〕【梟鳥】フクロウは成長すると母を食う不孝鳥といわれ、不孝者のたとえに用いられる。

〔注43〕【破鏡】父を食うといわれる想像上の動物。

〔注44〕【智証の門流】園城寺と慈覚の門流の比叡山。慈覚系の禪が天台座主を引退して、智証系の余慶が任命された時



法華経が第一であるのと) 同様に第一の人にあたる。それ故『法華秀句』には「浅い教えは易しく、深い教えは難しいとは、釈尊による判定である。浅い教えを捨てて深い教えを採用することは、仏の心である。天台大師は釈尊に従い、法華宗に力を添えて中国に広め、比叡山の門は天台大師から相承を受け、法華宗に力を添えて日本に広める」とある。仏が亡くなつてから1800年あまりの間に、法華経の行者は、中国

に1人、日本に1人、以上2人であり、これに釈尊をお加え申し上げて、以上3人である。中国の古典に「聖人は1000年に1度出現し、賢人は500年に1度出現する。黄河は上流では涇水・渭水(注41)という二つの流れに分かれているが、500年に1度片方が澄み、1000年に1度両方が澄む」と言われているのは、確かなことだったのである。

ところが、日本国では、比叡山だけに、伝教大師の時、法華経の行者がいらつしやつたということになる。義真・円澄は、第1代・第2代の天台座主である。第1の義真だけは、伝教大師に近かった。第2の円澄は、半分は伝教の弟子、半分は弘法の弟子である。

第3の慈覚大師は、初めは伝教大師の弟子のようであった。40歳で中国に渡つてからは、名は伝教の弟子であり、伝教の残した延暦寺を継が

れたのであるが、法門はまったく弟子ではない。しかしながら、円頓戒だけは、また弟子のようであった。こうもりのようなものである。鳥でもなく鼠でもない。母を食らう梟鳥(フクロウ)〔注42〕という鳥、父を食らう破鏡〔注43〕という獣のようなものである。法華経という父を食らい、法華経を受持する者という母を噛むのである。慈覚が太陽を射たと夢に見たのは、このことである。それ故、死去の後には、墓がないままなのだ。

智証の門流の園城寺と慈覚の門流の比叡山〔注44〕は、修羅が帝釈と戦い、悪竜が金翅鳥と戦うように、不断に争いをしている。一方が園城寺を焼けば、他方が比叡山を焼く。智証大師が本尊としていた弥勒菩薩も焼けてしまった。慈覚大師の本尊も大講堂も焼けてしまった。この世にいながら無間地獄の苦を受けた。ただ伝教大師の建てた根本中堂だけ

に慈覚門下と智証門下の争いが起こり、智証系は園城寺に移った。園城寺は9世紀中ごろ智証が再興した寺院。  
〔注45〕「仁和寺」京都市右京区御室にある寺。



仏教がヨーロッパの精神風土に新たな展開をもたらさないとは、だれもいいえません。あなたがたの成功を祈っていることをご承知おきください——人間革命運動に期待を寄せる作家のアンドレ・マルロー氏と(1975年5月、フランス・パリ郊外で)

が残っている。

弘法大師もまた残した寺がない。弘法大師には「東大寺で受戒を受けない者については東寺の長者にしてはならない」などと注意事項を述べた文書がある。しかし、寛平法王(宇多天皇)は仁和寺〔注45〕を建立して東寺の僧をそこに移したが、「我が寺には比叡山の円頓戒を持たない者を住まわせてはならない」との宣言は明白である。それ故、今の東寺の法師は、鑑真の弟子でもなく、弘法の弟子でもない。戒については伝教の弟子である。しかし、一方では伝教の弟子でもない。伝教の法華経を否定しているからである。

弘法は、承和2年(835年)3月21日に死去したので、天皇のご配慮を得て遺体が葬られた。その後、人をたぶらかす弟子たちが集まって「弘法大師はお亡くなりになったのではなく禪定に入られた」と言った。「禪定に入っている弘法大師の

〔注46〕【三鈔】真言密教の祈禱に用いる道具。

〔注47〕【十八道】密教に入門する時に言う修行。

〔注48〕【本寺と伝法院】本寺とは高野山にある金剛峯寺のこと。伝法院はもとほ覚鑿が高野山の中に建てた堂。覚鑿は根来に移っていたが、覚鑿派の異名として用いられている。大聖人当時、高野山では覚鑿派と反覚鑿派が激しく争っていた。

〔注49〕【道士】道教の修行者。

〔注50〕【迦葉摩騰・竺法蘭】二人はともに中国に初めて仏教を公式に伝えたといわれる中インドの僧。

〔注51〕【秦の趙高】中国・秦代の宦官。

髪を剃って差し上げます」とか、「三鈔〔注46〕を中国から投げられた」とか、「太陽が夜中に現れた」とか、「その身のままで大日如来となられた」とか、「伝教大師に十八道〔注47〕をお教え申し上げた」などと言つて、師匠の徳を挙げることによつて智慧のない代わりとし、自分たちの師の邪義に力を添えて、天皇や臣下たちをたぶらかすのである。

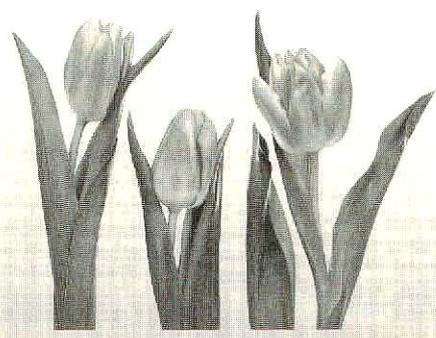
また高野山には本寺と伝法院〔注48〕という二つの寺がある。本寺は弘法の建立した大塔で、本尊は大日如来である。伝法院というのは正覚房〔覚鑿〕の建立したもので、本尊は金剛界の大日如来である。この本末の二寺は、いつも合戦をしている。比叡山・園城寺の例と同じである。

うそが積みもり積もつて、日本に二つの災いが出現したのだろうか。糞を集めて梅檀としても、焼けばただ糞の臭いしかない。大うそを集め

て仏と自称しても、ただ無間地獄に墮ちるだけである。インドの尼隄外道の塔〔補注10〕は、数年の間は人々に大いに利益を与えたけれども、馬鳴菩薩の礼拝を受けて、たちまち崩れてしまった。鬼弁婆羅門の帳〔補注11〕は長年の間、人々をたぶらかしたけれども、阿湿縛窶沙〔馬鳴菩薩〕に責められて破れてしまった。狗留外道は石となつて〔補注12〕800年を経たところで、陳那菩薩に責められて水となつた。道士〔注49〕は、中国の人々をたぶらかして数百年に及んだが、迦葉摩騰・竺法蘭〔注50〕に責められて、道教の經典も焼けてしまった。秦の趙高〔注51〕が国を奪い取り、王莽〔注52〕が帝位を奪つたように、真言宗は、法華經の位を奪つて、大日經の所領としている。法の王である法華經がすでに国から消え去つた以上、人の王である天皇がどうして安穩だろうか。

(以上、上巻)

〔補注1〕【第30代欽明天皇】現在では一般に第29代とされるが、中世では第30代とするのが一般的であった。



〔補注2〕【阿】から「茶」までの42字

〔阿〕「茶」は梵語（サンスクリット）の表記する42字を音写する漢字のうち最初と最後。般若經・華嚴經などでは42字になぞらえて修行の位を四十二字門として定めている。すなわち初めの阿字が菩薩の最初の位である初住にあたり、最後42番目の茶字が妙覺（仏）の位を表す。

〔補注3〕【善無畏三蔵】大日經をもつてきて、元正天皇の時代にインドの善無畏三蔵が来日して大日經をもたらしたという伝説は明らかに史実ではないが、中世には広く知られ

始皇帝に仕えていたが、皇帝の死後、その長子・扶蘇を殺して末子・胡亥を後継者とし、権力を掌握。反対派を次々と粛清したが、国中に反乱を招いた。

〔注52〕【王莽】中国・前漢の末期の政治家。漢の帝位を奪い、新と称する王朝を開いたが、内乱が続発する中で新はほどなく滅亡した。

ていたもので、平安時代の歴史書『扶桑略記』第6巻などにも記されている。聖武天皇の時代に日本に来て南都七大寺の一つである大安寺に住したインドの菩提遷那(婆羅門僧正ともいう)と善無畏を混同したために生じた伝説とされる。

〔補注4〕【唐に向かわれた】御書本文は「入唐」であるが、延暦23年7月は伝教大師(最澄)が日本を出発した月で、唐に到着したのは9月である。(補注6)を参照。

〔補注5〕【円頓の大乗別受戒の大戒壇】伝教大師が従来の戒壇に代わるものとして建立を目指した大乗の戒壇のこと。円頓とは、円満にして欠けることなく速やかに成仏するという法華經の教えをいう。大乗の菩薩戒には撰律儀戒(仏の定めた戒律のすべてを受持して悪を防ぐこと)・撰善法戒(あらゆる善法を修すること)・撰衆生戒(あらゆる人々を教え導きその利益のために力を尽くすこと)の三つ(三聚淨戒という)があるが、この三つをまとめて受けることを通受、撰律儀戒だけを受けることを別受という。出家者の場合、通常は別受では律(ヴィナヤ。出家教団の規則)を受けるが、伝教大師は別受戒において大乗の梵網經に説かれる戒(十重禁戒・四十八輕戒)を用いることを主張した。この大乗

戒を授ける場所が円頓の戒壇である。

〔補注6〕【延暦23年5月12日に唐に向け出された】御書では空海(弘法)がこの日に入唐したとされる。空海は伝教大師と同じく延暦23年5月12日に難波津を発つて九州に向かい、7月、肥前国松浦郡(現在の佐賀県)の田浦から遣唐船に乗り、唐に向かった。

〔補注7〕【五日目の夜明け前に】御書本文は「五日と申す五更に」。五更とは、一夜を五分した時刻のこと。午後7時ごろから9時ごろまでを初更とし、2時間ごとに二更・三更・四更・五更とした。ここでは、その5番目(午前3時ごろから5時ごろ)を指す。

〔補注8〕【7年の間……帰国された】智証(円珍)が日本を發つたのは仁寿3年(853年)で、唐に着いたのは同年8月16日。帰国は天安2年(858年)6月22日とされる。在唐は約5年である。

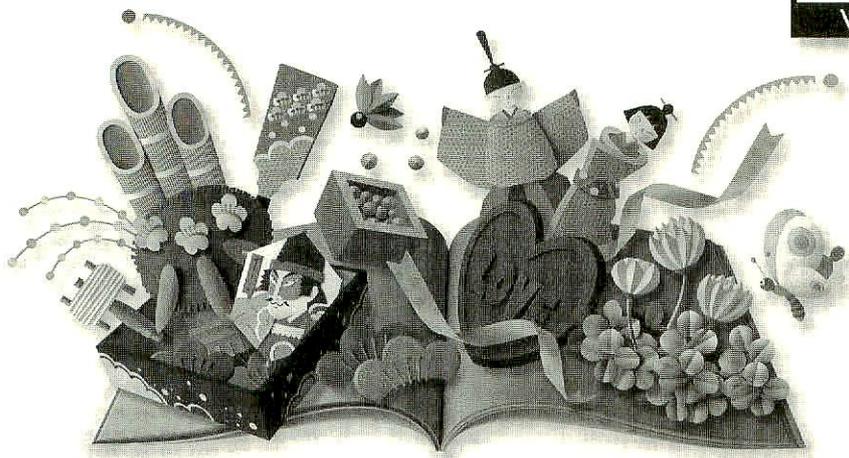
〔補注9〕【5月29日壬申】御書本文は「四月二十九日壬申」。正しくは「5月29日」。ちなみに「4月29日」の干支は癸卯。

〔補注10〕【尼隄外道の塔】『付法藏因縁伝』第5巻にある。尼隄外道とはジャイナ教徒のこと。かつて月氏国の王が道を歩いている時に、外道の塔が七宝で荘嚴されているのを見て、如来の塔と思い、香華をそえ、偈を讀ん

でその徳をたたえた。すると、その塔が崩れ落ちてしまった。王は驚いたが、ある人が「それは外道の塔です。王の福德がすばらしいので、王の礼拝で破壊したのです」と教えたという。この月氏国の王は、熱心な仏教信者で、戦争の結果、馬鳴菩薩を手に入れて、大いに敬喜したという。

〔補注11〕【鬼弁婆羅門の帳】鬼弁婆羅門はインドのパラモン(Parasmani)の一人。『大唐西域記』第8巻によると、鬼弁婆羅門は議論が巧みで世間から尊敬を受けていた。人が彼を論駁すると、帷を垂れてその中から答えていたが、馬鳴菩薩は、婆羅門が鬼神や妖怪の力を借りて議論していることを見破り、彼を責め立てながら、隙を見て帷を開くと、婆羅門が妖怪にものを尋ねているところであったという。

〔補注12〕【拘留外道は石となって】拘留外道は、古代インドの六派哲学の一つ勝論学派のこと。唐の智周の『成唯識論演秘』などでは、数論外道(六派哲学の一つ)が石に変わったが、陳那の説を右に書いたところ碎けてしまったという。しかし、同じく唐の神清の『北山録』に慧宝がつけた注では、勝論外道が変じた石が陳那の批判によって碎けたと思われる。大聖人は後者の説を採用したと思われる。



## 全ページ読破に挑戦

サラリーマン時代、職場の人間関係と急激な円高による業務一時停止の大波に飲みこ

まれそうな苦境に立たされていた時、通勤電車の中で開いた「大白蓮華」の記事に心救われる思いがしたことを覚えていました。

以来、平成8年の1月号から今日まで16年間で全ページの読破に挑戦してきました。「巻頭言」をはじめ、「社会で光る」等は、太陽会の教材にもなっているのです、何回も読みます。

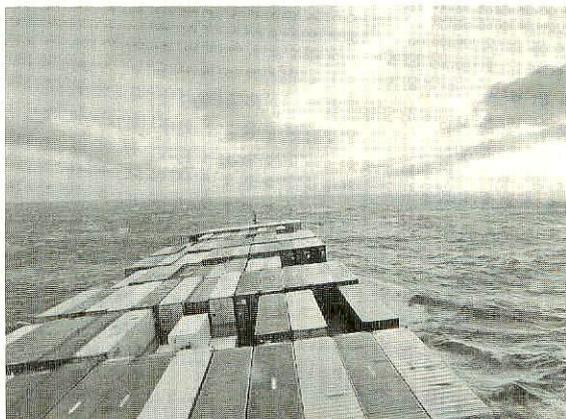
「勝利の経典『御書』」に学ぶは、その深い展開に目を見張る思いで夢中になって読みます。五大部の「現代語訳」は難解な御書では気付かなかったことが理解できて、得した気分になります。

「生涯求道!」の心意気で、今後も豊富な内容の「大白蓮華」の全ページ読破に挑戦していきたいと、深く決意しています。

(神奈川県・福山克廣)

## 波濤を越えて

波濤会 第24回写真展から



「いざ、闘いの海へ」

日本海から津軽海峡を抜け、冬の北太平洋へ。途端に天候が悪化してきた。これからの数日間は大時化の海で格闘してゆかねばならない。心を強く持て。(撮影者:近森茂雄)

## 一人を大切にすること

「大白蓮華」は、どこも重厚で素晴らしいと思います。特に大感激したのは、女子中等部員が、「卒業文集にメッセージをいただきたい」と池田先生にお願いしたことに対し、先生が何度も推敲され、一語一句に深い思いを込めて、直

筆でメッセージを認めて送ってくださったエピソードです。寸暇を割いて、未来部の「一人」を全魂で激励される。学会の未来と、多くの人の心を開いていく先生の心に、私にできることは何でもさせていたいただきたい」と、祈り、決意しています。

(東京都・若井典子)

神奈川

## 桜花地区

川崎総県・塚越勇勝支部



**私** たちの広布の舞台は、蒲田支部で「2月闘争」の指揮を執られていた池田先生が、激務の合間を縫って訪れ、てくたさった会場があった地区です。現在は1200世代の高層マンション

を抱える大きな地区へと発展。使命の舞台上で活躍する多くの人材を輩出しています。「伝統の2月」60周年を大勝利で荘厳、さらなる創価前進の歴史を開いていきます。

## 我が地区の誉れ

香川

## 白鷺地区

高松本陣圍・御殿支部



**平** 成5年12月3日、池田先生と奥様は、高松市の香東川沿いを1キロも歩いてくださいました。この地が我が地区の舞台です。一昨年2月に入会された中澤葉子さん

の三女・正妃さんが、昨年10月に入会。11月27日には、ご主人の敬次さんが入会しました。「我らは世界一の幸福家族なり」との先生の指導を胸に、元気はつらつと大前進而していきます。

## 「我が地区の誉れ」写真・原稿募集

地区の「誉れ」の話題(150文字程度。趣旨を変えずに直させてください)と写真(座談会や会員の記念撮影など、話題に即した写真)を、組織名(区・本部・支部・地区)、地区部長・地区婦人部長の郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記の

うえ、送ってください。送り先は「読者の広場 我が地区の誉れ」係(〒160-8070 新宿区信濃町18 聖教新聞社 大白蓮華編集部)。なお、お送りいただいた写真等はご返却できませんので、あらかじめご了承ください。

ますます清新な決意で

「大白蓮華」が届いて一番に見るのは、池田先生の講義「勝利の経典『御書』に学ぶ」です。自分が学び、命に刻んで、さらに皆と共に学びあえることが毎月の楽しみです。

1月号では、年の初めの決意を促してくださいる内容、また、シニアと呼ばれる私たちが自らをも若返らせ、青年学会の組織を清新にしていこう責任があるのだと学び、夢と希望が湧いてきました。70歳の古希祝いを終え、ますます、盛んに成長していきたいと思えます。

そして、信心を根幹として成長していけば、福運がつき、心の財が積み、輝いていけるのだと胸が熱くなりました。先日、宇宙飛行士が、「宇宙から見た地球には国境線がありませんでした」と伝えていました。戸田先生が60年前

字数は500字前後。趣旨を変えずに直さず送る場合もあります。郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記。  
送り先は「読者の広場」(〒160-8070 新宿区信濃町18 聖教新聞社 大白蓮華編集部)。採用の方には図書カードをお送りします。

# 読者の広場

We've Got Mail



に叫ばれた「地球民族主義」が、今、現実として世界に広がっていると思います。大きな心で、大きく実証を示していきます。(大阪府・廣中征子)

「共に集い! 共に勝つ!」——1月号の「巻頭言」は、共戦の大切さ、素晴らしさを教えてくださったと思います。

ともすると、日々の生活に埋没し、自己満足してしまいがちの私ですが、会合に出て、生命力溢れる感動的な体験談を聞き、仏法の偉大さをいつも再確認しています。  
学会の会合は、皆さんの率直な意見や、信心で苦難を乗り越えた体験を語り合う中で、前向きな気持ちになります。自分も苦しみを打ち破ろうと

決意するとともに、人のために動こうとする、他の世界にはない本当の幸福への道を示してくれる場であると、いつも感じます。共に勝つ仲間を増やしていきます。  
(東京都・大井直美)

「世雄たれ大学会」の中で池田先生の指導、一人一人への励ましの言葉を通して、あらためて言葉の力の偉大さを知りました。

まず徹底して聞くこと。希望の目標を示してあげること。何よりも、必ず解決し、立ち上がらざるにはおかないという気迫。一度会った方は、10年たっても30年たっても忘れない先生の振る舞いなど、自身に先生が直接、指導してくださっているような思いになりました。  
後輩のために人間革命し、

先生の心、学会の心を伝えられる個人指導をしようという決意しました。  
(佐賀県・政田登喜子)

新連載の「新入会の友と語る座談会御書」を読み、共感することが多くありました。1月2日で私は入会1周年を迎えます。まだ知らないことも多く、日々勉強です。御書講義は、聞いたその場では分かったような気がするのですが、家で一人になり、同じ御書を読み返しても、「はて?」となってしまうがちです。新入会の方に分かりやすく解説していることが、身になりやすく、ありがたいなど感じました。  
(兵庫県・宮崎奈美)

「青年は変革力」の「挑む私のチャレンジ・ノート」

の記事に感銘を受けました。池田先生は常々、「親孝行をしなさい」と指導されています。その通りに、勝利を勝ち取った青年の体験を見て、胸が打たれました。  
紹介されていた2人の方のお母さんも、素晴らしと思います。そして、偉大な母ありて、この青年たちがあったんだなと思いました。  
(静岡県・築地正子)

## A Postscript 編集後記

- 若き学生を徹して信頼し育む師。青年学会拡大を学ぶ(伸)
- 青年拡大の追風へ誌上セミナーを開始。ご活用ください。(啓)
- 新入会と語る御書。期待に感謝。感動、納得を届けたい。(真)
- 熱く師を語る志村社長。師を持つ人は幸福と改めて。(聖)
- 後継の姿に、使命を自覚した時人は強くなることを実感(隆)
- 「我が地区の誉れ」に投稿続々。最前線こそ要と再確認。(公)

アートディレクション/柳トランブス  
制作協力/柳クリエティブメッセンジャー

The World Poet Laureate Sings

うた  
世界桂冠詩人は謳う

君よ

新しい毎日を！

新しい挑戦を！

そして

新しい目標の前進を！

その的確なる

人生行路を知れば

生命的　そして歴史的な

所願を満足させゆく

人間の極致の普遍的真理を

感じ取るに違いない。

「人間主義を詩う」

(2002年4月)

